

その国は天にあった——今は誰一人、覚えていないとしても。

「ごめん、ラピス……俺には、無理だったみたいだ」

その国と同じように、誰の記憶にもいない銀色の髪の少年は。

「それなら——……俺の役目は、終わったと思う」

自らである剣を放棄し、空へ返すことを選んだ。

「悪いけど。後、よろしくな、水華」

それはとても、目だけは安らいだ澱みなき青で。

しかし哀しげに口を引き結び、瑠璃色の髪をした少女の力になれなかった事だけ、心から悔やむ微笑みだった。

「ウソ……ユーオン——……!?!」

天空の島。遙か古の、忘れ去られた聖なる船の上で。

その船を永く包み込む、青く虚ろな光の海へ。

少年は自らを生かしていた剣を、躊躇なく手放し——

絡繰り人形の糸が切れたように、少年は力を失い崩れ落ちた。

「……ちよつと。洒落にならないわよ、これ」

眼下の空に消えていった剣に、茜色の髪の天人たる少女は。息を絶った少年の抜け殻を前に……それだけ凜と断言した。

C r y   p e r   B / R A .

—red ablution—

C 2 ・ 終 盤

暗く重い海の底に、その青銀の剣は長く眠っていた。

その剣は、水脈を司る化け物の力を受けるために造られ……  
化け物をヒトの形とする眼か、命の力を核とする宝剣であり。

「……お？」

二つある眼の内、既に一つを失っていた化け物の少年は。

残った眼の力を剣に渡した事で、ヒトとしての形を失い……  
その命をも、ある空つぼの『神』の力で剣と一つにされていた。

「何だ……またぞろ秩序を乱す輩か、はぐれ神でもいたのか？」

黒い蛇のような柄の中心に填まる透明な玉は、それも少年と  
同じ化け物の眼であり。本来はその場所には無く、少年が剣と  
なる前に身に着けていた事で、剣の一部となった玉だった。

「こりや珍しいな。剣霊か神剣か——まだどっちつかずだけど」

海の底のように暗い、星ひとつ見えない夜の空の下。

人工の灯りの無い地で、鳥のように樹上で休息をとっていた  
黒い人影が——下僕たる黒い鳥から受け取った空の拾い物は。

まじまじと宝の剣を眺める黒い『神』と、古の縁故があると  
……この邂逅の時はまだ、気が付くことはないままで——

——全く、と。

ある空に浮かぶ島に急遽呼び出しを受けるといふ、常識では  
考え難い事態に、その金色のふわふわとした髪で、尖った耳と  
紫の目を持つ女は、自身を呼び出した男を不機嫌そうに見た。

「私は妖精は嫌いとおれほど言ってるでしょう。よりによって、  
ヒトをこんな所まで呼び付ける理由がそれとはね」

「すまない。ナナハ以外にはどうしても、相談出来そうな奴が  
思い浮かばなくて」

前髪の一部が黒く染まる灰色の短い尖った髪と、髪よりも薄い  
灰色の目の男は、袖の無い黒の上衣と足の線に沿った下衣と、  
夜の空では寒そうに見える恰好で悩ましげに佇む。

方形の石室という珍しい場で、中央にせり上がった石の台に  
横たわる、金色の短い髪で尖った耳を持つ少年の死体を前に、  
町娘のような姿の女は冷静ながら大きな溜め息をつく。

「致命的な外傷は無し、精霊たる力も残ったままで、生命活動  
だけが停止しているのは……その宝剣が無くなった影響とみて、  
間違いはないでしょうね」

夕闇が訪れる前に、薄暗い空へ剣を手放した後、その状態に  
なったという少年は。袖が無く首を覆う襟のある黒い上衣と、  
蝶型のペンダント、紫の袴という珍しい恰好をしており。

「今までこの子、剣を離す事はなかったんでしょ？ この羽の代りに、剣を自我の拠り所としていた可能性が高いわ」

蝶型のペンダントを手に取り、女は強く眉をひそめる。

「私が会った頃には、この羽は無かったはずだけど……あればすぐに、この子が妖精だと断言出来たはずだし」

過去に少年と面識のあった女の言に、男も難しい顔のまま強く頷いた。

「俺も最近気が付いた。こここの所ユーオン、精霊としての力を使えるようになってきてきたからな……多分この羽を手に入れた影響だったんだろう」

時により金色の髪が銀色に変わる少年は、金色の髪の時には、体の激しい動きや『力』の制御が上手く行えず、化け物としてかなり弱小な部類にあり、

「そもそも、普段のこの子が精霊そのものだったのよ。だからこの子が生きて動く事自体が、精霊が制御されているという事……この剣に宿った誰か——『銀色』が傍にある限り、精霊の制御を続けていたんでしょね」

その弱小さは制御の一貫だったのだと。『銀色』の時は少年が大きな力を発揮する事を知っていた女は、納得げに呟く。

「……でもユーオンは、『銀色』の時の事を、いつもはつきり覚えてなかったのは？」

「この体は羽の無い妖精——精霊そのものだけど、精霊は魂が無いから、宿主無しには記憶を保つ事が出来ないの。羽の無い妖精は宿主の無い精霊と同じ、命だけ……無意識の存在なのよ」

自身も妖精たる女は、そこで一層悩ましげに顔を歪めると、

「だから『銀色』は、宿主でない存在なんでしょう。宿主なら共に在る間は全ての記憶を共有するはずだし、でもこの体——精霊を制御出来て、不完全でも記憶を維持出来たという事は、精霊と似た霊気……自然を基盤とする化け物のはず」

という事は——と、男は躊躇いがちに、その事実を確認した。「ユーオンは、何かの事情で羽から剣に自我を遷した妖精でもなく……ただ剣に宿った、違う化け物だったという事か？」

「ええ。この羽をもがれた妖精を操る、他人だったんでしょ」  
その、自ら以外の体に乗っ取った誰かの呪われた在り方に、男はただ——痛ましげな顔をする。

「……ここに羽があるなら、それならこの子は……元通りの、妖精としてなら目を覚ませるのか？」

おそらくはそれを考え、剣に取りつけていたペンダントを外し、身につけてから剣を捨てた……誰かの哀しい願いを思うように。

「この体をあくまで助けるためなら、それが一番でしょうね。精霊としての命を動かさなければ、このまま行けば近い内には、妖精としても本当の死をこの子は迎える」

元々かなり力を消耗し、命が空に近い状態だった少年の体は、「今までこの体を動かした剣の力は、そもそも限界に近いはず」  
命に残ると女は語り。それはつまり——妖精たる体の主は十分に再起出来るが、剣である誰かは寿命が近いという事でもあり。

けれどと女は、腕を組みながら呆れたように首を横に振った。

「ここまで固定化してる羽は、初めて見たわ。これをこのまま元通りにくつつけるのは至難の業よ」

ペンダントと出来る程小さく硬くなっている蝶のような羽は、原形を留めていれば再接合はそう難しくないと云うが、

「自分の意志でこうなったとしか思えないくらいに強固だわ。

これを熔かそうとするなら、サキなみの『改心』の介入か——もしくは『黄輝の宝珠』レベルの力が必要でしょうね」

「……ああ。俺程度の介入力じゃ、何とも出来そうにない」

彼らが現在いる天空の島から遠くない位置にある、この島よりヒトの居住に適した『地』という天空の島に存在する、世界の力を司る『宝珠』という秘宝に関わった事が、そもそも少年が空の上まで来た理由だった。

『火の島』というこの天空の島——正方形の平らな地表の、辺縁に石柱が数メートルおきに立つ、ごく小さな石の建造物は、世界の五大聖地の一つと呼ばれており。

島の中央の、正方形で石柱に囲まれた神殿以外は、島に来るワープゲートの泉しかない寂しい場所だが、『宝珠』の祭壇である『地』に行くにはこうした聖地を経由する必要がある。

『地』の軌道はほぼ海の上だし。陸地に気流で運ばれても、

この高度から落ちたなら、剣の方も無事とは思えないわ」

「……………」

「今頃は海の底か、地上で粉々になっているか。最悪、誰かにぶち当たって巻き込んでる可能性もあるんじゃない？」

皮肉げな顔で男を見る女に、男はひたすら苦い顔をする。

「諦めた方がいいんじゃない？ 剣も羽も戻せないなら、もうこの子はどんな形でも目を覚ます事はない。それとも今から、

『黄輝の宝珠』獲りのリベンジにでもいく？」

「いや、水華を回復させる時間が必要だ。宝珠の継承の方法も今はわからないし、色々あつてラピスも疲れ切ってる」

「そう。せつかく敵も打撃を受けたでしょうに、難儀な事ね」

男はこの島に、少年以外に二人の少女を同伴してきていたが。少年の体を診るからと席を外させ、神殿の外で携帯用テントに待機させていた。

「あれだけ敵を消耗させれば、偵察としては充分以上だ」

男達が日中に訪れていた『地』で起きた戦闘により、少年と、二人の少女は消耗し。そのさなかで男も大きな負荷を受けたが、代りに男には様々な情報が得られた日でもあった。

「それにしても本当に……。パルシイ・デイレス・ディアルスが『地』にいたというの？」

これまで男がある国の女王から頼まれ、探し続けていた人間……幼い頃に攫われ、今も行方不明の王子の名を女は口にする。

女がこの呼び出しに応じたのも男からその名を聴き、王子を探して長く旅に出ている女王の代りに、『ディアルス』という国の留守を預かっていたからだだった。

「ああ。外見は子供のまま成長が止まったようで……顔付きも違ったから、一見はわからないだろうが。確かにあの子の色は、ディアルス王家に伝わるものと同質だった」

ヒトの姿をしながらヒトならぬ力を持つ者——『千族』である男に、自国の戸籍を与えた女王は男とは長い付き合いであり。人間でありながら力を司る国宝を受け継ぐ事で、魔法の使用を可能とする王家の血を持つ者は、『力』を見る特殊な眼を持つ男からは同じような色に見えるのだが、

「貴方の『心眼』なら、それは確かでしょうけど……それならいったいどういう事なの？」

「わからない。人間は人間の体でも、別の『力』もあるようで……しかも見た目は男の子の、でも女の子だった」

はい？ と女は、あからさまに怪訝な顔をする。

「色もあの子一つのものだけじゃなかった。けれどそれが——水華やユーオンを脅かした人形使いだ」

数々の悪魔と契約する事で、悪魔が宿った天使のような人形を動かす、攻撃手段とする者を敵として男達は戦っていた。

「この件はまだ調査が必要だ。俺はしばらくここに留まる……詳しい事がわかるまで、誰にも話さないでくれ」

「そう。その状態でわざわざヒトを呼び出して、協力しろって虫の良い事を言うわけね」

「俺だって一刻も早く終わらせたいんだ。あの子供が王子なら、お互い心配事が片付くだろう」

男が女を呼び出したのは、心置きなく調査をするためであり、

「一緒に戦えとまでは言わない。ここに俺達が籠城出来るよう、境界を張ってほしいのと、ユーオンの体の維持をしてほしい」

「当たり前よ。私はディアルスを預かっているんだから」

責任感の強い真面目な女——遊び心を本来は主とする妖精とは思えない表情で、魔道に長けた女への依頼を女は了承した。

「ところでその結果は……アレは含めるの？」

そして女が振り返った先には——壁際に無言で立った、石台の少年をただ見つめている人影があり、

「ああ。羽の無いあのコは無害だ。ユーオンを心配してるから、きつと守ってくれるだろうし」

「本当に？ 元々敵方の切り札の人形でしょう？ しかも……」

赤い鎧——胸骨上に何か填める窪みのある鎧を着け、真直ぐな長い黒髪を左で一つに束ねる、青い目を持つ無表情な人形……

何故か猫耳のある幼げな少女を見て、女は顔を歪める。

「どう見てもアレ、あの変態ロリ野郎の趣味じゃない」

「そうだな。前北方四天王の遺物だそうだ」

男と女が以前に敵対した者を、女も思い出したようだった。

「命——力は感じるけど、魂は無いわよ、あの人形。またその黒い羽……幽鬼に憑かれればすぐに敵になるはず」

そんな者を本当に自陣営に置いて良いのかと、女は男の判断を疑うような目で見つめる。

「それでも……ユーオンには、妹みたいだからな」

その人形の羽を斬り落とし、何とか連れて帰る事が出来た男は、人形と少年にも確かな繋がりを見ていた。

「元々ユーオンは、アフィと何処か近い色を持っていた。あの人形はそれが更に濃い……ユーオンと同じ『竜』の色だ」

その少年を昨春に瀕死の状態で見出し、それまでの記憶が無い少年を自身の養子としていた男は、当初からある疑問——男の連れ合いに近い色を持って見える少年に、不思議な縁を感じており。

「確実に精霊なのに、竜にも見えるユーオンは、おかしいとは思っていたが……竜が精霊を操ったとも言えるのか」

「まあ、どつちも自然の系統だしね。前例も聞いた事があるし、そうでなければあの人形の鎧の強固さも説明出来ないし」

世界の数々の化け物の中で、最強と言われた自然の脅威の化身、『竜』はしかし既に滅びた種族であり、

「剣があの子の本体なら、まだ竜がこの世界にいた頃に、剣に封じられた竜かもしれない。最も竜としてはそう濃い血統じゃなさそうだけど……人形の方はその同系、かなり血の濃い竜の力を渡されてるんじゃない？」

「そうだと思う。その力の在処を探して取り戻せば、あのコの魂も戻るかもしれない」

本来は表情も自在に動かせる程、高度な人形の体でありながら、ずっと無表情な人形の少女を見て、男は沈痛を浮かべた。

「早い所、『黄輝の宝珠』の継承を終わらせて、王子も祖国へ戻して……ユーオンを助ける方法を探してやらないと」

硬く目を閉じた、人形以外の誰の記憶にもいない孤高な少年に——男はただその人形を会わせてやりたいようだった。

ところどころ——と。男の連れ合いの名前が出たのを機に、女はある懸念を思い出したようだった。

「アースフィーク、魔界でついに消えてしまったときいたけど。貴方はそもそも、こんな所で油を売っていていいわけ？」

「……………」

常に共に行動していたはずの者達が、男が一人ここにいる理由……連れ合いを置いて逃げて来たと言える状態に、連れ合いの幼馴染である女は大きく顔をしかめる。

男は悩ましげに目を伏せながら、声の力は失われないまま、

「今の俺じゃ奴らには対抗出来ない。飛竜がせめて、俺と共に全力で戦えるくらいにならないと」

男が意識を集中して戦っている間は、複雑な事は出来ない男のもう一つの体『飛竜』を、最近あえて酷使している男だった。

「ラピス達には黙っておいてくれ。それでなくてもユーオンや水華を狙う敵の事で、大分ラピスは追い詰められてる」

男が同伴する少女二人の内の一人は、ただの人間の養女であり、それでも一人にするよりはと、天空の島まで共に連れてきた男だった。

「そうね。アースフィークはあのコの心の芯だったもの」

頷く女も、本来笑顔絶やさない養女の消沈ぶりを見ていた。

人間という弱小な生き物の、拙い心配しか持たず、そもそもある理由で自らの気配に乏しい養女が……石室の近く、少年を心配して聞き耳をたてていた事には、彼らは気付かずに。

「それにしてもどうして、このイタイケな子達は、そんな酷い目にあってるのかしら？」

男の養女ともう一人の少女、この少年を元々見知っていた女は、珍しく自身にあまり関係のない事を尋ねた。

『黄輝の宝珠』を狙ってる魔王の残党がいる。十五年前に、宝珠の『守護者』達が魔王を倒した時に、魔王に奪われていた『黄輝の宝珠』は『地』に戻された……その後ずっと、守護者不在のままできてるからな」

「そんな事言っても、『黄輝の宝珠』程の大きな力の守護者、そう簡単になり手が見つかるわけではないでしょう」

この世界には、世界の五大要素・五行の五大元素を司る宝——五つの『宝珠』が古くから存在しており、

「黄の宝珠が司る五大要素の『空』も、五行の『土』も、その因子の持ち主は魔王レベルの稀少さよ。敵側に魔王の力を継ぐ者がいたとしても、何故あの子達が巻き込まれるの？」

魔王というのはこの世界に隣接する異界、『魔界』に不定期に現れる、『魔王の力』を操れる魔の事であり。そうした魔王が現れる度、魔王と、魔王に従う四人の強い魔——『四天王』が、宝珠を巡って守護者と争いを繰り返していた。

「水華は『空』の因子が宿った羽を持つ、黄の守護者の正統な『資格者』だ。敵方にも三人、『空』を持った奴らがいた」

説明しながら男も、難しい顔をして首を傾げる。

「メインは『水』のはずの奴らが、どうしてか『空』の因子も持つてる。飛竜の目で見た事だが、間違いなかった」

「じゃあ合わせて四人、『資格者』がいるという事？」

「ああ。水華はそれで何故か狙われている。困った事に敵方にはユーオンの妹と、ラピスの親の仇がいるようで——ユーオンはその状態で敵方に誘われて、板挟みだったんだろう」

少年は男の養子となった後、養女を本当の妹のように守ろうとしており。自らの記憶の無い少年に本当の妹と名乗る者が現れ、それだけでも少年は大きな迷いを持ったはずだった。

「でもそれで、自分の命まで空に捨てるわけ？」

「元々危うい子だったんだ。とても優しい子なのに、ラピスを守るためならその優しさをあつさり殺す……ヒトより早く、その危機も解決の方法も観えてしまうから、自分の感情なんてそっちのけでいつもすぐに動くんだ」

現状把握に優れた勘の良さを持つ少年にとっては、観えている問題だけが重要であり。それが何とかなるのなら、それ以外は全てを切り捨てるのだと、男は早くから悟っていた。

「……それも結局、自己満足でしょう」

「そうだな。だから——自分の都合でラピスに背を向ける事が、自分で許せなかったんだろう」

大切なものが一つである内は良かったとしても。

二つ以上の大切が現れた時、破綻した少年の——

自らを含め、何をも犠牲に大切と定めたものの力になる事を望む在り方……その果てが冷たい石の台に横たわる姿だと。

男はただ少年に、無情な灰色の目を向けるしか出来なかった。

\*

剣には本来、物を考える機能はないものであり。

その剣が何かを考える事が出来るのは、剣を持っている者と剣の相性が良い時にだけ、持ち手の体を通して可能な事だった。

「——あれえ？ ひよつとして……カラスじゃないのお!？」

「……久しぶりね、ルン」

現在の持ち手はどうやら剣と、何かの縁があるようであり、考えるまではいかないが、外界の光景はそうしてよく届き。

それらの光景の記憶は、剣にもいくらか蓄える事は出来た。

正確には、剣に宿る魂に余裕がある内には。

「うわあー、来てくれて嬉しい! あの時本当にごめんねえ!」

今の持ち手は橘鴉<sup>あや</sup>夜と名乗る、鎖骨までのまつすぐな黒髪を左上で一部だけ括り、黒く鋭い目の端整な顔立ちの少女であり。

襟ぐりが広い高い襟で首の半分を覆う上衣と、ふわりと広がる短い下衣を好むが、いずれの色も黒が基調で。現在尋ねたこの旅芸人一座では、『鴉』と芸名を持つ臨時座員だった。

「その事なだけだ。あたしに言い寄ったバカが使ってた剣、うちの鳥が拾ってきたんだけど」

「え？ どういう事？」

目の前のふわふわと人形のような華やかな少女を含めた、あるトラブルに巻き込まれ、しばらく顔を見せなかった少女は、

「これ。あんたの彼氏の剣じゃないの？」

「あれー。ほんとだ、イーレンちゃんの剣っぽいよお？」

目前の華やかな少女はしかし、大きく首を傾げ、

「でもおかしいな。この剣、イーレンちゃんのそっくりさんが持ってたはずんだけど」

「？」

一座の護衛をしていたはずの妖精の剣を、返すためにここまで来た黒い少女も軽く首を傾げる。

「ちよつと待ってね、霖も呼んでくるねえ。イーレンちゃん、あの後いなくなっちゃって、ここにはもういないんだあ」

「……………」

その相手には正直一番会いたくなかったと——

目前の少女のいい人として通りながら、黒い少女を口説き、本当は今から呼ぶという女性が本命と黒い少女は知っていた、浮気な妖精を思い返し。黒い少女は常に不機嫌そうな顔を更に難しくしつつ、持っていた剣を、少し強く握り締めたのだった。

黒い少女はその後、現れた女から、確かにそっくりな剣だが、剣に取り付けられたはずのペンダントが無いと話を聞き。女の横で目利きのマネージャーは、全く同じ剣だがここに在っても意味はないと、苦笑しながら口にした。



日中の黒い少女は、実に行動範囲が広い人物であり——大陸間を易々と、謎の方法で一瞬で移動するだけでなく、この世界以外の場所まで足を運ぶ事すらあるようだった。

「オマエ——何か、タチの良くないものに魅入られてないか？」

そうして移動の多い少女は、適当な樹上等で休息をとる事が多く。しかし何故か、少女が休息をとっている間は、

「夜が来る度その状態なのか？ そりや相当、うざったいなあ」  
先程眠りに落ちたはずの少女がふっと体を起こし。

髪を後ろで一つに束ねつつ、傍らの枝に吊るした剣が仄かに青白い光を放っているのをまじまじと見て、まるで男のような口調で剣に話しかけ始める。

「オレが避け続けている神様の匂いがしますよ？ まずいなー、アレとアヤは関わらせたくないんだけどなあ」

これまでの冷静な少女に比べ、茶化すような雰囲気すらある、軽い口調のその人物は……少女がこうして休息をとる間のみ、たまに現れる誰かであるようだった。

そんな変貌を遂げた黒い少女の下へ、同じく黒い何か顔を見せる。

「君の言う通り、『白夜』の仕事ですよ、炯君」

あれ、と黒い少女は地上を見下ろし、現れていた黒い女——

旅芸人一座のマネージャーを務める、長い黒髪を一つに括り、腰に長剣を下げた、見た目は二十代前半の鋭く整った顔立ちで一般的な服装の女に、ニコニコしながらより茶化した口調で、不思議そうな顔を向ける。

「何だ、空っぽの不死人ちゃんじゃないのんー。あんた、この剣に興味があったん？」

「ええ。『鴉夜』を『悪夜』にしたくなければ、私にその剣を預けてもらう方がいいと思いますよ」

「へえ。何か、持ち主をよく知ってそーな口ぶりだなあ？」  
あぐらをかいた膝で頬杖をつくという、およそ少女らしからぬ体勢で女を見下ろす相手に、黒い女は平和に微笑んだ。

「でもあなたに預けたら、そのまま白夜に献上されそーな気がひしひしとするけどなあん？」

「確かにその可能性もありますね。それはもう——彼次第です」  
ふむと考え込む少女を、女はにこにこ黙って見守る。

「ま、何にせよアヤ本人と交渉してくれ。勝手にコレ消えたら、オレがここにいる事、ばれたら困るしさ」

「まだそれ、明かしてなかったんですか？ ヒドい話ですね。鴉夜は君を探して、どれだけ無駄足を踏んでると思ってます？」  
少女の休息中にその体を使う誰かは、少女には秘密でそうしているようだった。

仕方ねーじゃんとか誰かは笑いながら、その呪いを口にした。  
「だってオレ——とっくに死んでるしさ？」

時間はそこで少し巻戻り——その日の朝の光景が割り込む。

自然の化身たる精霊に、その宝剣はなりかかっていたが。剣という人工物は自然には有り得ず、せいぜいが刃のように鋭い自然構造物までが限度であり、本来は『剣の精霊』など、そもそも存在しないものだった。

—剣霊か神剣か——まだどっちつかずだけど—

だからそれも特殊な精霊だった『刃の妖精』……刃の精霊が単身で動く妖は剣と相性が良く、『刃の精霊』は『剣の霊』へ、精霊周囲の情報を、遠く離れた剣へ断続的に送り続けていた。

「……私のせいかなあ？ 水華」

「——は？」

倒れた少年の養父とその知り合いの話が終わったという事で、翌朝には石室に戻って来た二人の少女は。

一人は一部だけ長く伸ばした肩までの瑠璃色の髪で深い青の目の、腰巻付きの功夫服といった活動的な恰好で。しかし全く覇気のない目で、石の台に横たわる少年の左横に立ち。

「あんたがそう思いたいなら、思っただけでいい？ ラビ」

第一声から景気の悪い相手に、もう一人の方——黒いリボンで二分したポニーテールの、毛先をくるくる丸めた茜色の髪と、水色の虹彩に紅い瞳孔という変わった目の色の、水夫服のような恰好の少女は、同情心の欠片も無い口調で返した。

「コイツ元々ずっとテンパってたでしょ。遅かれ早かれいつかこーなったわよ」

「……………」

それでも瑠璃色の髪の少女をフォローするかのようには、少年の枕元に立ちながら言葉を続ける相手に、少年の義理の妹となる瑠璃色の髪の少女は顔を暗くする。

「それが今つてのはホントに大迷惑だけど。まあでも……仕方ないっちゃ仕方ないかな」

茜色の髪の少女はそこで、両腕を組んでうんうん頷くと、「コイツの妹ごと敵を全滅させよ」としたあたしも悪かった、うん」

「……水華……あの時のこと、覚えてるの？」

顔を歪める瑠璃色の髪の少女が知るところでは、茜色の髪の少女が魔法の刃をまとめて向けた相手の中には——

普段は透明な羽を背に持つ茜色の髪の少女の、前世での兄と名乗る者と。実は人造の生き物であるという少女の基となった一人、母たる吸血鬼もいたはずであり。

—言っておくけど……皆殺しになるけど？—

しかしそんな事は意に介さずに、自陣営の者達すら巻き込み、殺戮の天使のような清らかさで、その凶刃は放たれていた。

「ちょっと無理に黒の杖使ったから、力が暴走しちゃったけど」  
「……………」

白い三日月を先端に設える白い魔法杖と、先端が黒い三日月の二本の魔法杖を使う茜色の髪の少女は、その使い分けで自身に併存する聖の気と魔の気を別に制御する魔法使いのだが、

「ここも『地』も、筋金入りの聖地だもの。魔の気を使うならそれぐらいしないと、通用しないしさー」

「……………」

そうして黒い魔法杖を使う時に、茜色の髪の少女が現在の姿、気が強く不敵で我が侘という常態からかけ離れた、まるで別人……………淑やかで虚ろな微笑みの似合う紅い目の少女となった事を、今の少女がどれだけ自覚があるのか。

「ユーオンは…………『銀色』さんがいる事は知ってたけど…………」  
別人としか思えない、『紅の天使』と異名をとった茜色の髪の少女のもう一つの顔に…………ただの人間の瑠璃色の髪の少女は、不安げに目を伏せて少年の方に視線を戻した。

「水華もユーオンも…………私が知らない所へ行っちゃうのかな」  
「？」

そして瑠璃色の髪の少女も、自らの咎を言及する。

「…………ごめんね、水華。水華のお母さんかもしれないヒトを、私…………殺そうとして」

石の台の空いた所に座り、少年にも枕元の茜色の髪の少女にも背を向ける形で、瑠璃色の髪の少女は呟くように言った。

「きっと、ザイさん…………水華のお父さんかもしれないヒトも、悲しむ事なのに」

敵の中にいた吸血鬼の女は、瑠璃色の髪の少女の父の仇と——少女は護身用の銃をその吸血姫に向けていた。

それでも結局撃つ事は出来ず、その後新たな敵が現れた時に、茜色の髪の少女は黒の魔法杖を手に取っており。

「別に？ あたしはアレ、親だとは思わないし。あの吸血鬼に武器を向けたのはあたしも同じなわけだし」

それにと、茜色の髪の少女は——台の右上の角に斜めに腰かけ、振り返る形で瑠璃色の髪の少女を見つめながら言った。

「復讐上等、あんたが前に出たタイミングはバッチリだったわ。弱々のくせにここまで頑張っついてきたんだし、むしろ…………気にしないで撃てば良かったのに」  
「……………」

聖魔の混在した強い化け物という茜色の髪の少女には、弱小に過ぎない吸血姫は。しかし人間の少女がそれを討てる機会は、早々無いと冷静に伝える。

「あたしが狙うのは『黄輝の宝珠』だけ。あんたやコイツが、その横でどーしようが、あたしの知った事じゃないし」

その天上の鳥の羽を受けた少女は、羽の持ち主の未練——『黄輝の宝珠』を求める人形に過ぎないと。

羽の持ち主の兄と名乗った、敵側の白銀の髪の神父の言葉を思い出し、瑠璃色の髪の少女は再び目を伏せる。

それでも常に現実を確かめたい事が信条の人間は、

「水華はどうして……『黄輝の宝珠』がそんなにほしいの？」

必要性がはつきりしていたため、今まで誰も尋ねなかった……

その必要性が生じる前から、既に同じ目的を持っていた少女に、  
核心となる問いを投げかけていた。

魔王の残党と名乗る者達は、守護者の一人——『水』を司る

黒の宝珠を持つ悪魔を操り人形とし、味方に引き入れており。

そんな敵に狙われた茜色の髪の少女と金色の髪の少年は、まず  
身を守るために、大きな力を得る事が必要ではあった。

「そりゃ、あのバカ守護者？ ユーオンが結局退治したけど、

あれに対抗しよーと思つたら、宝珠の一つや二ついるでしょ」

「でもアラス君が敵つてなる前から、水華は宝珠をほしがって  
なかった？」

「だってクアンも赤の守護者になりそうだし。バカ守護者とも  
クアンとも元は大きく変わらないのに、あたしだけ下ランクに  
なるって悔しいし」

他に少女が対抗心を燃やしたらしき、『炎』を司る赤の宝珠の  
守護者の子供との出会いも引き合いに出す。

「でも……」

それでも人間の少女は……納得がいかないような様子で俯く。

「ずっと水華——……何処か、手加減してるよね？」

それだけ『宝珠』に拘っているような茜色の髪の少女が。

しかし一番その感情……やる気らしきものを見せたのは——  
敵を殲滅させようとした時に他ならないと感じての事か。

我が侘さすら理性的な誰かに、人間の少女は今更気が付いた。

そこで、はい？ と茜色の髪の少女は首を傾げ、

「無駄な力を使ってなかっただけよ。特にあの——無敵のバカ  
人形がいたおかげでさ」

今も石室の、少年の足元でじつと石の台にもたれて座り込む、  
一日前は敵だったはずの赤い鎧の人形を見て不服げに言う。

「……本当に大丈夫なのかな。あのヒト、ここにいても」

物言わぬ赤い人形は、表情も全く動かす事なく、ただずっと  
少年の元を離れずに付き添い。

その人形には何故か、銃撃以外はどんな攻撃も力も通じず、  
化け物の少女や養父がある意味最も苦戦する相手という事を、  
人間の少女も知っていた。

「危ないならとつくに、ユーオンを連れて帰ってるんじゃない？  
レイアスも言つてたけど、今のあいつは本当に人形らしいわよ。  
あたし達の命令でも、少し念を乗せて言えばきくってさ」

ただし、その少年から離れるという指示だけは受け付けないと、  
呆れたように茜色の髪の少女は口にする。

「ま、特にラピは安全でしょ。あいつに効くのって、あんたの  
銃だけなんだし」

「……………」

「だからレイアスも、あたし達をここに残して早速潜入なんて行くんでしょ。まあいいけどさ——情報が入り次第、あたしも今度こそ宝珠リベンジだし」

そこまで呟くと茜色の髪の少女は、ふいっとつまらなさげに立ち上がっていた。

「あたし、向こうの聖堂で寝てるから。早い所、力蓄えたいし」

「……ポピはずっとカゴで寝てるから、心配しないで」

今はそこにテントを張り、室内でテント生活を一行はしており、瑠璃色の髪の少女が常に連れる謎の生物もずっとそこにいた。

そして茜色の髪の少女が、石室を出て行ってしまおうと。

「……………」

「……………」

物言わず少年に付き添い続ける人形が。二人の少女が来た時には顔も上げなかったのが、何故か足側の石台に両肘を置いて膝立ちした状態で、じっと瑠璃色の髪の少女を見つめる。

「……………私、邪魔かな？」

「……………」

人形は身動き一つせずに、ただ青い目で少女を見つめ。

少女はアハハと——その人形から目を逸らし、背中を向けて自嘲するように笑った。

「ごめんね——何処行っても邪魔者だね、私って本当に」

「……………」

「あなた、ユーオンの妹さんなんだよね？ ……ごめんね……」

私のせいで、ユーオンをこんな風にしちゃって」

「……………」

「ユーオンはホントは、あなただけを守れば良かったのに……私なんかのために、こんなに無理する事、本当に無かったのに」少年と人形に背を向けながら、石台の端に座る少女は——

常にそうして、何事もごまかさずに直視する人間であり。

「私があなたから……ユーオンを盗っちゃったんだよね」

「……………」

「あなたは私の事……恨まないの……？」

「……………」

ただじっと、青い目を少女に向ける人形はまるで。

その人形がずっと付き添う少年に対するのと同じように……人形が心配した相手だけを、ひたすら見つめているようだった。

そんな人形の澄んだ青い目を受ける、深い青の目の少女は、

「……………いらないなあ……………」

澁んだ自身の目を笑うように、体を折って両肩を抱え、

「私、ほんっと、いらないなあ……………迷惑、足手まとい……………」

本当はとてつもない少女の深い弱音を、そこで口にした。

「私がここにいた事に、たった一つでいいから……何か意味があればいいのに……………」

それはおそらく——その人形が相手であったからこそ。

その赤い鎧の人形には、命はあるが魂は無いと――

正確には心だけがあり、それを目印に力が違う所から流れてきている。灰色の目の男も、横たわる少年もわかっていて

そしてそれは、青銀の宝剣とは似て異なる状態であり。

「この剣には――魂はあるけど、命は無意味になりつつあるな」  
「……はい？」

魂とは広義には、命そのものを指すというが。命の核たる心、本能を構成し、存在や力の本質たる『心霊』とは別に、存在を支えるエネルギーである『魂魄』の『魂』を狭義には魂といい、存在の意識――精神を司るものであると、その男は言った。

「命が無意味って……何なのよ、それ？ カイ」

黒づくめの服に白衣を羽織り、黒い髪で黒い目の若い男に。

朝一番からその医者らしき男の仕事場、外来診察室に、剣を持ち込んだ黒い少女は怪訝な顔をする。

「生き物の命っちゃ、本来は心霊と。体なら魄を指すんだがな」  
「？」

「コイツは持ち主の躰に魄を渡して、魂となることで持ち主を制御してるっぽい。命は何故か神にも近い、何かの自然物が

……持ち主の躰に引つ張られて、霊と神の間をさまよってる」

以前に二度、偶然剣の持ち主を診察していた男は、無表情でも面白そうな声色で先を続けた。

「まあ、お前さんがバラすべき対象、秩序を乱す神ではないな。ちゃんと剣である分は心得てるぜ、コイツ」

何やらそうした、『秩序の守り手』であるらしい黒い少女は、それならと不満げに男を見返す。

「じゃあこの後は……あたしはそれ、どうすればいいのよ？」

「ふむ。申し出通り不死人に渡すか、もしくは……」

男はちらりと、ドアだらけのその診察室のドアの一つを眺め、

「何なら悪魔に恩でも売ってやれば？ 一昨日から多分、その剣を欲しがってる客が怪我して、うちに来てるからな」

「――は？」

そのドアの方に少女が振り返った瞬間――

一瞬の隙に、ふしつと何かの薬剤を男は少女の首筋に打った。

「……――」

ふらりと少女は、意識を失い椅子から崩れ落ちかけ、

「……ひでーなあ。いくらオレに会いたいからって、ちよつと

強引過ぎでないん？ アッシュ」

「桶灰と呼べ。そんな古い名前はお呼びでない」

体勢を崩す直前に、またも変容を遂げて姿勢をとり直し、髪を括る黒い少女に、男は慣れたように息をついた。

「わかってますよー、ニホン国籍上は、麗しのカイおとー様。しっかし……」

黒い女からは炯と呼ばれた誰かは、ドアの先の気配に顔を顰め、

「やな客来てんなあ。魔王擁立勢力の奴ら？ アレ」

「ああ。見舞いがくれば顔見知りがわんさかいるな、お互い」

「げげーん。何でそんなの、この狭い所に入院してんのん？」

「俺の上司っちゃ、上司だしな。それでなくとも、魔界の方も不安定なこの時期に、『地』で余計な騒ぎを起こしたらしいな……ルシフェル一派の道楽は、本当付き合いきれんな」

自身も悪魔の側面を持つらしき男は、同じく本来は悪魔だった相手に苦い顔をする。

「オマエみたいに、強いくせに放蕩する悪魔が絶えないから、魔界にあんなバカ共がのさばるんだ」

「えー。そんな事言うなら、オレの躰、早く見つけてよん？」

「バカ言え。仮にもアスタロト、またはフルーレティを冠する奴に合う躯体が、そんな簡単に用意出来るか」

悪魔としては有名なものの、大きな力は持たない男は、本来の方向性は違々と長く不干渉の態度をとっていたらしいが。

そして目の前の相手……既に本来の身体を失い、自身でない黒い少女に宿る誰かをこの世に戻すため、誰かに適合する器を男は探し続けており、

「大体だ、うっかり死んじゃいましたなんて、オマエが本気でたわけ過ぎる。フォローする俺の身にもなれ」

「あつはつはー。アヤとは長い付き合いだもんなあ、アンタも」  
「今のあいつは、これまでの中では一番マトモなアヤだからな……残念ながら、それはオマエの功績と認めざるをえん」

黒い少女が自らの不秩序を殺し、秩序の守り手たり得る所以の相手を、鬱陶しそうに見つめる黒い男だった。

んーと誰かは、逸れてしまった話題を元に戻す。

「カイは、お隣の魔王さんの残党にこの剣を渡しちまえて？」

「ああ。白夜に渡すよりは多分マシだろ」

「確かにな……魔王さんの残党が持つてりや、白夜も直接、手は出せないだろーし」

「白夜はここらじゃ、一番と言つていい旧い起源の『神』だ。性質そのものが禍だし、不死人は解放されたつても、あいつと同じ性質を持つわけだしな」

その剣に纏わりついている白い気配に、同類である黒い男は、とつくに気が付いていた。

「鴉夜がこのまま持てれば、いつかは白夜の影響を受ける。そんなわけで、俺の独断と偏見でお隣さんに回すが、いいな？」

「りよーかい。さつすがカイだな、オレと気が合う」

黒い少女が目を覚ました時には、既に剣はあげてしまったと言ふ気らしい黒い男に、誰かはからからと軽く笑った。

しかし男は不服気に、誰かを見返すばかりであり。

「神と悪魔を一緒にするな。この神かぶれの蛇の悪魔が」

その『神』という謎の者について、黒い少女に宿る誰かから、前夜に忠告を受けていた剣は、

「いいか？ 神様って奴とは、間違つても殺し合うなよ？」

そんな親身な誰かの手を離れた時点で。しばらくまた、外界の光景を閉ざされる事になる。

夜には何度となく、青白い光を仄かに放つ剣は。それはいつも、剣が夢を覗いている時の事だった。

「やっぱり……君はとっても美味しいなあ？ ……キラ君？」

くすくすと、悪意の欠片もない白い笑い声が、外界の情報が届かない剣を直接侵すように響く。

その剣が観る夢はいくつもあつた。

古の力を宿したある人間や、長い旅を続けた女の古い夢。

誰かの嘆きと誰かの憎悪の、昏く赤い夢。

その赤い夢に反する、有り得なかつた世界の夢。

—なんて……— ヤツ……—

そして剣自身の、身勝手に呪われた生を映す青白い夢——

吐き気を感じる軀を捨てた剣は、その衝動を光に還す事しか出来ず、命たる光を吐き出し続ける。

それは自らを、誰かを守る者と位置づけながらも。

失われた剣のために痛む誰かを、むしろ悦んで見守っていた。

「そんなに痛かつたかなあ。誰もあのコを責めてないのね」

—私、ほんっと、いらぬなあ……—

「大丈夫だよ、私がいるよ……もつと沢山——私を求めて？」

それが決して、誰かを根本的には救わない事を知りながら。

それでも誰かが望むなら、剣は誰かの敵を殺すはずだった。

—ごめん……俺には、無理だつたみたいだ—

「そんなに痛かつた？ キラ君……もう本当に、可愛いなあ」

その本来の心を奪い、長い時を待ち続けた剣の破綻を招いた

それが為す事は。奪うための痛みをあえて与える事でもあつた。

「もつと沢山……私にくれる忘れたい心を、思い出して……」

夢という現を覗き見るそれに、誰かの夢を我が事と観る者は、

大層のご馳走と。旧くから続いた白の氾濫で、剣を侵し続ける。

\*

「いいよ……もつとあのコを追い詰めて、本当を晒してあげて」



怪我をした魔王一派という、実に怪しげな者達が真に驚く程、奇縁で彼らに手渡された青銀の刃と黒い柄の剣に、次に外界の光景が届くようになったのは。

青を限りなく暗く、濃くした黒——青闇の短い硬質の髪で、蒼い目の端正な顔立ちの青年が、剣を手にした後からだった。

「いやはや、びつくりしたの何の。ようやく目が覚めてみれば……まさかその隣に、オレを殺した剣がいるなんてね？」

丈が長く、首を覆う黒の上衣に軽装ながら首の輪など、装具が多く長い上着を羽織る青年はそんな事を軽く口にした。

「……君は、今までのアラス君とは随分違いますね？」

青年と共に治療を受けた、白銀の短い髪で薄青い切れ長の目に細眼鏡をかける、神父のような恰好の男が不思議そうにする。

彼らの現在の本拠——『地』という天空の島の中央の、一番大きな建物の内に戻っていた彼らは、総計五人の面々で、その剣を取り巻くように冷たい石の床に座る。

「あー。翼<sup>よくる</sup>つちはクビ。アイツの時に殺されたから、かなり存在弱まっちゃって、もう多分目は覚めないよ」

事も無げに青闇の髪の青年は、何事も嘲るような顔で笑い、

「オレはそーだなあ。シア君とでも呼んでもらえばいいかな？」

数日前に剣の持ち主に、確実に生命活動を止められた青年が再び目覚めた時の名は。青年の本来の名とも、それを守る者の名とも違う、全く新しい誰かだった。

「……だから、髪の色が違うの？」

剣を持つ青年の右隣に座る、黒く短い髪と鋭い緑の目の幼子が、黒い両目の灰色の猫のぬいぐるみを抱えながら無表情に尋ねる。

「そうそう。オレは昔は、この色だったはずなんだよね？」

にやりと楽しげな青闇の髪の青年は、美形の顔立ちでなければ、醜悪と見えそうな程にあくどい顔付きで。青年の正面に座った、肩までの土色の癖の強い髪で、着物姿の女に問いかけた。

「陽炎サンはオレの事知らない？　ってオレがいたはずの頃は、もう地上に降りちゃってるかな？」

「そうね。赤ちゃんの頃は何度か会ったけど、アナタの記録はもう何処にも残ってないわ——シアレイシア・ソウル」

青年が名乗った名前から、女はあっさりとその固有名詞を引き出したようであり、

「アナタが『資格者』たる所以だけど。最後の黄の守護者……アレクシス・ソウルの血をひく唯一の男の子の、でもとつくに『魔』によって消滅させられた、アナタの前身かしら」

「……………」

女の左横で無表情に黙る、まっすぐな長い銀色の髪で赤い目の、世にも稀な美少女の吸血姫が女をじーっと見つめ。女の発言に衝撃を受けたような様子だった。

「らしいねー。見事な消滅で前世とすら言えない状態だから、単に似せて造られただけのオレなんだけど」

それでも親たる者の『力』を渡される事で、前身へ近くなったらしい、しかし人造の吸血鬼である青年は歪んだ顔で笑う。

「アラスは何とか本物に近かったけど。アイツは元々、だから十三歳までの心しかないからね？」

「そもそもそれで、吸血鬼の軀体の本来の主は、最近弱まっていたと……悪魔使いたる黒髪の幼子に囚われた因を、あっさり口にした。」

「しゃーないから、ずっとサボらせてもらってたオレが、外に出るしかなかったわけで。早い話——消滅させられたシア君の怨念みたいなもんだと、思ってもらおうといいよ」

「という事は君は……アラス君とは違う望みを持っていると？」

「当たり前。それはソールっちとオレだけの秘密だけど、まーアンタ達の目的と大きく反しないと思うよ？」

「……………」

そうして変わらず、それまでと同様に彼らの協力をすると言う吸血鬼に、無機質な目を向ける黒髪の幼子だった。

「ところで——」

青年はきよろきよろと、不思議そうに辺りを見回し、

『ピアス』ちゃんの姿、見えなくない？ せつかくこの剣、ここにあるのに？」

「……ずっと呼んでいるのに、帰ってこない。あのヒトに羽を落とされてから、ぼくの言う事をきいてくれない」

これまでで一番不快げにする幼子に、なるほどと青年は意地の悪い顔つきで笑った。

「へー。さすが、本体は向こうなだけの事はある」

そんな青年をものともせず、ぬいぐるみをぎゅむっと幼子は抱えながら、青年の持つ剣を見つめて呟いた。

「兄さんがここに来たから、さつきやつと声が届いたけど……帰ってきて、あまり言う事をきかないかもしれない」

「おやおや。それは大きな痛手ですねえ」

「呑気な事を言わないで、ルシウ。それでなくともこの件は、私達だけで片付けるように言われているのに」

人手不足を悩むような土色の髪の女に、青年がまた嫌味っぽく笑いかける。

「でも水華の杖も無効化して、ユーオン君もこの通りこつちにあるわけだろ？ ピアスちゃんが直接敵にならなければ、機はオレ達にあると思うけどね？」

最早、この天空の島に近い『火の島』に立てこもる敵の中で、脅威と見なすべきは二人だけだと青年は笑う。

「飛竜の兄ちゃんと水華と……それも水華は、杖無しで下手に戦えば無力化するはずだし。オレとルシウの兄ちゃんだけで、たためる相手だと思うけどね」

「よく言うわ。聖の気に当てられて大分弱体化してるくせに」「いやいや、それは生粋の魔の翼権っただけ。オレとアラスは、むしろ聖の気は力になるくらいだし」

彼の前身を考えれば当然の事と、知ったはずの女を嘲る。

「それより、ルシウの兄ちゃんはどーさ？ いい加減その躰、ガタでもきそーなんじゃないの？」

そこで青年は、白銀の髪の神父の正体をも明るみに出した。

「蓮華もボロボロの年寄りのくせして、よくやってるけどさー。あいつの変身能力もそろそろ、やばいんじゃない？」

青年が口にした名の主は、元々特殊な異能を持った——誰かの魂を身に受ける事で、気配ごとその魂の主を再現出来る能力を持った化け物の女だった。

「どーしても顔と羽は、ジェレス・クエルを完全再現出来ないみたいだし。力を使えるって事は、ちゃんと魂は入ってるのに」

「そうね……Jはもっと、優しくて穏やかなヒトだもの」

変身の化け物にそうして受け入れられた、魂の主である神父は、元は土色の髪の子が見知った天の民であり、

「ルシフージュは再現出来ても、Jは還ってこれないんだわ。可哀相なJ……」

にこにこ微笑み何も言わない神父に、女は忌々しげにする。

「きつとまだ、『黄輝の宝珠』に半分封印されたままなんだわ。

封印者のアレクシスは十五年前の戦いで、魔王が消えた後に、宝珠の中にいた彼も消えたけど……」

天の民でありながら、天空の島に悪魔を呼び込んだ実の弟を、当時の黄の守護者は長く自らの宝珠に封じ。己の身体も失い、宝珠の中に在り続ける事でその封印を守っていたという。

「……………」

傍目からわかる程憎悪をたたえる女に、隣の吸血姫が無表情のまま、居心地悪そうにする。

「たとえ陽炎という悪魔の囁きであっても……Jのためなら、Jをここに呼び戻すためなら、宝珠は私達が手に入れる」

「——あれ？ 陽炎サンは、あんたの方が悪魔だって言ってた気がするけど？」

にやにやと頬杖をつく青年にも、女は不快な視線を返す。

「私は確かにここで暮らしていた天の民よ。陽炎に体の自由を奪われてからは、ずっと依り代の中に潜んでいたけど……」

その依り代たる、女が身に着けていたペンダントを、少し前に胸ごと貫いたのも青年が持っている剣であり、

「Jがもう一度、私の本当の名前を呼んでくれるまで——私は悪魔にだって協力すると決めたの」

その付近で、同じ体でも口調の変った女達は、どちらも嘘はついていないと、今の剣にはそれだけがわかった。

「……………」

そんな女を黒髪の幼子は無表情に見つめ。こうした話の時にはあまり口を開かない神父の事も、その後黙って見つめる。

まあ——と。青闇の青年は、そこで話をまとめにかかった。

「近い内にアイツら、ここに来ると思うよ。その時にまた……利用するならする、倒すなら倒すで、各々の好きにすれば？」

ちようどその時、ばさりと。

青年の後ろに降り立った、黒い羽の憑いた者があった。

「……お帰り、ピアスちゃん」

そこで心底楽しそうに、歪んだ微笑みをたたえた青年は——青銀の剣をそのまま、躊躇なく赤い天使に手渡したのだった。

……………

その剣を赤い天使が手にした瞬間に。

元々外部の魂に敏感な依童という器の、しかもかなり高度に造られた天使人形が持ったためか、青銀の剣にはつきりとした意識が戻り。

……………レイアス……………ここに、いる……………？

赤い天使が少年と同じ系統の現状把握能力を持っているためか、誰かの潜入がわかる程に、剣の感覚も研ぎ澄まされた。

その真円の白い島は、継ぎ目のない不思議な石の構造物が、人家や道々の基本で。散在する小さな家の他は森ばかりであり、戦禍で崩れた家も多く、荒廃した空気が漂う中で……………。

—あいつもそれ……………気付いてる、のに—

島に単身放たれ、極限まで存在を薄めたある男の力、『靈獣』……………『靈骨』という固有器官が媒体の、『もう一つの自分』である飛竜をかなり小さくした密偵が、場に紛れ込んでいた。  
—何であいつ……………何も言わないんだ？—

最早気配の探知では気付かれない程、偵察だけを目的として、弱められた飛竜に……………しかし黒髪の幼子なら気が付くはずと、赤い天使と同じ現状把握が可能な相手に、剣は戸惑う。

剣にそうして意識が戻った頃に——

ちょうど少年の躰の方で、飛竜の本体の男が、二人の少女を前に現状を説明していた。

「ユーオンの剣が見つかった。何とか無事だったみたいだが、どうした訳かわからないが、『地』の奴らの手に渡ったようだ」

「——へっ？」

「……………嘘……………」

つい先刻に、突然赤い天使が羽を生やし去った事を不思議に思っていた少女達は、納得したように顔を見合わせる。

「だから……………あのコ、帰っちゃったんだ……………」

「まずいわねー。それだとコイツを無力化したまま、コイツの剣はあの無敵人形に利用されるって寸法？」

「その可能性も無くはない。あのコがこの先どう出るつもりか……………それによって戦局は大きく変わるな」

ふうと溜息をつきつつ、横たわる少年の傍らに立った男に。

「知らず瑠璃色の髪の養女は——男のケープの裾を掴んでいた。」

「……………」

男は苦笑いながら、養女の頭を優しく撫でると、

「昼間に……………まだ奴らが帰らない内に。少しだけあの子供とは、話が出来た」

「……………え？」

白銀の髪の神父と、青闇の髪の吸血鬼の治療のため、『地』を彼らが空けている間——男は黒髪の幼子に接触を持っていた。

「あの子供は、俺とアフィがずっと探していた、ディアルスの王子かもしれないんだ。けどそれにしてもは幼過ぎるし——まずあの子自体、女の子だし」

「……確かに。見た目は男の子っぽいけど、あいつ、女だった」  
一時期に、黒髪の幼子の姉人形として操られていた茜色の髪の少女は、黒歴史を思い出したとばかりに苦い顔をした。

「俺の潜入に気付いているのに、誰にも言わずに自分から俺の近くまできて……『ピアス』を返してって、俺に言ったんだ」  
「……え？」

「いつそその場で攫おうかと思ったが……どうやら洗脳の類の力をあの子は持っていて、迂闊に近付くのも危険だった。あの青く光る緑の目の色も、元は魔族のものだったはずが……今のあの子は、人間になった魔族、まるでそんな感じで——」

男はその時、黒髪の幼子の正体に気が付いていたが。  
それを全て口にするのは憚られ……簡潔に要点だけを伝える。  
「洗脳の力と、ユーオンみたいな勘の良さで、悪魔と一方的な契約を交わす力を持った子供だと思えばいい」

「ふーん。珍しい嫌な力をダブルで持った、やな子供ってわけ」  
「ああ。更に怖いのは——普通、悪魔と人間の契約は、人間の魂を代償に、人間の望みを悪魔が叶える形なんだが」

それこそが黒髪の幼子——人形使いの脅威、逆転契約であると、男は灰色の目をきつく顰める。

「あの子は悪魔の望みを、悪魔の魂を代償に叶えようとしている。だから悪魔を使役出来る……数々の悪魔の望みを全て把握して」

「それって——結局どうなるの？ おとーさん」

「悪魔の望みを叶えるために、あの子が悪魔に指示するんだ。あの子が望みを叶えようと動く内は、悪魔はあの子に魂を渡す。けれどあの子がやめようと思えば、いつでも悪魔に魂を返し、その契約を破棄する事が出来る」

それは一見はどちらにもメリットのある方法で、だから悪魔も従うのだろうと男は言うが、

「詐欺じゃないの。望みが必ず叶えられるとは限らないのに、叶えようとしている内は言う事かされるんでしょ、悪魔は」

「水華の言う通りだ。だからあの黒の守護者も……何か願いがあんなら、あの子の人形でいるままだろう」

「……」  
元は優しい知り合いだった青銀の吸血鬼の青年を思い浮かべ、瑠璃色の髪の少女は一人、目を伏せた。

「それじゃあさ。剣の中のユーオンを洗脳して、今後は言う事聞かせるのかな、あいつ」

「どうだろうな。あの子はただ……優しい兄さんやお姉さんがほしいだけだって、俺に訴えてきたよ」

「優しい兄さんや、お姉さん……？」  
以前に茜色の髪の少女を人形とした、黒髪のその幼子は、——こんにちは——人間のお姉ちゃん——

瑠璃色の髪の少女の事も害意なく見つめ、そんな事を口にしていたと、人間の少女は思い出す。

「傍にいてくれる兄や姉の、力になりたいだけだって。悪魔の望みを叶えたいのも、あの子には本心みたいで……だから悪魔——あの子が操る人形の大半は、あの子を心から慕っている」

「あー。それは確かに、そんな感じだった」

うんうんと茜色の髪の子が、納得したように頷いた。

「あいつの分身みたいな『ピアス』が、人形の中ではカリスマなのよ。悪魔は純粋な人間が大好物って言うしね……何にせよまじで、そりゃ性質が悪いわ」

で——と、冷静な見解を持ったまま、茜色の髪の子は灰色の目の男をまつすぐに見返す。

「それが本当に、ディアルス王子なの？」

「ああ。王子以外の奴も中にいて、それであの状態だけど」

「じゃあおとーさんは、あの子を連れ戻さないといけないの？」

「……可能ならばな。でも俺は、それよりもまず——剣の方を取り戻したい」

先程養女の頭を撫でたのと同じように、眠る少年の金色の頭に男は今度は手を当てた。

「明日は梅さんがここに着くようだ。それで『黄輝の宝珠』についても検討して……俺達の身の振り方を決めよう」

「……忘れてた。そんな占い師もいたわね、そーいや」

「……ヒドイね水華。仮にも水華の、前世の育てのお母さんに」

普段より覇気はないが、瑠璃色の髪の子がすぱっと口にした通り、その老婆は茜色の髪の子が持つ羽——魔である少女に聖の力を与える羽の主の、乳母を自称していた。

これで今夜の相談は終わりと、苦くも微笑んだ育ての父に。茜色の髪の子が、テントのある聖堂の方へと戻った後で……養女は少年の傍らに立ったまま、心許なげに尋ねる。

「おとーさん……ユーオンは、剣が戻れば助かるのかな？」

「……そうであつてほしいけどな、俺も」

「……」

育ての父が手放しにそれを保証しない理由を、養女もおそらく、よく理解していた。

「早くみんな……心配事が、なくなるといいよね」

しかし養女は、養女自身の拙い弱音を育ての両親に向ける事は滅多になく、

「ユーオンが元気無いと、鶯ちゃん達も心配しちゃうよ」

それは育ての両親にだけではなく、遠くに在っても何度となく連絡をとるような、仲の良い者達に対しても同じだった。

「……ラピスもあまり心配しないでもいい。とりあえず休め」

そのため、少女の周囲は常に、それ以上踏み込む事が出来ず。

せめて、現在どうにも出来ない凶報は伝ええない事が、一人で抱え込む少女を守る唯一の方法だった。

「……嘘吐き……」

しかしそれすらも。彼らの気遣い方を知っていた少女は——誰にも聴こえないようにそれだけ呟き、独り微笑んだのだった。

心配しないでいい。

間が悪くもその言葉は、瑠璃色の髪の少女の父が死ぬ前、少女にかけていった言葉だった。

育ての父が見張りのため神殿の外に出ていった後で、少女は少年のいる石室に残り、石台にもたれて膝を抱えて座りながら、とりとめもなく少年に話しかける。

「ねえ、ユーオン。ピアスちゃん、本当にいいコだね」

その少年の元を離れなかった人形が、突然いなくなったわけは、やはり少年に係する事だったと納得した少女は、

「ピアスちゃんなら、どんな形でも、ユーオンを助けてくれる気がする。私とは……大違いだなあ」

その人形が、少年が観た夢……有り得なかった幻の世界では、少女には鬼門であった事を少女自身が覚えていながら。

常に核心を探す少女の深い青の目には、赤い天使が自らその悪行をとるわけではない事が既に映っていた。

「ああいう優しそうなコを、それを利用してヒト達って本当に腹が立つね……でも私もユーオンに、同じ事させちゃったね」

—それはラピスのせいじゃない—

言い切る少年を思い出す少女も、それは自己満足と知っていた。

—オレが勝手にそうしたいって思った事なんだから—

ただ少年の自己満足は、自ら以外に焦点の合う、利用する側に都合の良い困った優しさに基づくものであり。

それを知っていて少年に甘えてしまった少女は、ある意味、最も性質が悪いと……歪んだ微笑みをそこで浮かべる。

「お父さんちよつと似てるな……お父さんはいつも、これは償いだからなんて——ヒトの事ばかり考えてたしなあ」

少女の父は、西の大陸の山奥の村に山賊行動をした罪で追われ、逃げて来た者だったという。

「でもそれも、病弱な叔父さんのためだったって、お母さんは言ってたな……」

その兄弟を匿ったのが少女の母の家であり。そして隠れ里たる山奥の村に、まず兄弟を連れていったのが——

「……本当は、お父さんを助けてくれたのが、あのヒトだって……お父さんも言ってたのに……」

父が死んだ理由である、茜色の髪の少女によく似た女性。

敵側の銀色の髪で赤い目の吸血姫は、かつて少女と父の前に現れた銀色の髪で緑の目の、尖った耳を持つ類稀な美少女……

後で知った事には、吸血鬼である女性とよく似ていた。

女性からは逆に、父は女性の知人と似ていたらしく、それが少女も先日世話になった、茜色の髪の少女の父らしき男だった。

「私達の村で仕事があるってあのヒトは言ったから。私が村を案内して……お父さんに会わせなければ良かったんだ……」

今もそれだけを悔やむ少女は——

父が恩人である女性を手伝おうとして巻き込まれ、炎の中で死んだ記憶を、詳細は思い出せないが刻み込まれていた。

「……でもそれも……お父さん自身の、責任だよね」

まるで少年に、目覚めてその答えを教えてほしいとばかりに、拙い声色で少女は自らの咎を問う。

「それなのにどうして……私はあのヒト、殺したいのかな……」

自らの昏く赤い夢を覚えていない少女は、ただ殺意だけを、長く残され……それすらも旅を続ける言い訳になりつつあった己を、ここに来て確実に持て余していた。

「何か大切なことを忘れてるって……忘れてるって事だけは、前は覚えてたんだよ……」

その弱音は珍しく、育ての母には話した事があった少女だが、「おかーさんは、思い出したいなら止めないけど、出来れば、思い出さないでいてほしいって言ってた。私、その時……よくわからないけど、ホントに安心したんだ」  
そう望まれたならそうして良いのだと。育ての母の空のような青い目は、少女が昏く赤い夢に呑まれない事だけを望んでいた。

でも……と。少女はそこで、膝の間に頭を沈めて俯く。

「おかーさんは、自分はいつか消えるって、言ってた……」  
――魔界でついに消えてしまったときいたけど――

「それなら私……何処に行けばいいのかな、ユーオン……」  
その母の帰りを、最も切望していた少女は……。

――……あなた……名前は何？――

少女が銀色の髪の女性の事を思い出していたように。

赤い天使が持つ剣の傍にいる銀色の髪の女性も、永い眠りの中で、その幼い瑠璃色の髪の少女を夢に見ていたようだった。

――シルファだよ。おねえちゃんは、だれ？――

育ての母がつけてくれた、ラピスという名前を名乗る少女の本名はそれで、少女の実の母と一文字違いの名前だった。

にこにこ明るい顔の幼い少女に、銀色の髪の女性は子供が好きなのか、同じくにこにここと微笑みを返す。

――こう見えてもおばあちゃんなの。おばあちゃんの悪魔よ――

目を覚ませる命は残っていない銀色の髪の吸血鬼の女性は、他の吸血姫の羽が埋め込まれて身体が維持されていることで、夢を見るくらいの魂の存続は出来ていたようだった。

そして、現在銀色の髪の吸血鬼の躰を動かす吸血姫の事も、吸血鬼の女性は同じように夢に見て……またその名を尋ねる。



—え、えーっと、私、ミカランですー……—

後に、正式名称はミカラ・スレイグルと名乗った吸血姫に、女性にああと納得したように、容姿に似合う物静かさで笑う。

—貴女、スレイグル博士の娘さん？—

本来吸血鬼という存在に、親子の縁は早々無い事だが、その生物学好きの奇特な吸血鬼には有り得る事だと女性は笑い、

—娘のマキラのクローンですー……私は失敗作なんですー—

当初押しかけて来た時の元気さから一転し、暗い顔で口にする吸血姫に、おやおやと女性は虚ろな微笑みを浮かべた。

吸血姫がそもそも、女性の元に押しかけて来たのは、

—貴女、ザイ先生と親しいって本当ですかあ！？—

——……ハイ？—

南の島で現在医師として働く女性の知人に、偶然怪我の診察を受けた吸血姫はその男に一目惚れしたらしく。

—アラス君から聞いたんです！　ってゆーか恋人なんですか！？  
教えて下さい！—

——……あの子も本当、適当な事を言うわね—

呆れながら笑いを堪えている女性は、それでも確かにその男を深く気にかけて、男からも気にかけているようだった。

自身はもう長くない事を知っていた女性は、押しかけてきた吸血姫を、逆に応援するような態度を見せる。

—ザイスイってば押しの強いイイこにわりと弱いわけよ。後、物静かなタイプとか好きらしいわね—

—は、はあ……—

戸惑いながら吸血姫は、そうして女性と仲良しになっていき、南の地で男の周辺をうろつく生活を続けていたのだが。

—先生……どうしてここに来られたんですか？—

南の島のある教会で、もう一人——男に思いを寄せていた、男とは顔見知り程度の人間の女がいた。

—先生……私、ずっと。先生の事が好きだったんです—

病に臥せる神父の兄を持ち、代りに白銀の髪の子が赴任した教会にいた女は、男の周囲をうろつく吸血姫を心から忌避し、—私以外に先生に近づくヒトは、みんな大嫌いです……—

特に悪さをしていなかった吸血姫を神の敵として、聖なる杖をその胸に打ち込み、吸血姫の本来の身体を灰に還していた。

そこに駆けつけながら、吸血姫を助けられなかった女性は、場にいた白銀の髪の子と交戦し……そちらには勝ったものの、更に現れた青銀の髪の子と、黒髪の子が連れる人形の前、永い眠りにつく事になり。

そしてその身を青銀の髪の子の吸血鬼の采配で、吸血姫のものとした事は……むしろ女性が望んだ結果であるようだった。

吸血鬼の女性の身体には、大きな火傷の痕があった。

それは、瑠璃色の髪の少女の父を奪った炎によるもので……『水』を司る北の四天王として、過去に魔王に従わされていた女性程の者でも、自らと少女の父を守り切る事は出来なかった。

——…………——

女性の夢を観る剣は、そんな女性によく似ていた……両目を焼かれた火傷の痕を、常に目隠しで覆う女性を知っていた。

どちらの女性にも共通していたのは、鋭過ぎる感覚を持ち、自分以外の事ばかり気が付いてしまう性質で。

そんな女性を知った者は、剣となる前の銀色の髪の少年に、少年をその女性……育ての母にそっくりであると言った。

—俺は……あいつを、殺せない——…………—

瑠璃色の髪の少女のために、それが必要であったとしても。

それは銀色の髪の少年の育ての母ではなく、吸血鬼——また四天王として、多くの者を傷付けた呪われた者であっても。

—だって……あのヒトは、俺のせいで死んだのに……—

それなら自身が滅んだ方がましだと、それが剣の答えだった。

剣には本当は、滅んではいけない理由があったはずだった。金色の髪の少年は、それまでの自身の記憶はなくとも、

「剣になってまで生きてるんだから、よっぽど生きたい理由があったんだろな」

いつか理由に出会えば、その時にはそれが何かわかるだろうと。たとえ呪われた在り方であっても、そこにあったはずの役目を探し続け、それが少年の何より大切な生きる力だった。

それは元々、誰かを助けたかっただけの願いが、

「あのコの敵を……君の妹の敵を、殺してね？」

すり替えられた心は、それも剣の大切な願いとなってしまう。

—殺せないなら……剣なんて持ってちゃいけないんだ—

剣はヒトを殺すためのものであり、剣を持つならヒトを殺す事……自らの意思に関わらず、必要な時にはヒトの命を奪う事を、少年は当たり前とした。

たとえ弱小の身でも、それが剣を持つ者の覚悟であると。

その心にも関わらず、殺したくないと歎く青白い逆光は……

己であり命である剣を否定する、少年の終着点であり。

—それなら——…………俺の役目は、終わったと思う—

剣がそうして終幕を望む限りは……赤い天使は、剣を少年の元に戻す気はないように、肌身離さず持ち続けるのだった。

\*

元は天の民だったという、現在は妖である占い師の老婆が、当時の記憶が戻ったとして、灰色の目の男、瑠璃色の髪の少女、茜色の髪の少女が潜伏する『火の島』に翌朝現れた時。

「……その羽は確かに、天のヒトのものだな」

改めて納得したような灰色の目の男に、顔以外全身をケープで覆う、肩までの白髪と赤い目の占い師は、穏やかな意地悪婆といった顔で笑った。

石室に迎えられた占い師は、無言で横たわる少年の姿に、

「……全く。私の占いは、悪い予感ばかり当たるのですから」

悩ましげに言う表情は、これまでと大きく変わらないものの、口調は占い師曰く完全に天の民版らしく。元々知り合いである灰色の目の男と養女は、多少の違和感は禁じえなかった。

少年が横たわる石の台の横の床で、円陣を作るように一行は座り、占い師からまず最初に口を開く。

「長らくお待たせ致しました。どうやら皆様はあまり、戦況は捗々しくないようですね？」

「ああ。梅さんの言った通りユーオンと強い因縁のある人形と、その人形を操る子供と……後は何故か、宝珠の守護者になれる資格者が三人も敵側にいる状態だ」

「三人と言うと？」

男は、占い師もひとまず知った者である黒の守護者の吸血鬼、北の四天王の躰を使う吸血姫について説明した後、

「後の奴の事を梅さんに聞きたかった。後一人の資格者の男と、その男を守護者にしたがっている女がいたが、どちらも元は、天の民だと言うんだ」

潜伏中に得た情報も併せ、白銀の髪の神父と、土色の髪の女について男が特徴を説明し終わった後に……占い師は表情を強く歪め、自身の正面に座る茜色の髪の少女を見つめた。

「その男には、貴女様は会われたのですか？」

「会った、つてかもろに戦ったわよ。何か一方的に、ヒトの事妹呼ばわりしてきたけど」

「……その女の方には？」

「さあ？ 最後によつ飛ばそうとした奴らの中に、そんなものいた気がするけど」

「……………」

難しい顔で黙った占い師に、左隣に座る瑠璃色の髪の少女が憂い気に尋ねる。

「梅おばあちゃんは……そのヒト達の事、知ってるんですか？」

「……ええ。その者達こそ、私が妖となってまで寿命を繋いだ最大の理由……我が君の死を招いた者達なのです」

へ。と、その『我が君』の生まれ変わりと、以前から占い師に指定されている茜色の髪の少女は目を丸くする。

「その者達が敵であるというなら、貴女様には私の知る事を、細かくお話しした方が良いでしょう……長くなると思いますが、よろしいですか？ レイアス殿」

「かまわない。それも必要になるかもしれない」

わかりましたと占い師は、本来の相談の目的である宝珠の事はひとまず脇に起き。その旧い話を、難しい顔のまま語り始めた。

「約二百年前に、『地』では不審な事件が相次いでおりました。

その後貴女様の命を奪った大規模な魔族の襲来があるのですが」

一連の事変が激化する、キツカケとなった出来事があるといい、

「それよりも前に、当時の黒の守護者——クレス・クウィルが、

僅か齢十五にして、殺されるという大事件があったのです……

貴女様の腹違いの兄であり、黒の守護者、クレス様には従弟で

あった、ジェレス・クエルの手によって」

「黒の守護者が……あのエセ神父に？」

「仮にも守護者を殺せる者は、確かに早々いませんからね」

その後しばらく、現在の守護者である吸血鬼に宝珠が渡るまで、

黒の守護者は不在か行方不明であったという。

「ジェレス様は自らを魔と証言し、天の牢獄に幽閉されました。

その後は束の間の平穏が戻っていたのですが……ある日突然、

聖地である『地』の土地の気が魔に侵され、それを見計らった

多数の悪魔が乗り込んできたのです」

その襲来は結局『地』の勝利で終わるが、多数の天の民が命を

落とし、占い師の『我が君』もその一人だった。

「公式には、ジェレス様が裏切り、天に悪魔を呼び込んだと、その見解がなされました。しかしそれだけでは説明出来ない、いくつかの事柄がありました」

「……そうだな。ソイツが幽閉されていたなら、『地』の気に

干渉するような、大規模な魔法は仕組めないはずだ」

「私は後に、ある者から真実を聞いたのですが……その時には

最早、それは何の意味も無い事でした」

占い師はそこで、それが最も痛恨だったと顔を歪めた。

「ジェレス様は、ルシフージュという悪魔——『魔王』の力の

管理者たる素質を持つて、天に生まれてしまわれたようでした。

そして自ら、従兄のクレス様、腹違いの実の妹である我が君を

手にかけてのだと……我が君をとても気にかけれられ、穏やかで

お優しくかったあの方からは、信じられない変貌でした」

しかし——と。当時には真実を見抜けなかった事を、占い師は

今も悔やむ顔で、

『地』への悪魔の襲来の際、失われたのは我が君だけでなく

……ジェレス様もそこで、命を落とされたはずなのです」

「——は？」

「しかし、ジェレス様の遺体は奪われ、その後完全に、悪魔に

取り込まれたのでしょうか。共にいたという女はおそらく、彼を

探すと言って地上に降りた……あの女に違いありません」

誰にも咎められず、二度と戻らなかつたある女を思い浮かべ、

「あの女——スリージ・ソイルこそ。真の裏切者だったのです」

後一人の敵……土色の髪の女について、占い師はそう断言した。

え？ と一瞬、初出の名前に場の全員が首を傾げる。

「地上に降りた後は陽炎と名乗り、先日は青の守護者の元にも現れたようですが。彼女が天にいた頃は、ジェレス様の母君と共に彼を黄の守護者にせんと、当のジェレス様より熱心で……腹違いの兄弟で他の資格者の、我が君やもう一人の兄君とは、日頃からあまり折り合いは良くありませんでした」

それでも気の強さのわりに周囲に溶け込む才能を持った彼女は、無力だった事も含め、問題視された事は無かったというが、

「今はジェレス様を名乗る者と行動しているのなら、要するに彼女は今も、ジェレス様を黄の守護者にしたいのでしよう」

そこまで話した占い師に、瑠璃色の髪の少女が、相変わらずの憂いげな顔で口を挟んだ。

「それは……そのヒトは、本当に裏切者になるんですか？」

少女にはその女の、行動と目的の一貫性はわかり、

「水華のお兄さんだったってヒトを守護者になりたい……それがそのヒトの願いなら。そのヒト達にとって、水華のお兄さんを見捨てた天の方が裏切ったんじゃないですか？」

そうした理解と裏腹に——少女はとても厳しい目で、占い師の厳しい赤い目に問いかけていた。

それは何故なら、

「梅おばあちゃんは……何か、隠してませんか？」

「……………」

「そのヒトが裏切者だっていう、本当の理由が……何か他にもあるんじゃないですか？」

占い師の強い断言に対して、それだけでは納得がいかないと。常に直向きに核心を探す深い青の目の少女に、占い師はふうと……軽く息をつくのと、躊躇いがちに答えを口にした。

「あの女の後ろ盾には、ずっと魔王擁立勢力があったのです。だからこそ魔王の片割れたるジェレス様の傍にいたのでしょうか」  
当時はそれに気付けなかったと、同じ悔やみを浮かべる。

「という事は、その女が魔王一派の手先で、『地』の気を侵す魔法を仕組んだ者だったという事か？」

「いいえ。彼女にそこまで力があれば、逆に誰か気付いていたでしょう。彼女は言わば——悪魔が『地』に潜り込み、襲来の準備を整えるための抛り所だったのです」

あくまで女は何も、自ら手は下さなかったと占い師は口にし、  
「彼女は己が、悪魔の隠れ先とは思ってもいなかったでしょう。」

彼女を拠点とした悪魔達は、『地』に魔を呼び込む体制を整え、ジェレス様を狂わせ……しかし彼女は結局の所、望んで悪魔に協力したのです」

「——望んでか？」

「はい。それが私が、彼女を裏切者とみなした所以であり——彼女は、それがジェレス様のためだと思えば、『地』が危機に陥ろうと、疑問を持たなかった女なのです」

その意味でも悪魔に見込まれ、抛り所として相応しかったと、女の信念の強さをそこで語った。

「それは確かに……厄介な相手だな」

灰色の目の男もそこで、痛ましい顔で頷き、

「どんな事をして、誰かの力になりたい……ユーオンも望んだようなその心は……一つ間違えば大きな禍になる」

「その通りです。この少年のように的確な現状把握が出来れば、まだしも被害は最小で済むのでしようが……」

それが一番問題だったと、占い師は忌々しげにする。

「あの女には、それが本当にジェレス様のためになる事なのか、その視点が全く欠けていました。私は今でも……ジェレス様が、自ら『魔』となる事を望まれたとは思えないのです」

「……おばあちゃん、それは……」

「たとえジェレス様が『魔』でも——『魔』である彼のために動いた彼女の信念は、きつと変わっていないのでしよう」

それでも結局の所は、それは守ろうとする相手のためではなく、「それでもジェレス様は、そのため『地』を危機に陥れるより、

己の滅びを望まれたはず。今はたとえ貴女様方の命を狙う敵でも……私が知るジェレス様は、『魔』ではなかったのです」

どちらの方が、よりその相手を苦しめたか。相手が何者でも、その存続を望む心は……相手でなく自らのための事であると、占い師は現実を口にした。

そしてそれは……自己満足であることを知るが故に、破綻を来たした少年とは、似ているようで真逆の在り方だった。

「全ては後に、彼女の育ての母でもあった姉君……クリスタ・ソイル殿から、あの女が地上に降りた後に聞いた事です」

その姉もそれを知ったのは、真実が意味を持たなくなった頃で、

「スリージ・ソイルは、初めから悪魔の取替え子だったのです」

「取替え子——だと？」

「彼女の両親は、彼女が生まれた時に亡くなりました。そしてその時……本物のスリージ・ソイルは攫われ、天の鳥たる羽を奪われ、陽炎という赤子がその羽を背に天に送られたのです。勿論誰にも怪しまれぬよう、何一つ脅威を持たない……ただ、悪魔の抛り所となる事だけを役目とされた赤子が」

「それなら……ひよつとしてそのヒトは……」

「ええ。彼女は自分が取替え子である事を知らないのです」

姉を含めた天の民を欺くために、女自身すら、自らが天の民と信じて育つ事になり。それが何よりその女の強みだった。

「真実がどうであれ、己に都合の悪い事を知らないでいられる。

大切と信じた事の正当性を疑わず、それが真実と心から信じて貫く事が出来る。そんな女が……貴女様方の本当の敵です」

だからこそ、嘘はついていないと少年に言わしめた女だった。

「彼女は本物のスリージ・ソイルに出会った後ですら、自らが本物であると信じています」

羽を奪われた本物は紅樹と名付けられ、本物も悪魔のために利用されたというが、『地』への悪魔の襲来時に悪魔を裏切り、実の姉を守ろうとして大きな怪我を負い……実の姉に保護され、それでも結局回復出来ずに命を落とす事になり。

その死の直前、姉の介抱の元、一度だけ目を覚ました本物は……全ての真実を語り、息を引き取ったという事だった。

占い師が一通り、そこまで敵側の実情を語り終えた後で。

「……んーでさ」

それまで、ひたすら黙って話を聞いていた茜色の髪の少女が、珍しく真面目な顔で占い師をまっすぐに見た。

「あんたは何で……その事は話したくなかったわけ？」

「……………」

確かに一見、現在少女達が直面する問題の解決になる話ではないとしても、

「あんた今でも、肝心な事は話してたくない？ いったい何で

……死んだはずの奴のためにその女が動く理由……今あそこにいる、あたしの兄ってのたまうアイツは何なの？」

その敵の情報こそ、本来は必要のはずと……そこまで話せる程相手を知った占い師が、その事を口にしないのは妙だと、敏い少女は気が付いていた。

占い師は少女のその、赤と紅の共存する水色の慧眼に、

「あれは悪魔です——貴女様の兄君を取り込んだ魔です」

「それは何回も聞いた。だから何で、ソイツ、生きてるの？」  
そこを誤魔化す事は出来ない、痛ましげな顔を浮かべて悟る。

その兄は死んだと当初に明かしていた時点で、少女の問いは避けられるものではなかった事を。

「アイツはアイツの記憶を持ってたし。魔族の奴らに奪われた死体から力を利用されてるだけなら、それは変でしょ」

魔や呪いの力にはそうした、反魂や代行、写身の業といった、死した者の力を利用する手法は古くからあるが、

「そうだな……躰は魔だが、あの神父にも水華と同じ羽がある。

ルシフージュという悪魔だけが、力を継承して活動してるなら、少なくとも羽はとつくに全て魔に侵されているはずだ」

『力』を見る眼でそれに気付いていた灰色の目の男も、そこに言及せざるを得なかった。

「アイツは水華と同じ……自身を遷された羽を移植される事で、記憶も力も取り戻した死者なんじゃないのか？ ……梅さん」

「……………」

「それって、おとーさん……」

茜色の髪の少女は、羽の持ち主の生まれ変わり。占い師からはそう聞いていた瑠璃色の髪の少女が、顔を強張らせる。

「水華はとつくに気が付いている。これ以上隠し立てをするより……本当の事を話してやってくれ」

既に一度目の交戦の時、敵から数々の情報を投げかけられた少女に、顔を苦くしながら言う灰色の目の男に。

占い師も目を伏せて溜め息をつき……まず、侘びを口にした。

「……私は、貴女様を謀っておりました」

「……………」

「貴女様は我が君の羽を受けられた——生まれ変わりではなく、我が君そのものなのです。敵となったジェレス様と同じように」

その事実は逆に、もう一つの呪いをも意味しており、

「貴女は……その躰は、ミラ様のためのものではありません」

誰かの羽を刻まれて、その力を扱う事が出来る、ヒトに似せて造られた人形は……羽の主とは別人である真実がそこにあり。

「貴女様は……昔の記憶を失った、ミラテイシア・ゲールです。

いつか、貴女様に適合する躰の持ち主が現れた時に、その羽を移植してもらうように、私が貴女様の養父母に託したのです」

「——って、あのオヤジとおフクロにい？」

うげ。という顔で少女は、謎の強さ、大き過ぎる力を持った、育ての両親を思い浮かべたようだった。

「ミラテイシア・ゲールは『空』と『土』の因子を受け継いだ、

『黄輝の宝珠』の正統な資格者でした……それらの力を持った我が君はその死の直前、自らの命を全て——死を迎えた自身の身体から、力そのものである羽へ遷されたのです」

「なるほどな。『土』も黄の宝珠の重要な主力……反魂の儀や死者使役の力は確か、『土』の力がメインだったな」

五行の元素、木火土金水の『土』という力が司るのは、全てが生まれ還る土の本質……命そのものであると男は頷く。

「じゃあそれは……水華が自分でそうしたって事ですか？」

「その通りです。ミラ様のご遺体……その羽に宿っておられたミラ様に気が付いた私は羽を切り落とし、黄の守護者となった兄君の力も借りて……この世に留まるように加工したのです」  
ずっと座って話を続ける占い師は、ここに来てとても痛ましい顔付きで俯いていた。

「それは貴女にとって……貴女の躰の主には決して……たとえ己の心を持たない人形を、彼らが移植先に選んだのだとしても、詫びて許されるような事ではありません」

死者が現世に干渉する事は禁忌と、かつて口にした占い師は、  
「それでも私は貴女様に帰ってきてほしかった。自らも禁忌を犯し妖となっても、貴女様が残された可能性を消さず、それに賭けたかった」

だからこそ自らの記憶も封じたのだと、その後が続けた。

「長い時の中で、己が心変わりする可能性をも私は封じました。ただ貴女様を待つだけの、妖を作り上げたのです。全ては私の望みのためであり……私の咎であるのです」

「……」

茜色の髪の少女は一通り、占い師のその話を聞いた後に。

呆れとも憂いともつかない、複雑な表情で占い師を見つめ、  
「それってさ。何が——悪いわけ？」

淡々と冷静な声色で……根本的な前提を覆す問いを口にした。  
「あたしは自分が何者でもいい。生まれた通り生きるだけだし、誰かを踏み台にするように生まれたなら、そうして生きていく」  
そんな事は己の知った事ではないと、それは呪われた生と口を揃える者達への反旗を翻す。

「それが出来る力があるなら——そうして何が悪いの？」

それはまるで……すぐ近くで横たわる少年に向けても、同じ問いかけをするような、冷徹ながら力強い声だった。



「禁忌禁忌って言うけどさ、そういう生き物がそう生きて何が悪いの？ たまたま、奪う側に生まれただけの事でしょ」

「……………」

占い師は少女の紅い視線に、厳しい顔をして黙り込む。

「……………水華は……………それでいいの？」

瑠璃色の髪の少女は、否定も肯定もしない目でそれだけ尋ねた。

「水華の羽のヒトは……………本当にそのつもりだったのかな？」

「——さあ？ あたし自身は覚えてないし。あのバカもいつか言っただけど、覚えてないなら結局それはあたしじゃないし」

横たわる金色の髪の少年は以前、転生者という存在について、

何の意味もないと口にした事があり、

——誰かには大切だったことも、次のそいつには関係ないし……………そいつがそれを思い出すなら、今度はそいつが消えるだけだ——たとえ相手の本質が同じでも、死という断絶は越えられないと、勘の良い少年は捉えているようだった。

「そーいうやり方、確かにあたしも好きじゃないけど。でも、今あたしがそうだからって、隠さなきゃって庇われるくらいに負い目な事だつて勝手にみなさないでほしーわ」

「……………水華……………」

瑠璃色の髪の少女は、そこでただ、困ったような顔で微笑んだ。

「水華が本当にしないなら、それでいいって……………私も思うよ」

もしもそれを、禁忌と定めるべきであるとすれば——

奪う側が背負う重さこそ、消えない理由と知っているように。

何であれ——と。

強気さを失わない茜色の髪の少女に、占い師も困ったような顔で微笑みながら、再び口を開いた。

「貴女がどう思われようと、貴女様の羽はその躰を侵食します。

貴女がミラ様の力を、使えば使われる程に」

「——へ」

「先日折れたという白の魔法杖は、その侵食を杖が引き受け、貴女の躰を守るための防壁だったはずです。貴女様の養父母は……………貴女もミラ様も、守ろうとして下さったのでしよう」

「……………」

白と黒の三日月をそれぞれ設えた、二つの杖を与えられていた少女は、むむむと不服そうに息を飲む。

「羽の侵食が進めばどうなるんだ？ 梅さん」

今はまだ、本来は紅い髪と目の少女を変色させた程度の羽は、少女には重要な戦う力を使うなどという事は難しく、

「魔の躯体に天上の鳥の羽は、性質は真逆でも起源が近いので、負担は大きくても、解け合おうとするでしょう。魔の者である四天王や黒の守護者が、宝珠を扱えてしまうのと同じように」

「つて事は……………」

「どれだけ躯体の機能を犠牲にしても、羽は自らを優先します。ともすれば、ミラ様である記憶が戻る可能性すらあります……………代りにその躰は、羽を使う事以外は出来ない本当の人形となる」数日前の戦いで白の杖無しに力を使った後に、少女が一時でも身動き出来なくなった理由を、そこで明らかにした。

うーむと茜色の髪の少女は、一しきり腕を組んで悩んだ後、「レイアスも同じ見解？」

何故かじろつと、左隣の灰色の目の男を見つめる。

「……そうだな。杖が無いと水華に大きな負担がかかるのは、わかりきった事だ」

『力』を見る眼を持つ男は、そこでおもむろに立ち上がると、石室の中央で横たわる少年の懐からある物を取り出していた。

「悪いな、ユーオン。少し貰うぞ」

「おとーさん、それ……鶯ちゃんが書いてくれたお札？」

男が手にした三枚の護符に、瑠璃色の髪の養女は目を丸くする。

そうした護符に力を込める事が出来る友人からの贈り物を、旅立つ前、少年が受け取っていた事を知る瑠璃色の髪の少女は……ただ少年の力になろうとしてくれた優しい友人達の、札に込められた思いも感じてか、再び暗い顔色となる。

「五行の『金』の力が込められた札だ。これなら少しの間は、杖の補強になるだろう」

言いながら男は茜色の髪の少女から折れた魔法杖を受け取ると、柄の折れ目を合せて札を巻き付けた。

「うーん。有り難いけど、二、三回、本気で力使ったらすぐにまた壊れそうね、これ」

「そうだろうな。あくまでそれは切り札として、まだ戦うなら黒の方で基本はしのぐしかない」

少女の躯体本来の魔の力を受ける杖は、場所が聖地でなければ白の杖以上に、強力な力を制御出来る杖でもあった。

「そもそも……まだ戦うかどうか、ここからが大事な話だ」

灰色の目の男は改めて、斜め前に座る占い師を真面目な表情で見つめ、最初の目的に話を戻す。

「水華に『黄輝の宝珠』の継承は本当に可能なのか？ 梅さん」  
「……………」

「向こうには既に三人もの資格者がいるのに、何故彼らはまだ宝珠を手に入れてない？ 時間は十分にあつたはずだ」

宝珠の祭壇たる『地』を根城とする者の、その違和感を、男は最初の『地』での戦闘の時から感じ取っていた。

「あの島の中央には、確かに大き過ぎる力があつたが。あれは……まず、ヒトが触れられるようなものじゃない」

十五年前にその宝珠を奪った魔王が、身体の大半を壊され、他の宝珠を奪う事でようやく新たな身体を造る事が出来た中で、

それでも制御し切れなかつた死命の石は……『地』の祭壇に封じられてなお、男の目にはその脅威が明らかだった。

「貴男の仰る通り、祭壇にある黄の石は、何人にも触れられぬ封印のための強い力を常に放っております」

宝珠の力を使うにはその宝珠を身に着けるか、宝珠専用として逃えられた武器に取り付けるなど、触れる事が必須であり、

「黄の守護者になるためには、本来ならば前代の守護者がその封印を、自らの身をもって解き放ち……その後新たに封印を施した資格者が、黄の守護者として石に認められるのです」

へ——と。そこで一気に、茜色の髪の子の表情が固まった。「ちよつと待つて。それつてつまり、守護者になつても宝珠の力は使えないつてこと？」

「その通りです。黄の守護者の役目とは、神の如き力を持った石の封印……石を悪用せんとする者から守る事にあります」

「つまり……資格者の誰かが犠牲になつて、まず祭壇から石を解放しないと、守護者以外の者の悪用も出来ないつて事か」

男は逆に、納得がいったというように大きく溜め息をついた。

「敵がすぐに手を出さないわけだ。アイツらはその解放の役を、水華にさせたいんだな」

「詐欺だしそれ！ 危うく引つかかる所だったじゃないの！」

あわよくば先日にも、宝珠を手にとんと企んでいた少女は、

「むむむ……守護者になつたら石は使えない……でも守護者が使わないと、真の力は発揮出来ないとかどーせ言うのよね？」

心から苦悩して頭を抱える姿に、占い師は苦笑った。

「ええ。誰かに石を解放させた後、一度封印して守護者となり、更にもう一人誰か資格者を犠牲に石を解放すれば、不可能では

ありませんが」

「何その鬼畜条件。でもアイツらはそれをする気よね、つまり」だからこそ、犠牲となるべき前代の守護者がいない現代には、

複数の資格者が必要なのだと納得した少女だった。

「守護者になるだけでも、大幅な力の向上は得られますので、私も貴女様に石を手にしてほしいのですが。敵側の者が封印を解いた後に奪うという方法しか、見込みはないでしょう」

「それも大概、悪辣なやり方だな……おまけに難易度も高い」ここまで動かなかつた敵も自陣営の損傷は避けたいはずであり、

「要するに、誰かを犠牲にしても封印を解くぞ！ つて、まずあつちを追い詰めなきやいけないわけね」

「……つまりまだ、諦める気ないんだね、水華つてば」

しれつと言う少女に、瑠璃色の髪の子がただ苦笑うのだった。

それなら——と、男はそこで話をまとめる。

「俺はユーオンの剣と、ディアルスの王子を何とかしに、また『地』に行つてみるが。水華も……ついてくるのか？」

「とーぜん！ 人形使いのあのガキが何とかなれば、あつちの戦力も多分相当ダウンするし！」

威勢の良い少女とは対照的に、灰色の目の男は苦い顔付きで、

「まず剣が取り戻せるかどうかの不利さだぞ。あのコも敵側に帰つてしまつた以上、俺達の方が圧倒的に力不足だ」

「わかつてるつて」。剣取り戻してあの無敵人形味方につけて、ガキを攫えば全解決でしょ？」

……と、狙いの凶星をつかれたのか黙り込む男の横で、養女があははと乾いた声で口にした。

「あのコはきつと……ユーオンの味方はしてくれと思うな」苦しげながら笑う顔には、心配とそれを押し殺す信頼が共存し、

「不利なままならすぐ退却するからな。わかつてるな？ 水華」はいはい——と、本来は短気でも普段は慎重な男に、誠意の無い返事をする、冷静で我が侘な少女だった。

翌朝には再び、『地』に攻め入る事とした者達を、占い師は最後まで苦笑いながら見守っており。

「梅おばあちゃんは……もう帰っちゃうのかな」

当然ながら留守番となる、弱小な人間の瑠璃色の髪の少女は、占い師に尋ねたい事があつたようであり。

作戦会議がお開きになった後に聖堂に戻ってから、さっさと寝付いた茜色の髪の少女を置いて、石室に戻ってきた瑠璃色の髪の少女に……まだそこにいた育ての父と占い師は気付かず、話を続けていた。

「……………え？」

そして少女は――

一番聞きたくなかった現実を、そこで耳にしてしまう。

「梅さん……水華の羽の持ち主は、何歳の時に死んだんだ？」

「……………やはりそこを尋ねられますか。レイアス殿」

占い師が本当に話したくなかった事はそれだったと示すように、占い師は沈痛な声色で先を続ける。

「水華様はおそらく……十五歳まで。ミラ様の命の軌跡がある年齢までしか、その生は繋げないでしょう」

「……………」

やっぱりか……と、育ての父は顔色を暗くする。

「ミラ様は既に死した己を、赤子からの記録を再現する事で、水華様を形成しています。躯体はあくまで別人のもので、記憶までは再現出来なかつたご様子ですが」

「そうだな……そんな力の介在がなければ、あの人形は決して動かなかつたらしいからな」

そのため、羽からの助けがなくなれば今の少女は消えるのだと……羽にも限界の刻限があると、男にはうつつすらと見えていた。

「……………へえ……………」

石室の外の壁際に隠れ、立ち尽くす少女はただ俯きながら、

「……………水華もやっぱり……………何処かに行っちゃうんだ……………誰にも聴こえる事のない程小さい、絞り出すような声はしかし。

くすりと……………」

硬く俯き、暗雲に覆われたはずの顔に、白き導きの夜が宿り。

「それなら私が……………水華をもらっちゃって、いい……………？」

少女自身にすら聴こえない、透き通るように白く澄んだ声で。最早、限界が目に見えた誰かは不要とばかりに――

有り得ない幻を望んだ誰かの夢が、ついに目を覚まし始める。

\*

その少女の望みは、ただ「生きたい」と。  
剣を決して手放さない赤い天使の近く、新たに剣を襲う夢は、  
それだけを訴えかけてきていた。

「……うん。わかってるよ……ミカラン」

悪魔である少女の望みを叶えるために動き、代りに少女の魂を  
手中に収める契約者は、夜の闇に包まれた建物の中、無表情に  
壁に持たれて座りながらそれを呟く。

「もう一度、ミカランに戻りたいよね……わかっているから……」  
既に灰に還った吸血姫の身は決して、戻らないと知っていても。  
叶わない望みこそ、永遠の契約の糧と知る人形使いは、純粹に  
それを願う誰かと、また利用する誰かと……傍観する誰かなど、  
様々な者が小さな軀に共存する身の上だった。

ぎゅっと、大きな黒い両目の灰色の猫のぬいぐるみを抱き、  
赤い天使と同様に、剣の関係者であるはずの黒髪の幼子は、  
『ピアス』はぼくなのに……ぼくが、言う事をきかない……」  
夜の見回りに出た者達について、勝手に外に出た赤い天使に、  
小さく溜め息をつくように口にする。

「兄さんもルシウも……ずっとこのまま、届かないのかな……」

誰かが一番、力になりたかったはずの者達ほど——

誰かの純粹な願いが無意味となる、救い無き者達でしかなく。

その誰かの望みは、ただ「帰りたい」と。  
ぬいぐるみを離さない幼子の近く、赤い天使と幼子の誰かは、  
それだけを長く望みにしていた。

「……兄さん達のいるところに……帰りたい……」

叶わない望みと知りつつ、時の止まった心に他に願いはなく。  
いつしか湖の底となったある聖地——旧時代の宝物収集家が  
封じた不滅の園の、宝の鎧に宿った誰かは。時が止まった事が  
幸いし、その鎧が発掘されるまで、長く自らを保ち続けたが。

「あーあー。かわいそーに、ピアスちゃんとソールっち」

「——？」

彼らの後方、剣を抱え立ち止まった赤い天使を一瞥した青闇の  
髪の吸血鬼に、石の建物の平らな屋根に立つ白銀の髪の神父は  
微笑みながら首を傾げる。

「オレ以外優しくしてやらないから、ついてくるじゃん」

「君は、アラス君とは違うと言いますが、優しいんですか？」  
ここにこ笑って尋ねる神父は、にやりとする吸血鬼に、

「クレスと同じだった髪の色が変わってしまったのは……俺も  
残念ですけどね」

彼が殺したという二代前の黒の守護者——実の従兄の名前を、  
あっさり口に出しており。

彼の口からその名が出た事にも、吸血鬼はク——と笑う。

「別に髪の色くらい、いつでも変えられるけどさ？ アラスは弱ってるだけで、主人格である事には変わりないし」

「そもそも何故、あの色だったんです？ 君の躯体はシア君に似せて造られたはずでしょう？」

「そりゃねえ。この体を支える黒の石には、十五年前まではずーっとクレスが残ってたしね。アラスはクレスが守り育ててみたいなんだし、それで性格も姿も似たんじゃないの？」

『力』を持った人造の生き物というのは、まず完成しないか、完成しても心を持たず、結局稼働しない事がほとんどであり。この吸血鬼や茜色の髪の少女の如く、宝珠や羽といった外部の補助媒介を持たせても、成功例は稀だという。

「でも……そこまでしつこく残るなんて、クレスにはよっぽど、大きな未練があったんだろーけど」

「……………」

微笑んだままの神父に、皮肉気に吸血鬼は振り返って笑う。

「まさか、悪魔に利用された育てのお母さんに殺されて、その子供だった従弟が罪を被るなんてさ。相当無念だったろーし？」

「そうなんですか。それは意外な展開ですね」

ぴくりとも動じない神父には、彼らのそうした言葉はどれも、「届かない」事を……全く信じていない相手に、黒髪の幼子の嘆きの再現を、吸血鬼の青年は改めて目にしたようだった。

黒の守護者である青年が口にした内容が、たとえ宝珠という媒介を通した……殺された本人からの言伝であっても。

そして神父は、逆に吸血鬼の核心を探りにかかる。

「それでは君は、クレスの未練のために動いてきたんですか？」

「いや？ 翼権っちは、アラスが自分から黄の宝珠の封印を解きそんな事を止めたかっただけだし。アラスは単に、水華を守護者にしたかっただけだしなー」

そこに過去の黒の守護者の未練は関係ないと、吸血鬼は笑う。

「そんな事で、アラス君は大切なお仲間の、他の守護者に背を向けたんですねえ。いくら魔王一派に宝珠を渡したくなくても、彼が利用されていれば同じじゃないですか？」

「オレもそー思うよ？ その辺はソールっちの勝利だねえ」

でも……と再び吸血鬼は皮肉気に笑うと、

「今度はオレが直接、石をもらう。もう翼権っちもアラスにも、主導権はないも同じだから——この体はオレが好きにする」

長く閉ざしてきた己を解き放つ、自称怨念は、昏くあくどい笑みだけをそうしてたたえるのだった。

「それでは……どの資格者を、君は使うつもりですか？」

黄の宝珠の封印を解くため、少なくとも一人は必要である犠牲。その役を引受けようとしてしまった者、それを守らんとした者、両方を身の内に持つ吸血鬼に神父は尋ねる。

「さーねえ？ レイ姉ちゃんはまだ死にかけだから、あいつでいいんじゃないって翼権は見放してたけどねえ」

現在は違う吸血鬼の羽を移植されて、吸血姫に身を明け渡した、旧い仇敵——四天王である女性の名前を守護者は口にする。

「十中八九ないけど、何かで間違っただけでレイ姉ちゃん復活したら、困る奴もいるし。そもそも何でレイ姉ちゃんまで資格者なのか、さっぱりだけど……ソールっちも陽炎サンも、ミカランに別の躰が見つかり次第、そのつもりだと思おうよ」

「酷いですねえ。生き続けたいなら協力するからと、また灰に還るような事を彼女にさせるんですね」

「酷いと言いつつ心から楽しげな神父に、吸血鬼もにやりとし、水華にソールっちの声が届くなら、また別なんだけどなあ。中々あいつ、人形のくせに……人形だからこそしぶといや」

その本体は決して望まなかっただろう目算を、事も無く口にし……その声が改めて、赤い天使が持ち続けている剣に、思考と感情の火を点していた。

——……アイツは……俺の敵だ……——

そんな剣を知る由もなく、神父は淡々と吸血鬼に尋ねる。

「君は俺を数に入れないんですね。それはクレスの意向ですか？」

「いや？ もうここにクレスはいないし、そもそもアンタは、クレスが知ってる誰かじゃないし」

だからそれは彼の契約者の意向だと、吸血鬼は無機質に答えた。

「ソールっちは今のアンタに、そのまま力になりたいってさ。

だからピアスちゃんとずれるのかな？ ピアスちゃんは本物の兄さんに、ソールっちは偽物に感情移入しちゃってるから」

今も彼らの後ろに立った、赤い鎧の天使を振り返りながら。

「……ねえ？ 兄さんが心配だよ？ 無敵のピアスちゃん」

その天使の赤い鎧には、古い誰かの命が囚われており、

「魂の無い人形を動かす程の、強い思いなんだから……何一つ答えてくれない兄さん達は、本当に冷たいよねえ」

そこにあるのは命という、心の本質だけであり……その自我を司る魂は違う場所にあるということすらも、命を扱う死神業が仕事と称するこの吸血鬼にはわかっていようだった。

「ま、ソールっちに関しては仕方ないけど。所詮アンタの同類、人間かぶれの元魔族だし」

「おやおや。仮にも一国の王子に、酷い事を言いますね？」

「王子じゃないし。王子を食って人間になった魔族じゃん」  
そこで吸血鬼は心から歪んだ顔で、悪魔のように笑う。

「アラスが昔、バカな魔族女を殺さずに、見逃したりするから。

可哀相にパルシイ君てば、攫われた上に食われちゃった」

「と言っても、彼女は結局王子に負けましたがね。王子に扮し化け物の多い大国を乗っ取る野望が、残念なことです」

全く残念そうに見えない顔で、神父も無害そうに笑った。

「でもそれで桔梗も若返ったわけだし？ 洗脳の能力を体ごととられたけど、幽鬼としてピアスちゃん達に影響力もあるし」

元は神父の躰、『蓮華』の妹分である魔族の女の名に、神父はしかし全く何の感慨も見せず、

「所詮ただの残骸ですよ。蓮華がとくに消えたのと同じです。ピアス少女の魂で、人間の真似事をしてるだけでしょ」

様々な者を内包する黒髪の幼子を突き放すように、ただ笑った。

「真似事の延長で、人形使いが出来たら大したもんだけどなあ。いったい今は、誰がどれだけ、あの軀を動かしてるのやら」

最早それは未知数であると、吸血鬼は赤い天使の横に立つと、人形の頭を撫で撫でしながら手元の剣を楽しげに見つめた。

「……聴こえてんだろ？ ユーオン君」

何故か確信のこもる声で、吸血鬼は剣に話しかける。

「オマエはオレより生粋の死神で、加えて……オレよりもっと、勘が良いみたいだしね」

五感で意識的に現状を探れる、剣に宿った誰か程ではないが、この吸血鬼には無意識に現状把握に優れる直感があった。

それを情報として知っていた神父は、剣に話しかけ始めた、一見は危ない相手を特に気にせず建物内へと戻っていき、

「ピアスちゃんの所に来て、オマエは満足？」

赤い天使と剣だけが場に残った状態で、吸血鬼は不意に――

「全然そう見えないけど。でも帰りたくもないんだな、オマエ」  
あくどさは残ったままでも、何処か気の緩まった……髪の色が

青銀であった頃のような気安さを見せていた。

青闇の髪の青年は、何一つ返答は不可能な剣にも構わずに、石の屋根に人形を座らせ、自身も座り、剣に話しかけ続ける。

「オマエはこの先……何処に行きたいんだらうね？」

剣が今彼らの元に在る理由を、全く知るわけではない青年は、ただ剣の迷いだけを感じたように淡々と口にする。

「オマエは何で――あの時、オレを殺さなかったのさ？」

そこでじっと、赤い天使が無表情のまま青年を見つめる。

「ああ、翼権つちはほぼ死んだけどね、ピアスちゃん。でも、あの時首を落とされてれば、今のオレすらここにはいないから。ユーオン君にはそれは、わかってたはずだけだね？」

吸血鬼である青年が、仮にも聖地という最も相性の悪い所で生命活動を絶たれることは、完全に致命的であり、

「オレでなければ即お陀仏だし。それもわかってユーオン君は、わざわざオレを生かしたわけなんだよね」

精霊魔法の使い手である青年に、精霊の加護と、守護者として宝珠からの守りがあっても。止めを刺されればその場ですぐに灰に還つただろう吸血鬼は……躯体を支える宝珠すら奪わず、自身を無力化することに留めた天性の死神の行動原理に、目が覚めた時点で気が付いていた。

「要するに……頼也兄ちゃん達を悲しませたくなかったんだろ」  
青年と同じ守護者で、剣をその居所に保護してくれた事のある者の名を口にし、青年はにやりと膝に頬杖をつく。

かつて殺意を尋ねた時の、剣の答えをそこで思い出しながら。  
「何処からどう見ても、オレはオマエには敵なのに。オマエは、それがオマエだけの敵なら殺さないんだな」

――水華にまで手を出すなら――……アンタは俺の敵だ――

少し前の青年の目的は、剣には受け入れ難く。しかしそれは、青年の意図を感じた剣だけの都合と、青年も剣もわかっていた。



「水華がオレの無力化を望んだから、オマエはそうしただけで。

でも水華を、守護者にも犠牲者にもオマエはしたくないんだな」  
だから剣は青年を敵とみなしはしたが、殺すべき相手とまでは  
みなさなかつた事実がそこにあり、

「アラスなんか普通に甘いだけだけど。アイツは敵も味方も、  
可能な限り傷付けたくないんだ。そのせいで桔梗みたいな奴が  
生き残って、後々に誰かを傷付けたとしたってね」

対する青年の本来は、死神という仕事からも、死すべき寿命の  
者だけを葬送するという信条の持ち主だった。

「でもオマエはもつとシビアだろ。寿命であるうがなからうが、  
弱者だろうが強者だろうが……いつか味方の害になる相手に  
味方にそれが必要なら、いくらでも殺しそうだ」

それが、職業ではなく天性の死神たる剣が、赤まみれになった  
理由と。これまで剣と対峙した中で、青年はその結論に至り、  
「オマエ自身は誰かを殺したいどころか……出来れば殺したく  
ない部類の奴みただけだ」

そんな自身の性質に気付かず、当たり前前にそれごと殺してきた  
剣にも気付くように、暗く微笑む。

「味方が望むなら敵を殺し、望まないなら敵でも殺さない……  
そんなオマエは味方が味方の死を求めた時、破綻したのかな」  
嘲るような笑みとは裏腹に、蒼い目にだけは剣を憐れむような  
澁みを、自称怨念の職業的死神は湛えていた。

死神たる青年が、何を何処まで把握しているのか。

この死神の仕事が、悪魔と契約して死を回避しようとする、  
死すべき人間の葬送である事を——剣は知るわけではないが。

「オマエは、それがオマエの役目で、必要なこととしてもさ。  
味方の望みでも……それでも味方は殺せなくて何が悪いのさ？」  
何故か剣の事を、怨念を自称する青年は気に入ったのか、

「オマエは剣だろ。剣なら敵だけ、必要な分だけ殺せばいい」  
それなら殺せない者がいても、剣の役目は果たせると嗤った。  
「だから……死神をするのは、オレに任せておけば？」

その微笑みはまさに、悪魔と呼ぶのに相応しい昏さであり……。

——アンタは何で……ここまで来たんだ——……

青年を一度戦闘不能とした時、そう尋ねた剣を思い出しか。

青年は改めて、今の青闇の心をあつさり伝える。

「オレ達は私情を優先する死神だし、仕事は重視してないけど。  
アラスと翼権が、周囲も自分も守るなんて無茶でソールうちに  
捕まるから、オレが動くしかなかったんだよ」

青年は嘲るような口調ながらも、自分自身であるその守護者の  
やり方は嫌っていないようでもあった。

「基本オレは無気力なんだけどね。あれだけアイツらが弱っちゃ、  
ここに在る力はオレが引き受けるしかないし」

多重人格にしては似過ぎた彼らが、あえて別個に存る理由は、  
茜色の髪の少女の魔法杖と似た役割分担である事を——

多くの力を預かるその脅威を、今の剣は知る由もなく。

その守護者の青年は本来——剣と共に在った二人の少女を、他の仲間と同じくらい大切に思っていたのだと。未だその名を名乗る青年に会った事が無い剣は、ようやく知る事になる。

—アラスは単に、水華を守護者にしたかっただけだし—  
それで自らが犠牲になる必要があつたとしても、青年にとつてその少女は、過去に刃を交わした四天王の情報を基に造られた、四天王の実子ではないが娘と言える存在であり。

—レイ姉ちゃんは死にかけだから、翼権は見放してたけど—  
和解出来なかつたとはいえ、最初からその四天王は青年には、血の繋がらない姉のような存在で……命が残り少ない相手の、忘れ形見となる茜色の髪の少女を造る事に協力した者の一人が、剣がずっと関わった、漢字の名を持つ方の青年だった。

漢字の名を持つ青年は、本来の青年の記憶を制限することが出来たため、本来の青年は東の大陸で茜色の髪の少女と出会い、実際に生きて動く姿を目にするまではその存在を知らず。

他の守護者の子供を可愛がっていた青年は、少女も、少女と連れ立った瑠璃色の髪の少女も、守るべきものとみなしていた。それが既に、青年が人形使いに絡め取られた後であっても。

しかしそうした青年の、そもそもの望みにも関わらず、—あいつ、人形のくせに……人形だからこそしぶといや—

茜色の髪の少女を、犠牲にする事を厭わない青闇の髪の青年は……他の守護者に対しても、真に敵対する運命を既に受け入れ、むしろそうなったからこそ姿を現した状態とも言えた。

青闇の青年は全く、剣を恨んでいない様子であるものの。それは確実に——青年を呼び起こした剣の咎でもあり。剣と青年が奪い合う定めにある事は、互いに悟っていないながらも。

「……………」

赤い天使は今も、剣を大切に抱えながら青年のそばに在り。

赤い天使にとつて青年は……何故か、今の剣に必要な相手と観定め、そうしているようだった。

—オマエは剣だろ。味方は殺せなくて何が悪いのさ？—

赤まみれとなつた剣には、そうした私情は許されないものと、当たり前前に定めていた天性の死神とは違い、

—死神をするのは、オレに任せておけば？—

剣から観れば利用しやすい、危なっかしい私情で動く青年……それ故に、剣に一度敗れた甘さを持っていた職業死神は。

まるで、天性の死神から非情さを受け取った代りに、剣へと甘さを渡したいかのようにでもあり。

そして……剣は今のまま、剣でいて良いのだと。

無責任な肯定をあっさりと渡す、危うげに甘い死神だった。

赤い天使に抱えられたままの剣は、そこで初めて——  
—アイツはもう……今度は手加減、しないはずだ……—  
剣がこれまで共に在った者達の、確実な危機に成り得る誰かを  
感じたためなのか、

——……俺は……まだ——……—  
戦わなければいけないはずだと。剣でしかない身をもどかしく  
思う、生きた物に戻る事になった。

消えかけた魂の火が、完全に点されたように……そのために  
襲い来る、激しい嘔吐きにも剣は気付く事になる。

—アイツを……放っておいて、いいのか……？—  
何のために自身がここに在るか、思い出せないままでいても。  
全てを手放すにはまだ早いと、明らかな剣の過ちを悟る。

未だに甘さを持ち続けながら、青闇の髪の毛の吸血鬼は確実に、  
次に敵対者が現れた時には容赦しない心積もりであり。

そんな矛盾を両立させる破綻が、剣には想定外の新たな敵の  
——本来死に体ながら、無理に起こされた誰かの本質だった。  
その憤りは全て、今後現れる敵に向けられるはずであると。

そうした相手が待ち受けていると、知る由もない敵対者達は。  
夜明けと共に、剣の持ち主だった少年の傍らに集まっていた。

既に古い師は地上に帰り、現在この『火の島』に残るのは、  
灰色の目の男と養子と養女、茜色の髪の毛の少女の四人だけであり。  
これから更に、その内の半分が『地』へと飛び立つ手筈で、  
その前にもう一度少年の様子を見に来た所だった。

灰色の目の男は、黙って男の傍らに立ち、少年の姿をじっと  
見つめる瑠璃色の髪の毛の養女の肩を抱きながら、

「ラピスはユーオンに付いててやってくれ。……出来るか？」  
「……………」

育ての父を黙って見上げる養女に、苦しげに笑いかける。

これから戦地に赴く彼らに、自身は足手まといと知る養女は、  
あえてそうした言い方をする男を切なげに見つめた。

「私も連れてって、って言ったら……おとーさんは困るよね」  
「……………」

養女の拙い声に哀しげな男を挟み、反対側に立った茜色の髪の毛の  
少女は呆れたような声で、

「当たり前でしょ。ここがまだしも、一番安全地帯なんだし」  
冷静に現実を口にし、ぴくりとも動かない少年の額にうりつと  
指を弾かせた後で。

沈痛かつ神秘的な顔で佇んだ瑠璃色の髪の毛の少女に、茜色の髪の毛の  
少女は不意に、不敵に笑いかけていた。

「いい？ あの無敵人形がもしもコイツを攫いに帰って来たら、  
ちゃんとあなたの銃で撃退すんのよ、ラピ」

「……………え？」

「あのバカに効くのって、正味それだけだしさ。剣は向こうにあるんだから、コイツまで敵に回ったら洒落になんないし」

「……あのコ……ここまで来るかな？」

ポカンとする養女に、育ての父は苦笑う。

「それは無理だろう。あのコにはユーオンを抱えて『地』まで飛ぶ程、飛行能力はないはずだ」

赤い天使以外の敵は、化け物としては最上級の妖精の魔女が施してくれた結界のため、余程の事が無い限り侵入は不可能と少女達にもわかっており、

「それでも万一、あのコがここに帰って来る時は……きつと、ユーオンを助けるためだと思いたいな」

「……」

「だといいいけどさー。でも一応銃は持つときなさいよ、ラピ」  
油断だけはするなど、茜色の髪の少女は珍しく、真面目な顔で瑠璃色の髪の少女を横目で見る。

「コイツが何かで目が覚めて、敵になる可能性も無いし？」

「……ユーオンが起きてくれるなら、別に敵でもいいけどなあ」

あははと瑠璃色の髪の少女は、久々に明るげに笑った。

「だからユーオンもここに置いてくんでしょ？ おとーさん」

「……」

「ユーオンがこの先どの道を選んでもいいけど、ひとまず今は邪魔するなって。邪魔しようがない所に置いてくんだよね」

剣を取り返し、少年を助ける事を目的としながら、剣の元へと直接少年を連れていかない育ての父の真意は。

以前にも同様に、少年を置いて家を出た事のある育ての親の思いを知っていた養女は、再び苦しい顔付きで笑う。

「ユーオンがやろうとする無茶な事は、物理的に不可能にしてあげないと……いつまでもユーオン、無茶し続けるもんね」

妹分の少女を守らんと、苛烈な行動を厭わなかった銀色の髪の少年を案じた彼らは。彼らが家を空けなければいけない時に、少女が一時旅立つ事になった際、それを少年には知らせず……

問答無用で少年を一人、置き去りにした経緯があり。

「……ラピスの言う通りだよ、全く」

羽の無い少年は当然、たとえ目覚めてもこの島からは出る事は出来ず。敵との間で板挟みであるはずの少年を、そうしてまた置き去りにする事を決めた男も、苦笑うしかなかった。

「せめてユーオンが、俺を恨んでくれたらいいんだがな」

「何それ。相変わらず 안타ら、コイツに甘いわよね」

そこで不服げな茜色の髪の少女に対しては、男も養女も同時に顔を見合わせ、目を丸くする。

「剣取り返して帰ったら、叩き起こして百叩きでしょ。その後

コイツがどーしても勝手だけど、それは譲らないわよ」

「……そーだね。もうこんな事、してほしくないしね」

そのまま僅かに、瑠璃色の髪の少女は安堵したように微笑んだ。

「おとーさんも水華も、ほんとに……優しいね」

？ と首を傾げる者達に、ただ少女は幸せそうに笑うと。

行つてらっしゃい、とだけ、当たり前前の朝のような気軽さで

……戦地へ発つ者達を見送った、置き去りの人間の少女だった。

\*

その潜伏地は剣にとって——剣以上の現状把握の力を持った赤い天使と黒髪の幼子にも、おそらくは鬼門だった。

—何で——……私、人間に殺される……？—

——……何処に行けば、会えるのかな……——  
—もうあのコは、助けられないようね……—

入れ替わり立ち代り、誰かの強い痛みや嘆きが現れる状態は、そこにいる者のほとんどが救われない状態であった事を語って余りあり。

剣が少年の手にあった頃の、昏く赤い夢程差し迫るものは、生きたいと願う吸血姫の夢くらいであったもの。何かの力となる事を願う赤い天使と黒髪の幼子の心を奪うには充分過ぎる、穴だらけの居場所と剣は悟っていた。

その赤い天使と黒髪の幼子がいったい誰であるのか……。

情報だけなら『妹』と伝えられたにも関わらず、未だに剣は、自身にそれを符号させられなかった。

たった一つの夢が繰り返し何度も、剣を侵すにも関わらず。

——……兄さん達のいるところに………帰りたい………——

赤い鎧をつけたその少女は——元々、生粋の処刑人だった。それが誰かわからなくても、情報だけは剣に今も届き続け、—わたしは処刑人だから。優しくないことをするヒトを殺す—天性の死神として、誰かの敵を殺す道を選んだ剣とは、少女は似て異なる信条の元、多くの命を奪った過去があった。

処刑人たる少女の基準はたった一つ——気ままな私情であり。現状把握に優れた少女は、常に『今』を観てそれを決めた。—殺したい、ヒトを殺して——何が悪いの？—

少女は少女にとって、優しくないものを咎人と定め。その上でそれが殺すべき相手と誰かが定めれば、躊躇いなく命を奪った。たとえそれが……少女の実の父親であっても。

どれだけ性根——過去は優しい者でも、現在、他者のためにならない行動をとる者は、どんな理由があっても咎人であり。たとえ自己満足でも、現在、他者のための行動をとる者は、少女にとっては「優しいヒト」で生かすべき相手だった。

そうした私情で咎人を選び、殺したい者だけを殺した少女にとって……他者の敵だけを殺す剣は、「優しい」者でしかなく。—ごめんね……わたし、行くね—

そして剣を助けるために命を落とした少女は、剣がどうして、今この時、ここに在るのか。剣の望みを剣以上にわかっていた。

剣と同じように、長く魂を囚われた少女は、しかしその心を決して失わず。剣に少女がわからなくても、少女は剣を誰より理解し……剣に今何が起きているかさえ把握していた。

そんな少女を間近で観ていても、心に戻せない剣の窮状を。

—オマエ——タチの良くないものに魅入られてないか—

剣はただ……多くの心に混沌としながら、黒い鳥を思い出す。

—あたしはそれ、どうすればいいのよ?—

剣が何者かはわからなくとも、何かを感じたらしい黒い鳥は、空の落し物に対してわざわざ親身に持ち主を探し。

—一見はぶつきらぼうでありつつ、その行動はお人好し以外の何者でもなかった黒い鳥と、鳥の内に潜んだ謎の共存者は……何故か、叫び出しそうな程剣を揺さぶり、自らを手放した剣に最初に火を点した、確かな導きの手だった。

この先剣が五感を取り戻せるなら、出来る事なら……それが誰だったのかをもっと知りたいと、剣に切望させる程に。

そうして火だけは点された剣を、赤い天使は大切に抱える。

「おはよ、ピアスちゃん。残念だけど、朝一番からお客さんだ」  
「……………」

赤い天使を連れに來た青鬘の髪的青年は、顔にも声にも全く出さないが、吸血鬼として決して強くない朝に叩き起こされた不機嫌で内心は一杯と、剣にもわかった。

「あー。ユーオン君はまだまだ、さ迷ってるのかあ。それじゃピアスちゃんも身動きとれないよねー」

「……………」

剣を抱え座り込む赤い天使は、未だ黒髪の幼子の指示を聞かず。そのために吸血鬼は片膝をついて、赤い天使の猫耳付きの頭を撫でながら、にこやかに諭しにかかる。

「ヒドイ兄さんだよ、ホント。迷ってるのはこんなに可愛いピアスちゃんのためじゃなくて、別の奴のためなんだから」

「……………」

「でもまあ、そっちは表面的な自覚で、実際はピアスちゃんのためだと思うよ? ピアスちゃんもわかってるだろーけどさ」  
それがわからなくされた剣を、吸血鬼は知るわけもなかったが、  
「ピアスちゃんの好きに動いていーんだよ。心配しなくても、ソールっちとルシウの兄ちゃんは守ってやるから」

「……………」

赤い天使自身の迷いは知っていた吸血鬼は昔から、猫と天使に弱いらしく。素直に優しく笑った吸血鬼を、赤い天使はじっと見つめた後に……ようやく立ち上がったのだった。

そうして、剣を抱えた赤い天使を連れ、青闇の髪の吸血鬼が、『地』の中央にある建物の外に出た時には。

「——遅いわよ、シア」

「……おはよう、『ピアス』」

入り口には土色の髪の女と黒髪の幼子が、銀色の髪の吸血姫に守られながら、ぎりぎり建物内に隠れる状態で待っており。焦るなよなく。ここの中なら結界張ってやってんだからさ」

先日も戦闘場所となった、建物のすぐ外側……建物を菱形の頂点とするような地形で森に囲まれた、白い広場の対角線上に、茜色の髪の少女と灰色の目の男が降り立っているのを吸血鬼は確認していた。

「おはよー。生きてるー？ ルシウの兄ちゃん」

「やっと来ましたか。これで役者は揃いましたかね？」

先に来訪者を出迎えた、白銀の髪の神父の背後に立つ吸血鬼と、その隣に控える赤い天使に来訪者達は顔を歪める。

「——ちよつと。アンタ、誰」

青闇の髪の吸血鬼の変質に、茜色の髪の少女はすぐに気が付き、「やだなー。ピンチになったキャラがパワーアップして復活は王道だろ？ 水華」

「……気を付けろ、水華。アレは、力を使うためだけの存在だ」  
予めその変質を知っていた灰色の目の男は、吸血鬼を睨みつつ、潜入した頃から悟っていた見立てを口にした。

「何よそれ。つまりあれ、力の人格とか何とかいう奴？」

「赤の守護者や西の四天王にも近いものがあつたらしいが……どんな人格に見えようが、彼らの目的は一つだ。力を制御して力の本体を守る……そのためならどんな事してもな」

それはこれまでの青銀の髪の青年と、似て非なる存在であると男は付け加えた。

「アイツは魔ではなさそうだ。聖地で力は弱まらないどころか、強められて……魔の宝珠の力は弱つても、それでもアイツは間違いなくこの中で最強だろう」

「さつすが、心眼持ちの兄ちゃんは言う事が違うね？」

以前に青銀の髪の青年が創った空間の綻びを探し、見事壊した、『力』を見る事に特化した男に、吸血鬼は楽しげに悪どく笑う。  
「赤の守護者には、確かに近いかな。でも西の四天王の方は、どつちかと言うと翼権つちが近いけどね」

その名を出した所で、吸血鬼はふーっと大きく息をついた。

「ところで、オマエ達が何しに来たか、何となくはわかるけど」  
「——！」

右手を肩の高さで水平に上げた吸血鬼の周囲から、ほぼ一瞬でいくつもの水で出来た竜巻が出現する。

「オレもゆつくり寝たいんだよね？ つてーか眠らせてよね？」  
男と少女が驚く間もなく、吸血鬼が手を頭上に掲げると同時に、竜巻は四方から彼らを取り巻き、その内へと一気に飲み込み。そこで一つに合わさった巨大な竜巻が出現した。

「おやおや。シア君は随分問答無用ですね？」

竜巻に飲み込まれて見えなくなった者達の前で、併せて起こる強風に神父は細眼鏡を抑えるように目を庇いながら、吸血鬼を振り返って穏やかに笑った。

「八つ当たりは良くありませんよ？ 奪われ続けてきた君の、長年の憎悪の対象は彼らではないでしょう」

「知らないし。オレ、単に眠いだけだし」

笑顔の神父とは対照的に、無表情に吸血鬼は神父を見返す。

「アンタは、水華は自分の獲物って言いたいだけだろ」

「それもありますけどね。君は消滅したシア君に取り残された力の人格であり、またアラス君と共に在る間、大切な者を失い、同じ苦しみを味わった生き物です。その上今度は、君達の顔として動いてくれた翼権君を失った」

その黒の守護者が複数の自身を持ったのは、経歴の複雑さもさながら……自己を統一せず共存する道を選んだのは、ただ互いが大切だったからだ、神父は皮肉気に笑う。

「直接手を下したのはユーオン君ですが。君をまず、その道に巻き込んだのは俺達でしょう」

「……」

「アラス君の大切な者を奪った魔王一派に、そもそも協力する事自体、君の中には相当な憎悪が渦巻いている。違いますか？」  
神父を見返す吸血鬼は、無表情のままそこで黙り込んだ。

「普通の守護者には、『カギ』と呼ばれる相方が存在しますが……君はそれに縛られず、自由に宝珠の力を使う事が出来る」  
本来はそうした者を定め、黄の石以外の宝珠も普段は真の力を封印するのが正統な守護者であるものの、

「君の『カギ』となるべき相手は十五年前に失われてしまった。

『カギ』は守護者が真に大切に思う相手でなければ定める事は出来ない……君に大切なものは沢山ありますが、そのどれも、君のものではありませんからね」

そのために、この吸血鬼は孤高に宝珠を守るしかなかった事を、まるで神父は憐れむように——穏やか過ぎる顔で口にした。

しかし吸血鬼は、面白くなさそうに一度だけ眉を顰めると、『カギ』だったのは、元々オレだよ？ オレは残念ながら、そのせいでピンチヒッターの守護者なのさ」

本来自身は、黒の守護者となるべき者ではなかったとあっさり口にし、神父から巨大な竜巻の方に視線を移した。

「オレは単に——大きな力が欲しくて、それを使いたいだけで」  
その竜巻に起こる異変は、とっくに承知していたというように、歪んだ顔付きで再び微笑むと、

「楽しめそうだな……久しぶりにさ」

突然内部から破裂するように、水で出来た巨大な竜巻が激しく四散していった直後に。

その内から現れた、灰色の巨大な獣の姿に、心から楽しげに青闇の髪の吸血鬼は昏く笑ったのだった。



竜巻の内からその力を破った灰色の飛竜……四本足で大型の、コウモリの羽を持つトカゲのような獣の足の下で、男と少女は呆れ顔で吸血鬼を見ていた。

「信じられない。精霊魔法って、何て力の無駄使いよ、アイツ」札で補強した白の魔法杖を手に、早くも防戦のため使わざるを得なかった状況に、茜色の髪の少女は腹立たしげにし、

「水華はもう一人を頼む。アレの相手は俺の役目だ」

一方で妙に冷静な灰色の目の男は、何故かあっさりそう断言し、はい？ と少女は明らかに訝しがる。

「守護者の相手、レイアス一人でする気？ 固まって動く方がいいんじゃないの？」

初めは協力して動き、剣を取り戻すのが先決と、意外に少女は前提の作戦を重視していたようであるが、

「どうやらそれは無理そうだ。あの大きな力を、固まって共に受け続けたらアイツの思うつぼだろう」

先日は力の全く通じない赤い天使を、今回は力を無遠慮に使う守護者と、毎回最も脅威の者の相手を引き受ける男に、少女は大きく溜め息をついた。

「結局、各個撃破してからって事か……やなんだけどな、あの神父の相手すんの」

要はそれが少女の本音らしく、思わず灰色の目の男も苦笑し、「気を付ける——無理はしないでいいから」

個別に戦うために男から離れる少女に、それだけ声をかけた。

「へー。オレ達二人を敵と絞るんだ、飛竜の兄ちゃんは」  
「……………」

距離をとった少女の方を見る神父の隣に出ると、男と対峙する吸血鬼はちらりと赤い天使を振り返り、

「ピアスちゃんが少しでもオレ達援護してくれたら、アンタも水華も勝算は全く無くなるのになね？」

その可能性をあえて無視するような男を、嘲る声色の吸血鬼に、「生憎、防御戦は得意分野だ。こちらも単身じゃないからな」ばさりと灰色の獣を傍らに控えさせ、この状態こそ本領発揮と、男はまっすぐ吸血鬼を灰色の目で見貫いた。

「なるほど。確かにアンタは、力で戦う相手には頑丈そーだ」まるでそれを試すように、軽く手を振って鞭のような長い水を出現させた吸血鬼は、獣を丸ごと打ち付けるように、そのまま力をぶつけたものの、

「やっぱり効かないか。さっきもそれで竜巻を消したんだね」直撃した水の鞭が悉く、力の脅威を失ったただの水と変わり、更に消えていったような状態に感心したように笑う。

「力を見て力に介入する、『心眼』と『改心』……話にだけは、聞いた事があったけどね」

元々は、男の古い仲間鍛えられた事があった吸血鬼は、その特殊能力の実物を目にし、

「ずっとオレ達の事を探ってたチビ蜥蜴も、それで造ったの？」あえて放置した相手の到来を、心から喜ぶように暗く微笑んだ。

その台詞に男は表情を歪め、吸血鬼の方を腹立たしげに見る。  
「貴様は何がしたいんだ——黒の守護者」

男とその周囲に仇なす相手に、最早全く憎悪を隠さず吸血鬼を睨む男に、吸血鬼は軽い声色で笑いかける。

「チビ蜥蜴は聞いてないかな。オレは黄の石がほしいだけだし」  
「宝珠を二つも手にしてどうする。扱い切れるわけがない」

「そうかな？　こう見えてもオレ、宝珠はあるわ、精霊は二匹いるわ、その上海竜とかもいて、結構資源豊富なんだよねー」

「!?　とさすがに目を見張る男に、ケラケラと吸血鬼は笑い、  
「と言つても、海竜は自律起動させて、精霊も一匹お供させて自由にさせてるから、今ここにはいないけどね」

それでも精霊魔法と宝珠の力は健在である相手を、男は改めて苦い顔をして見返した。

「正気の沙汰じゃないな。それだけ数多の力を、保有だけでも制御可能とするのは……それが『空』の資格者故か？」

「さあね？　万能の宝珠、黄の石の力は要は、他の五行元素や五大要素に可変の便利素材だとは聞くけどね」

聖と魔の二つの力の混在だけで、躯体に大きな負担のかかる茜色の髪の少女からは考えるべくもなく、様々な力をその身に有する人造の吸血鬼の特殊性は——力を見ることに慣れ切った男にすら、定義し難いものであるようだった。

一方で、再び対峙する事になった相手を露骨に嫌そうにする茜色の髪の少女に、白銀の髪の神父が明らかに楽しげにする。

「君はまた、性懲りも無く黄の石を取りに来たんですか？」  
「……だったら何なのよ。一々目的とか、敵に教えないし」

今回は光の羽を広げずに、白と黒の魔法杖を両方手にしている少女に、白の魔法杖が万全だった頃の前回とは明らかに不利がある事に——それを目的に杖を無効化した相手は、当然自身の有利さに気が付いているはずであり、

「何でアンタは——あたしの邪魔をするわけ？」

それなら神父とまともに対峙するより、剣か幼子を狙うのが、少女には得策であり。腹立たしげにしながらも、すぐに戦闘に入らず尋ねる少女に、神父は更に楽しげに笑った。

「一々目的を教えるわけがないと、たった今君が言いましたが」  
「のわりに、訊かれて嬉しそうじゃないの。何か言いたい事があるなら、今の内に吐き出しておけば？」

少女にとっては、仲間の戦いの方がどうなるか、赤い天使がどう出る気かなど、不確定要素が多過ぎる中で、下手に動かずまずは戦況を窺う時間が必要であり。

そのため、どうでもいいような事を尋ねるしかない少女に、しかし神父もにこにここと、特に答えを返す気配もみられず。

仕方なしに少女は——ある者の本名を口にする。

「……フラウアは。アンタは決して『魔』じゃなかったって、言ってたけど」

元は天の民であり、少女に遠い昔の禍を語った占い師の名を……同じ時を生きて知ったはずの相手を、ただ確かめるために。

神父はそこで一瞬、時間が止まったように全ての表情を消し。意外な名前が、しかも少女側から出た事に、それなりに衝撃を受けているようだった。

「……彼女に会ったんですか？ 君は」

「アンタの後ろの女と一緒に、まだ生きてるわよ。と言ってもその女みたいな若作りは一切してないけど」

少女としては、ただ占い師から聞いた事があるだけの名前で、何一つ羽の主の心や記憶が戻ったわけではないが。

それでも心なしか、これまでになく厳しい顔付きの少女に、真面目な顔のまま黙り込んだ神父の代りに、かなり後方にいる土色の髪の女が不服気に少女を見ながら声を発していた。

「呆れたわね。ということは、ミラをここに呼び戻したのは、フラウア・プフラオメだったという事かしら」

「……誰がミラよ」

女を睨む少女の目には、全くこれまでの不敵さも余裕もなく、

「アンタ——何であんな奴らとタッグ組む羽目になったわけ？」

女が吸血鬼の施した結界内にいる事は知っていたため、すぐに神父に視線を戻した少女だった。

「魔王とかそっち系、組んでて何かいー事あるわけ？」

「そうですね。確かに趣味ではありませんが、それでも俺は、魔王の力を管理する悪魔に生まれてしまったんですよ」

神父はフウト、少しだけ困ったように笑って肩を竦める。

「魔王の財たる力を管理する腹心、もしくは片割れルシフージュ……それが、悪魔である俺の真名です」

「ふーん。そう生まれたら絶対、そうしなきゃいけないわけ？」

「さあ、どうなんでしょう？ 運命に逆らう気概のある悪魔は、

何処にでもいるとは思いますが……なるべくヒトを傷付けずに生きてきたアラス君や、人間の血を持ち、最後には魔王に背を向けた四天王達のようにね」

その四天王の内、二人の情報を基に造られた人造の魔という少女に、にこりと改めて空虚に微笑む。

「でも今の君は奪う側です。それなら俺の立場も、少しは理解出来そうなものですけどね？」

「何ですよ。こう生まれたのはあたしの意志じゃないし、大体、あたしはあたしの欲しいものしか奪おうとは思わないし」

「なるほど。俺やユーオン君のように、役目で動く事は、君は確かになさそうですね」

少女の目前で神父は小さな輪を取り出すと、継ぎ目の一部を緩めて輪の内に納められた柄を引き出し、輪の直径を少し広げ。大きい腕輪くらいにした輪をまさに腕にはめ、輪をはめた方の掌底を少女に向けた。

「けれど君が、その羽に君を残したということは……奪う側に回る事を君は承知していたはずですよ、ミラ」

「……」

誰が、という反論は不服の表情でだけ表し、少女も二つの杖を構え、神父からの攻撃に備える。

神父の手の周囲には、手を取り巻くように複数もの水の矢が現れ。回転銃を撃つように少女に襲いかかった。

「……っ！」

黒の魔法杖で張った氷の防壁を、水の矢は数弾の命中だけですぐに切り崩し、次々と少女に襲いかかる。

「何コレ——あの輪があるだけでこんなに増幅されるわけ？」

仕方なしに再び白の魔法杖を使い、強い風で水を散らす少女に、神父は穏やかに笑いながら、一度追撃の手を緩めた。

「これは元々、この『地』で使うために造られた道具ですよ」

そして神父は、ああ——……と。とても愉快な事を思い出したかのように、歪んだ顔付きでそこで微笑んだ。

「君を殺したのも、そう言えばこの輪杖でしたっけ……確かに君の血まみれになったこれを、俺も覚えてますよ——」

「……！」

その台詞というより、表情のあまりの歪みに一瞬ぞくりとした少女は——ある違和感を、そこで覚えながらも。再び水の矢を繰り出す神父に応戦するため、違和感について言及する余裕が持てるはずもなく。

近場の戦闘もそうしてやはり、力勝負になっている状態に、青闇の髪の吸血鬼は残念そうに笑う。

「オレは正直、まだ翼権っち程動けないからなあ。武器勝負もしたいとこだけど、こっちの方が絶対的に速いし」

「——！」

喋りながら何一つ詠唱も無しに、手を振り下ろすだけで巨大な水の刃を叩きつける相手に、男は飛竜の羽を広げて盾にする。

同時に男からは長剣で吸血鬼に斬りかかるが、戦闘に特化し身のこなしが優れるよう造られた、男の攻撃を見切る吸血鬼は、武器もとらずにあっさり回避してまわり、

「飛竜の兄ちゃんは——何で戦うの？」

更には喋る余裕すらある相手に、右が義手であるため武器での戦闘に無理のきかない男は、苦々しげに再び間合いを取り直す。

「宝珠とか魔王とか、わざわざ関わらなくて良かっただろーに。」

「ユーオン君もただの養子でしょ？ 兄ちゃんにとってはさ」

「……！」

まだその少年と出会って一年、共に過ごした期間は実質半年程度の男に、吸血鬼は意地悪く笑って問いかける。

「それとも遠い前世でパバだったとか、兄ちゃんはその手の話、わりと重視する方？」

「関係無いな。ラピスもユーオンも俺には同じ、大切な子供だ」  
即答した男は、へえーと笑って今度は針の雨のような水の力を繰り出す相手に、凝縮された力を受け切る事は難しいとすぐに見切り、飛竜に飛び乗り空へ回避する。

「それじゃピアスちゃんは、子供とは認めないってわけかな。かわいそーに、ピアスちゃんもソールっちも」

「……！」

すぐまた地に降り立った男は、忌々しげに一度吸血鬼を睨むと、  
「あのコがユーオンの妹なら……ユーオンがそれを守りたいと言うなら、俺に異論は無い」

吸血鬼越しに赤い天使を見据えながら、はっきりと口にした。

そうした者達の姿を、身動きせず赤い天使は見つめ続け。

赤い天使が抱える剣は、改めて――

男が何故ここまで来たのか。黒髪の幼子が何故、男の潜入を仲間に告げなかったのか、それを実感として悟る。

「ふーん。それでユーオン君が敵対しても、兄ちゃんはいいの？」

「そもそも敵対にならない。ユーオンの大切な相手なら俺達に傷付ける気はない」

それなら共に連れて帰るだけだと、男は一度はやり通した事を迷いなく口にする。

魂の無い人形を制御する羽を落とされた赤い天使は、その後羽が復活しても、人形自身の心を取り戻したかのように動き。

男に決して自らついていく事はなくても、黒髪の幼子も既に心を動かされ、しかしそれに気が付いていない状態であり。

「子供まで利用するような貴様らに、何も言われる筋合はない」その心底の怒りは確かに目の敵と、全てを一人で抱え込んだ剣に……剣を止められなかった男自身に向けられており。

あまりに強いまっすぐな思いは、剣の中の拙い何かをそこでようやく、呼び覚ましていた。

ただ、帰りたいと――……誰かと同じ、それだけの願いを。

ヒドイなあと、男のまっすぐな怒りを、吸血鬼は竦めた肩であっさり受け流す。

「利用されてんのはこっただけだし？ オレを使うソールっち含めて、まるっと利用してる奴らに言っつてよね？」

「仮にも黒の守護者だろう。自分の事くらい何とかしろ」

「違いないけど。ユーオン君はいいね、守ってくれる奴がいて」と言っつてもと、再び吸血鬼はあくどい顔付きで笑い、

「それをユーオン君が受け取れてたら、今の状況は無いけどね。今後はどうかな。わざわざ好き好んで、一人でやる必要なんて何処にもないのにね？」

それはおそらく――たった一人で立ち続けるしかない孤高な守護者の本音でもあり。

過去に大切な相手を失いながら、甘さも平和さも失わずに、本来ならここまで来れていた青銀の髪の吸血鬼は……そうした危なっかしさを忌避した剣より、余程強かった存在であると、今の剣には痛い程わかる事になった。

それでも吸血鬼も、結局は剣と同じように――

一人で何かを引き受けようとして、その結果に大切なものを、また失う事になったのだと。

それが本当にそうするしかなかった事なのか……それだけは剣も、おそらく吸血鬼自身にもわからないままで。

\*

気が付けば剣は、赤い天使と共に空の中に在った。

……………？

つい先刻までは、白い天空の大地で戦う者達の情報を必死に読み取っていた剣を、赤い天使は大切に抱えて。

剣だけでなく、ほとんど誰も気付かない内に、その戦地から飛び立っていた赤い天使だった。

赤い天使が何を望んでいるか、相変わらずわからないままにされた剣は、成す術も無くそのまま運ばれるしかなく。

代りに剣に届くようになったのは――

剣の持ち主だった少年のそばで響く、拙い声だけだった。

「……………おとーさんと水華……………大丈夫かなあ、ユーオン」

何も出来ず、ただ飛び立った者達の帰りを待つしかない少女は、

「どうしたら私も……………もうユーオンに無茶させずに済むかな？」

その育ての父や、相方と呼びたかった大好きな少女のように、自身も強くなりたいのだと。

祈るような細かい声は、冷たい石の部屋の中では、それでも確かに少女自身に届くように響き……………横たわる少年を通して、剣にも尚更、帰りたいという思いを強く抱かせる。

――帰りたい。

その思いは、元々は赤い天使と――黒髪の幼子の内の誰かが、強く願ったはずの思いだった。

深い湖の底に沈められた聖地で、何一つ希望など無く、ただそこに在り続けた誰かはそれしか願う事は無かった。

そしてそれは、暗く重い海の底で、ある一つの願いを持って待ち続けた剣より辛かったはずの事で。

剣は辛うじてその願いだけを支えに、長い時を越えて地上に帰ってきていた。

……………俺は……………

何のために剣がここまで、待ち続けたのか――

その願いを手放した剣が、破綻するのは当然の帰結だった。

俺は……………を助けたんだ……………

すり替えられた心は結局、思い出せないままでも。

俺は……………こいつの事も、助けたんだ……………

やっと剣は……………剣より辛かったはずなのに、帰りたいと望む剣の願いを叶えようとする天使を、拙い心に迎え入れ……………

ある国の太陽だった天空の島に、一人の天使が降り立った時。  
ただの人間である瑠璃色の髪の少女に、どうしてその訪れが  
わかったのか——

少女を守る小さな神獣も連れず、神獣を動かす笛も持たずに、  
赤い天使を少女が一人で出迎えたのは。

まるでである運命の時を、自ら望んで現れたかのようにだった。

「……………来て、くれたんだ……………」

数日前に失われた青銀の剣を大事そうに抱え、黒く大きな鎌も  
背負った赤い天使が、島に帰って来た姿を見て。少女は心から  
安堵したように、神殿の前で立ち尽くした。

「ユーオンのこと……………助けてくれるんだね」

「……………」

無言で剣を差し出す天使から、少女も無言で剣を受け取り。

神殿の入り口に立てかけると、奥の石室で眠る少年の元には  
戻らず……………何故か黒い鎌を手にした赤い天使を、無言でじつと  
見つめながら、無表情に——祈るように両手を組んで立ち。

その光景は、剣を驚愕させるだけでなく。

神殿の内に横たわる少年にも、強められた気を通して伝わる。

「……………あなた……………」

自身を見つめる瑠璃色の髪の少女に、赤い天使は無情に——  
自らの永い役目、処刑人の鎌を、咎人である少女に突付ける。

「……………!!!!!!」

これまでより遠隔でも、精霊の躰を動かせる制御力の向上を、  
知らない内に剣は得ており。

石室の少年は、その有り得ない光景に、がばっと飛び起きた。

「……………私のこと……………連れて行って、くれるの？」

「……………」

ダメだ——と。

起き上がっただけで激しく息を切らしながら、剣が遠いため  
うまく動かない躰を引きずり、壁を伝って、銀色の髪の少年は  
必死に少女の元に向かう。

「……………ラピス……………ダメ、だ……………!!」

赤い天使は決して動かない表情——それでも青の目に確かな  
哀しみをのせて、無力な人間の少女を見つめ返し。

「……………え……………?」

「何か……言い残す事はある？」

たった一言。それだけは命に刻まれた言葉をそこで口にした。

「やめてくれ——」

どうしても間に合わない現状を、悟れてしまう少年は叫ぶ。

「やめてくれ、エル——！！！！」

失っていたはずの誰かの真名が、そこで還った理由もわからず。

赤い天使が訪れた時点で、全てを手放すと決められた少女は。

少年にそうして本当の妹を還せた事に無意識に安堵し。

「ありがと……ユーオンを、助けてくれて」

そのために赤い天使が現れた事——そして咎人の少女をも、

助けたいと願ってくれている天使に、心から微笑んだ。

「……わかってたよ」

少女が一人の時を狙い、場に現れた天使は、

「あなたなら……私を止めてくれるって」

たった一人で消える事を望んだ少女に——唯一、少年の介入を

避けられなかった事だけが、天使にも少女にも痛恨であり。

「……………！！！！」

目の前には、赤く染まった鎌を翻す残酷な処刑人と——

一瞬で絶命するよう心臓を貫かれ、倒れる少女の姿があった。

「……………」

茫然と少年は、転がる少女の横に膝をつき。

昏く赤い夢の再現が、いつか訪れると知りながら。

「何でだ……」

事を終え、少年から少女を奪う事は諦め、黒い羽で飛立つ者に、

「何でだ、エル……………！！！！」

その理由すら悟っていながら……遠ざかる天使を追う術もなく。

妹だったものを抱え、どうしようもなく——……ただ叫んだ。

……少女がほとんど痛みも感じず、そこに至った事はわかり。

それが遙か昔から、赤い天使の優しさとも少年は知っていたが。

しかし次の瞬間に起きた事は……少年の理解も納得も超えた

出来事だった。

「……………ユー、オン……………？」

「……………え？」

正座した形で少女を強く抱えたまま、動けないでいた少年に。

命の気配など欠片もない状態で、少女はしかし——

少年がようやく、神殿の入り口に辿り着いた時には。



「良かった……ユーオン、目、覚めたんだ……」

「……………」

誰一人、別れを告げるつもりはなかった少女は。

腕の中で少年を見つめながら、動くはずの無い手でそっと、少年の胸に拙く手を当て。

「ユーオンは……ずっと、ここに、いてね」

ただそれだけを伝えるために——少しだけ、命など無かったその身体から出て行くことを踏み止まっておろ。

「やっぱり……『銀色』さんも、涙はあるんだね……」

「……………」

くしゃくしゃの顔で少女を見つめる銀色の髪の少年に、ただ安堵したように笑い。

そのままフ……と。力が抜けていくまま、静かに目を閉じ。

拙く燈し続けた微笑みの灯も消して、少女は去っていった。

「……………」

少年はその脆い生き物を、ただぐつと……力の限りに抱き締め。

「ごめん……ラピス……」

少女の力になれなかった事だけを託び……しばらく座り込んだ。

やがて、俯いたままでも、少女を抱えて立ち上がると。

戻った剣をとる事すらも忘れて、これまで少年が眠っていた石の台まで少女を運び、その上に黙って少女を横たえた。

安らかさも辛さもなく、ただ無機質に目を閉じた少女の姿に。

それがあまりに寂しげに見えた少年は、黙って場を後にすると。

「……………」

聖堂のテントで、少女の相方である神獣が姿を消している事に気が付きながら。テント内に置かれていた少女の数少ない荷物……この空では使えなくなっていた、小さな巾着のついた通信道具を少年は手に取った。

「……………」

それを少女の隣に置こうと、ここまで探しに来たはずの少年は……巾着の中に小さく添えられた、誰かの心にそこで気が付き。

——ラピちゃんにいいことがありますように——

あまりに急激な激しい衝動に、少年はその場で崩れ落ちた。

「もう……イヤ、だ……！」

手の中でぐしゃりと、小さな形見が音をたてて潰れる事にも構わず。迸る感情のままたった一人で、消えない痛みを叫ぶ。

「いつも何も出来なくて、何かを失くす……！」

その呪いから決して逃げられない、奪い奪われる定めの上に、あるのが天性の死神であり。

「もう失くすのは嫌だ、でも……………」

自らを常に、曖昧にする力の元に生まれたその少年は、

「独りも……………もう嫌だ……………」

誰かの願いや喜びがなければ、生きる力を何処にも見出せず。

失う事を避けるために一人で歩く事も、今は出来なかった。

今この島に一人、取り残された少年は。そのため直視出来た己の心一つでは、何をすればいいか、どう動けばいいのかが、全くわからず……………ただ、無力に座り込むことしか出来ずに。

不意に。崩れ落ちた少年に、有り得ない誰かが声をかけた。

……………お帰りなさい……………

「……………え？」

テントを張っても充分余裕のある、広い聖堂の中央にあった小さな祭壇らしき石の台から。

—待っていたわ……………キラ……………—

確かにその、誰も知らない銀色の髪の少年を呼ぶ声に。

「……………な……………」

茫然としたまま立ち上がった少年は、拙い足取りで、祭壇の前までやって来た。

それはこの、現状把握に優れた少年を知る者だからこそ。

少年だけが見つけられるように、永く隠されていた……………少年以外には特に、意味も存在しない宝物であり。

—ユーオン君は遠くない内に、会いたいヒトに会えると思う—

何故か、ある者の声を思い出した少年は。ずっと持ち続けている大切な数種類の札の、一枚しかないものをそこで手に取り。

誰かが力を込めてくれた、大抵の物なら力ごと闇に還す力を持った札を使い……………その封印を、祭壇の外装ごと破壊していた。

その祭壇の崩壊が起動力となるように仕込まれていたのか。突然暗闇に包まれた聖堂たる石室は、立ち尽くした少年の前……………ただ一筋の光だけを、贈り込んでいた。

「……………え？」

「……………」

少年の目前には、闇に浮かぶたった一人の誰かの姿。

暗い澱みしか無い少年の青い目にも、確かな熱を与える……………

死神となる事を選んだ少年の、一番の理由がそこに在った。

「……………ウソ、だ……………」

自身が何故、切望に似た声色でそう叫いたかもわからず、

「……何で……シ、ヴァ……?」

少年はただ、闇の中の黒い鳥……黒に溶けながら、自らの光を決して失わなかった遠い日の——大切な誰かの名前を口にした。

「……久しぶりね、キラ」

その金色の長いまつすぐな髪で、赤い目の凜とした女性は、涼やかながら落ち着きも備えた声で、少年に話しかけた。

「貴方はきつと——私に気付いてくれると、信じていたわ」

ぴくりとも笑わず、真面目な顔付きが相変わらずの黒い鳥は……しかし銀色の髪の少年が出会った頃より、遥かに大人びた女性へと成長しており。

「ククルが、貴方はいつか必ず『火の鳥』に来ると言うから。

私も貴方との約束を果たすために、この祭壇を造る事にしたの」

「……え……?」

女性はそこでようやく、困ったように苦笑い。茫然とし続ける少年に構わず、自らの伝えたい事をそのまま口にする。

「ごめんなさい。この私はあくまで、いつかここに来る貴方のために残した影だから……きつとキラは驚いていると思うけど、貴方からの質問には答えられないの」

「……」

「私達のために戦ってくれた貴方を、私は地の底に置き去りにした……貴方はずつと、ただ私のために戦ってくれたのだと、ククルからもゾーアからも、あの後聞き出したわ」

赤い目を伏せて言う女性は、元は魔性に染まる紅い目を持ち。

誰より『魔』に近かった女性を、呪われし道から遠ざけるため

……女性の代りに死神となる者を、その周囲は必要とした。

そこに現れたのが銀色の髪で青い目の——天性の死神であり。

「私のために貴方を血まみれにするくらいなら……私自身が『魔』となった方が、余程良い事だった」

しかし誰より気高く優しかった女性は、もし周囲の企みを、女性が気付いていれば必ず拒否しただろうと。

女性自ら銀色の髪の少年を、利用しようとはしなかった事を……少年が誰より一番、無意識に知っていた。

だから少年も周囲も、そんな女性を守ろうとしたのだと。

「それでも……キラのおかげで私は今、こうしてここにいる」

「……」

「有難うとは言わないわ。私はそんな事——望んでいなかった」

それを口にすれば、少年の犠牲を良しとする事になると。

あくまで真面目な女性は、それは認められないと。遠い時を超えてまで——少年にその身を大切にしろと、強く訴えかける。

「でも……」

女性はそこで、まだ苦しげながらも……心から穏やかな顔で、少年に一度も見せた事のないような柔らかな微笑みを見せ。

「私……とても今、幸せなの」

それが一番、伝えたかったと……

女性の犠牲になった少年への、最大の報いをそこで口にした。

「こんな自分になるとは思ってたなかった。ククルは言うの……私とキラは、よく似ていたって」

「シヴァ……」

ふわりと微笑む女性を、少年は——切なげな青い目で見つめる。

「だからキラも、絶対幸せになれる。貴方は優しいヒトだもの」

その少年がどれだけ赤まみれであり——容赦なき殺戮者か、知っていたはずの黒い鳥は。

しかし全く迷う事なく、その言葉をはっきりと口にした。

「貴方は……幸せになっていいの、キラ」

それを決して自らに許せなかった、天性の死神に。

しかしそれをも受け入れて、女性は最後に現実を口にする。

「きつと貴方はずっと、何かを守るために……自分も敵も殺し続けて、そのまま生きていくのね」

「……………」

「それが貴方……キラを名乗るユオンの望みなら。私はせめて、貴方の力になれるように……貴方との約束の物と、ゾーアから最後に還してもらった、私の羽を残しておくわ」

苦笑いながら言った女性は——その後、段々と光が弱まり、周囲の闇へと還るように溶け込んでいき。

「私もゾーアも、そしてククルも。貴方に沢山助けられたから……少しでも、貴方の力になれたらいいんだけど」  
もう一度最後に、ふわりと笑うと。

「——シヴァ……!」

消えゆく女性を思わず掴もうとした、少年の儂い衝動も空しく。

長い時を待ち続け、ようやく役目を終えた影は……在るべき闇へ還っていたのだった。

……そして、影が消えると共に去っていった闇の後には。

「……………」

壊れた祭壇の下には、黒く鋭い光に覆われるように少年には観える……とても長い時を超えた何かが安置されていた。

「ま、さか……………」

——シヴァならちゃんと——預かってってくれるだろ——

銀色の髪の少年はそこで……………

「キラの……………」

かつて少年を赤く染めた……かけがえのない呪いを受け取る。

「キラのバンダナ——……残してて、くれたのか……」

不滅である聖地の力を利用し、長い時を超えるために小さな祭壇の中に封じられた……黒くシンプルなバンダナが、そこに横たえられていた。

かつて銀色の髪の毛の青い目の少年を守り、共に在ってくれた、銀色の髪で赤い目の少年の形見——……赤い呪いがそこにあり、

更にそのバンダナには、少年と共に在るようにと黒い鳥の羽——その羽を受けた誰かとの贈り物が、付加されていた。

「……………」

少年は黙って、そのバンダナを手にとると。

不器用な少年が着けたバンダナは、すぐにずれ落ち、少年の視界を半分隠し……赤く染め上げていき。

そして新たな力として、少年の背に黒く大きな翼を与える。

——これなら……と。

戦いに生きる銀色の髪の毛の少年は、とるべき行動をすぐに悟る。

「これで——……俺も、『地』に行ける」

既に飛び立ってしまった者達の帰りを、大切な誰かの亡骸と、ただ待つよりも……それは少年には当たり前前の事だった。

……一度だけ。少年がずっと眠っていた石室に戻ると、今は少年の代りに横たわる少女に声をかける。

「……行ってくる。ラピス……」

少年の軀を維持する力が施された石の台の影響か、少女の体はまだ温かく。しかし命は無い事を、誰よりわかっていた少年は——それでも少女の望みのために、別れは口にしなかった。

——ユーオンも大事なこと、早く思い出せるといいね——

少女の昏く赤い夢に心を奪われ、大切な誰かを失った事が、何より少年を追い詰めたと……そんな事を決して望まなかった少女が、迷いの果てに出した答えがこれだったのだと。

少女が望むなら、誰にも止められなかった現実を改めて思う。

——私のこと……連れて行って、くれるの？——

赤い天使にとっては、それは自らの終末を招く行動であり。

それでも天使は——少年の代りに少女の望みを叶えたのだと。

「全部……決着を、つけにしよう」

訪れてしまった昏く赤い夢を思いながら、無意識に少年は呟き……その運命の地へと、黒い翼で飛び立ったのだと。

\*

少年が『火の島』を飛び立つ少し前に。

赤い天使が剣を持って『地』から離れる直前……剣に届いていた情報は、紛れもない『火の島』側の者達の苦戦だった。

灰色の目の男の飛竜は元々、『火』を主たる属性とするため、『水』の吸血鬼と相性が悪い事はわかりきっていたが。

全く……と。

『金』の札による白の魔法杖の補強を使い切り、それでも、魔たる躯体への負荷も省みずに、聖なる羽を酷使して力を使う無謀な少女に。神父は心から歪んだ微笑みを見せた。

「俺も君のように、羽が使えればいいのに……どうしてか俺は、自分の羽が上手く使えないんですよ、ミラ」

「……は？」

誰がミラだと、苦しげながら不服な顔の少女に、

「それならどうして俺はここにいるのか……何故君達と戦っているのか。魔王の片割れ？ でも魔王はもういないのに、俺は何をすればいいんですか？」

「ちよつと……アンタ？」

ク——……と。自身の軀を折り曲げるように抱えながら、彼は無理やり、その羽を広げようとしているようだった。

「魔王の力は息子が運べる。俺はもう用済みなんです。なのに今度は黄の宝珠を取り返せ？ そのため妹をもう一度殺せと？」  
そこで神父が血反吐を吐くと同時に、背からも血飛沫が上がる。

そして彼は……軀は折り曲げたまま、顔だけを上げると、

「ああそうだ……俺もそう言えば……宝珠がほしかったんです」  
「——!？」

少女が思わず目を疑う程、清らかな笑顔で少女に笑いかけた。  
「宝珠があれば……君を本当に、甦らせる事が出来る……君の羽はここにあるから……後は——相応しい躯体を造るだけです」

「……つて、アンタ……」

ここにいる少女はあくまで偽物とばかりに、虚ろに微笑むその白銀の髪の人に。男の力にその都度応じる戦法をとった少女は意識は集中したまま、男をまつすぐ見返していた。

「それがアンタを縛り付ける……あのガキとの契約？」  
悪魔の望みを把握し、叶わない望みを盾に取り。悪魔がそれを望む間は悪魔の魂を差出させる呪い……人間と悪魔の逆転した契約の秘儀を、そこで悟るように。

「あたしはミラじゃない……そんな奴はとっくに死んでる。この先も帰ってくる事なんてないのに……アンタはいつまで、過去に縛られたままにいるの？」

「……」

「そんなんで魂売るなんて、ふざけんじゃないって。アンタの妹なら——そう言うんじゃないの？」

一転して無表情となり、黙り込んだ男に、少女はその真実——絶え間ない違和感を口にした。

「アンタ……自分が何してるか、本当にわかってる？」

「……」

「宝珠も妹も、手に入らないってわかってるでしょ？ なのに  
アンタは何でこんな……あたし達を邪魔するだけなんて、  
無駄足を踏み続けるわけ？」

その男には望みなどない——自称通りの人形であると。

それなのにここに在り続ける男に、少女はただ問いかける。

男はしばらく、無表情のまま黙り込んだ後に。

「……………そうですね……………」

再びこれまでのような、虚ろな表情で微笑みを浮かべ、

「俺は……俺を閉じ込めた天に、復讐したいのかもしれない  
これまで通りの空っぽな答えを口にする男に。

最早この誰かを呼び戻す事は出来ない、少女は悟っていた。

「——！！！」

男からまたも向けられた水の無数の矢を、少女は風でひたすら  
散らす。

「もう……防戦一方なんて、本気で性に合わない！」

杖でなく、羽から直接力を制御する度、少女の躯体は悲鳴を  
あげ。羽でなく、魔たる躯体が持っている力は、『水』と『火』、

そして『氷』と、男が主に使う『水』と相性が良いとは言えず。

個々の要素の力は躯体が持った力程ではないが、五大要素の  
全ての制御を可能とする羽を、結局は使うしかなかった。

「あたしもレイアスも正味、メインは『火』だし——まったく、  
『水』ばかり揃えてんじゃないわよ、本当！」

男が魔の力を使い尽くするのが先か、少女の躯体にガタがきて  
無力化するのが先か。それは男が完全な『魔』ならば、勝負は  
少女のものだったのだが、

「中途半端に『聖』に戻ってんじゃないっつーの！ 戻るなら  
しつかり戻る、戻れないなら『魔』に徹しなさいよ！」

ここに至り、聖の気をも味方にし始めた男に……少女が完全に  
劣勢を感じ始めたところで、光景は閉ざされていた。

それだけわかっていながらも少女は、撤退の気配を見せず。

人形使用のためでも剣のためでもなく、勝負を捨てられなく  
なっている衝動が、結局は羽の侵蝕を表しており。

「……………水華はもう、限界だ……………」

『地』が近付き、少女達の予想以上の苦戦——最早ほとんど  
動かない躯体で座り込みながら、力だけを使う少女と、少女に  
止めを刺さんとする神父の力と。

それに気付きながら、飛竜を駆る男は自身の相手で精一杯と、  
辿り着く前から銀色の髪の少年は現状を把握する。

「アイツなら……俺が殺してもいいな、水華——」

今まさに、少女の命を奪う規模の力を繰り出さんとした男の  
元へ。少年は白い光を纏わせた剣と共に、空から襲いかかった。

力の余裕が無い事からも、なるべく初撃で決着をつける事を、常に目論む天性の死神は——驚く少女や周囲には全く構わず、重力をも味方に、男を容赦なく袈裟斬りにし。

「君は——……誰、でした？」

飛び込んできた銀色の髪の少年に、斬られた自身などまるで気付いてないような穏やかさで、倒れた神父は少年を見上げた。

「どうしてでしょうか……俺は、君には、何処かで——……会った気がします」

「……………」

傍目には少年は——銀色の髪で赤い目の、黒いバンダナの姿に映っている事を、神父の痛みを通して少年は自覚する。

「へえ……アイツ、復活したんだねえ？」

飛竜と灰色の目の男の二重攻撃に、楽しみつつ牽制されている青闇の吸血鬼は、やはりあくどい顔付きで微笑み、

「でもどうやって——どうしてここまで来たんだろ？」

何故かその姿に見覚えがあると、そこで笑う吸血鬼は。完全に男の養子でありながら、赤い目に染められ、謎の黒い翼を持つ少年の姿に戸惑う男を、嘲るような声色で口にした。

「……ちよっと。ソイツ、あたしの獲物なんだけど」

命の危機を迎えた瞬間など無かった事のように、それでもまだ立ち上がれない茜色の髪の少女が、不服気に闖入者を睨む。

「ところで何で……アンタはここに来たのよ？」

黙ってバンダナを外し、黒い翼と赤い呪いを失った銀色の髪の少年の姿を確かに認め、少女は真剣にそれを尋ねる。

「妹を守るためなら……アンタはあたし達の敵になるけど」

少し前に戻っていた、赤い天使を視界の端に入れて睨みながら。剣を捨て、自らをも捨てたはずの少年が帰って来た理由を——決してごまかさずに尋ねた少女に。

「……………ラピスが殺された、水華」

「——へ？」

少年はあまりにあっさり、彼らの知る誰かの終わりを告げた。

「レイアスも聞こえてるだろ。ピアスがラピスを殺して、俺に剣を返していった……だから俺は——……ピアスを殺す」

いつかそうしなければいけない時が来る事を知っていた少年は——迷いなき青い目で場に佇む。

「俺の妹は……エルフィの魂は、そこにはいない」

赤い鎧の天使を冷徹に、殺す方法だけを考えて観つめながら。

それはそれは……と。

誰もが言葉を失い、時を止めてしまったような中で。少年の足下で横たわる神父が、何故か痛ましげに少年を見上げる。

「君はまた……君の妹を、失ったんですね」



「……ああ。アンタと同じだ……誰かに奪われた」

「……？」

自ら妹を手にかけたと、長く信じているその兄に、少年はただ真実を告げる。

「アンタは裏切者じゃない。アンタが死んだのは……アンタの妹をかばったからだ」

「……？」

この天空の島にかつて、多くの悪魔が呼び込まれた時に。

悪魔と戦い命を落とした少女は、その直前に……牢獄を出た兄と再会を果たしていた事を、古い夢で知っていた少年は。

「アンタはそれを——自分が殺したと思いつまされてるだけだ」

「……？」

ただ空虚な蒼い目で少年を見上げる姿には、最早全く、生気は残されておらず。

「アンタの魂はとつくに死んでる。その身体の主が、アンタを真似して、自分をアンタと思いつんで動いてるだけだ」

卑劣な畏によって、妹の命が失われる直前に妹をかばい。

自身の死には気付かないまま……妹の胸が自らの武器の力で貫かれる瞬間だけを目にして、絶命した兄は。

「何を……い、つて……」

その苦しみから長く『魔』に囚われ、今も解放されないまま、ただ力だけを利用されていたと——

「……」

それをとつくに知っていた者。彼を人形とするしかないながら、兄として求めた使い手は。

「……やつと……届いたんだ……」

その真実を初めて、目覚める事の無い魂に、命に直接伝わる白い光と共に伝えた銀色の髪の少年と……少年の足下で息を絶つていく、長き囚人を無機質に見つめ、

「……ルシウの羽が……消えちゃうね」

それでも——と。声色にはいつかのように、痛ましさを乗った黒髪の幼子は、ぬいぐるみをぎゅつと抱きしめて言った。

「やつとルシウは……戻れるのかな」

その安堵の声と対照的に、黒髪の幼子の背後にいた土色の髪の女は不快そうに顔を歪め、

「思いつまされてるなんて……言いがかりだわ」

自らこそが裏切者である事を、夢にも思わないその女は、

「Jがずつと、それを気に病んでいるから……Jは悪くないと、私は信じ続けてきたのに……」

それこそが——その頑強な意思こそ、自身はそこまで庇われる事をした者なのだと、囚人を追い詰めた事にも気付かず。

「……悪くないとか以前に、やってないって、教えてやれよ」

囚人を自らの手中に置くため、決してその救いを与えなかった……無意識に囚人の支配を望む、意識上は曇りなき善意の女に。

銀色の髪の少年はそれだけ——侮蔑するように口にした。

「あの裏切り者の女が、あんたの獲物だろ——水華」

「……………」

その最後の瞬間に——女の罨に気付いた羽の主の、ただ強く呪いのような断末魔が、昏く赤い夢の一つだった。

—あいつだけは——絶対に殺す—

女から羽の主の兄に渡してほしいと、小さい形の兄の武器を、ペンダント仕様にされた物を渡された妹は。それこそが、兄の目の前で、そのペンダントを着けた妹を貫くための罨であり。初めからその妹の死により、兄を追い詰め……苦しめ抜いて『魔』と随とす目的だったと、最後に妹は気が付いていた。そのような罨を仕掛けた者がおそらく当時、兄の他の汚名に関わったはずと……一瞬でそれらを悟りながら、何も出来ずに消えていく事を……それを許せなかった無念の死者であり。

そうした天の民の事情には、これ以上自身は興味はないと。女や神父の事は、もうどうなろうと良いと目もくれずに。

少年は改めて——少年がここに来た運命の決着へ、その目の向く方向を変えた。

「こっちへ来い——……エル」

「……………」

バンダナを外し、青い目へ戻った銀色の髪の少年の視線の先で。黒髪の幼子と、その前に立った赤い鎧の人形は、ただ無表情に少年を見つめ返す。

少年は赤い天使の次に、黒髪の幼子をまっすぐに見つめ、

「その子の躰はあんたのものじゃない。そこから出て行け——ソイツはまだ、目を覚ませるはずだ」

「……………何で？ ユオン……兄さん」

厳しい表情で容赦なく現状を告げる少年に、幼子はようやく、不服気に言葉を返した。

「兄さんだってぼくと同じ、ヒトの躰を使っているくせに……ぼくがここにいなければ、『ピアス』も動かないよ。兄さんはまた——……『ピアス』を死なせるの？」

既に死した命の魂を、生きた人間——同調出来る者の傍に置く事で止まった時を動かし、自我らしきものを得た誰かにしかし、「あんたはエルでもピアスでもない……俺は、あんたのことは知らない。あんたはただ、俺の妹のことをよく知っている……そっくりだけど、違う誰かだ」

その在り方は最早、転生ですらない新生であると。

以前の自身の記録を読んでいたがため、限りなく近い存在となりながらも……新しい生を受けた誰かに冷たくそう告げた。

「……………」

幼子の願いは確かに——その兄を取り戻す事でありながらも。

似た相手であれば誰でも良かった……ただ、自らの居場所を求めただけの幼子は、その言葉が真実であるとそこで悟る。

「そっか。君は……ぼくの兄さんにはなってくれないんだ」

「……………」

「ぼくから兄さん達も取り上げる気なんだ。それなら君は……ぼくと『ピアス』の敵だよ」

幼子がゆっくりと手を上げると、赤い鎧の人形も合わせて、その顔を上げて青い目で少年を見つめ、

「ぼくはこのまま——ルシウやシアの助けになりたい。邪魔をするなら……兄さんだつて容赦しない」

この所、幼子の指示を聞かなかった不調が全く嘘のように、赤い鎧の人形は大きな鎌を手に空に飛び上がった。

「——！」

少年だけを標的とした、躲しようのない速さの処刑人の鎌が、少年の首を落とさんと襲いかかる。

どんな攻撃も力も通じず、全ての化け物の死神たり得るその人形に——……それでも、

「……そっか、エル……」

青い目で黒い羽の人形の隙を、確かに少年は観通した目で、

「こいつは——……エルを縛る敵だ——」

彼らの間合いがそこまで詰まる事を待っていた天性の死神は。

『力』であればどのような相手にも通じる、自らの切り札たる白い光を最大限に纏わせた剣を、確実に外さないために。

目前に迫った赤い鎧に、ただそれだけを観つめ——

何故か大きく攻撃を外した相手を、渾身の力で斬り上げた。

「——へ？」

「——！！！」

傍らで未だに拮抗状態にあった者達にも、その結末の光景はしつかりと届き。不思議そうな顔をする吸血鬼と、緊迫の顔を崩さない灰色の目の男の前で、それは終わりの時を迎えた。

「え……？」

どんな力にも通じるといふ白い光を纏う剣を受けた赤い鎧は、黒い光を放ちながら粉々に砕け散り、

「何で……『ピアス』……？」

黒髪の幼子は我を忘れ、崩壊した赤い鎧と舞い上がった人形を見つめ……自身に起きた異変にも、否応なく気付く事となる。

「あ——……」

ずっと抱えていた、黒い両目の灰色の猫のぬいぐるみを……黒髪の幼子は不意に取落とす。全身からそうして抜ける力に、顔に一瞬だけ恐れを浮かべると。

「兄……さん——……」

少年への攻撃をあえて外し、自ら白の剣光を受けた人形が、地に叩き付けられると同時に……幼子もそこに倒れ込んでいた。

その人形と幼子が確かに——同じ存在だった事を示すように。

……へー、と。

一瞬の決着に誰もがまた黙り込んだ中で、至って気楽な声が場に響き。

「人形使い、敗れるか……人形の方から自滅されちゃ、確かに世話は無いよね」

「——貴様」

嘲りの顔で変わらず微笑む相手を、灰色の目の男は睨むが、

「おかげでオレも解放されたかな。と言っても殺されたオレはもう戻らなさそうだけど」

「……………」

青闇の吸血鬼がそのような顔になったのは、確かに少年に一度、その身を貫かれた後だと男もわかってはいた。

「ま——こーいのは、ケンカ両成敗で後腐れなし？」

ふっと後退した吸血鬼は、ちらりと倒れた幼子を見やり、

「アイツ、早いところ助けてやりなよ。放っておけば桔梗——

本来の躰の主が目を覚ますし。それよりもあの躰、パルシイ君のにしてあげる方が、みんな喜ぶだろ？」

「——何？」

それだけ言い残すと、吸血鬼は地に横たわる神父だけを抱えて。

土色の髪の女と、女に付き従う吸血姫を連れ、

「オレはその内——……黄の宝珠は、必ず頂くよ」

人形使いから解放されても、その目的は変わらないと。

歪んだ顔付きだけを見せる吸血鬼は、場を後にした。

「って——待ちなさい、あんた！」

「……………」

同じように去っていく土色の髪の女は、茜色の髪の少女を一度だけ振り返ったものの。つまらなさそうに一瞥しただけで何を応える事もなく。

「……レイアスは早く、まずそいつを連れていけ」

「……………」

仕事だると、銀色の髪の少年に偉そうに促され、灰色の目の男も厳しい表情で、迅速な処置が必要な黒髪の幼子を抱えると、

「後でゆっくり——話は聞かせてもらおうぞ、ユーオン」

ばさりと、飛竜の羽だけを背に、その島を飛び立っていた。

そうして場から——全ての脅威は姿を消したはずだった。

「くっそ……あの女、ヒトが少し大人しくしたら、調子に乗りくさって！」

「……………」

しかし彼らの運命の真の決着がそこで待ち受けているとは。目を覚ました赤い夢に昏い現実を突き付けられると、誰も予想出来ず。

「ミズカ——気を付けろ!!!」

「——へ？」

神父と人形、二者を相手に既に力をほぼ使い切り、金色の髪へ戻っていた少年が警告を発した中で。

……その相手は確かに、長い暗闇から目を醒まし——……昏く赤い夢を携えた死の人形が、少女の背後に立っていた。

「——って!？」

敵を追わんと必死に立ち上がった茜色の髪の少女に、確かに黒い鎌を突付けた人形は……これまでは見せなかったような、柔らかい微笑みをその顔に浮かべた。

「……何……あなた、誰？」

本来、表情も自由自在で、声色すらも宿った誰かを反映出来る高度な依童の人形は、

「……そんなの……わかってる、くせに……」

ふわりと微笑みながら、少年も少女もよく知った声で、人間の言葉を口にし。

そうした顔をするのは、確実にこれまで人形を動かしていた誰かではないと……新たな憑依者を悟った茜色の髪の少女は、酷く顔を歪めた。

「……バカな奴。まっすぐ成仏すればいいのに」

ぎり、と歯を食い縛る茜色の髪の少女は……去っていく敵達を、最早追おうとはせず、

「何のつもりよ? ……ばかラピ」

確実に自身の命を奪える態勢で、少女に刃を向ける人形に。

身動きをとる事も諦めたように、ただ立ち尽くし……相手の正体を苦々しげに口にした。

「ラ……ピ、ス……」

突然の大き過ぎる衝撃に、膝をついて崩れ落ちた少年は。

その人形を動かす誰かの名を……どうしてそれがそこにおいて、人形を動かせるかをただ悟り。人形について先刻に命を奪われ、そのため人形の内へと遷った命の主の名前を口にする。

人形は、くすりと——

自身の名前を当てた二人に、心から嬉しそうに笑いかける。

「……それも正解なんだけど」

既に躯体の大半を破損し、折れ曲がっている腕で鎌を持ち、それでも確実な殺意と共に、人形は茜色の髪の少女を見つめる。

「私は白夜——……ラピスをずっと、守ってきた神様なんだ。

貴女のお母さんが、ラピスから全てを奪ったその時からね」

「……はい？」

「ねえ、水華……水華なら、ラピスを助けてくれるよね？」

確かに瑠璃色の髪の少女の声色と気配で、しかしその人形は、

「ラピスを助けるために……水華を全部、私にちょうだい？」

瑠璃色の髪の少女が抑え続けた——口にする事は有り得ない、最も深い闇を口にした。

助けは来ないよと、消耗し切った少年と少女に人形は告げる。

「二人がここにいる事……みんな、私の『力』で忘れてるから」

「……………」

両膝をついたまま、身動きがとれない金色の髪の少年は。

ひたすら茫然とした顔と、驚愕に襲われる脳裏によぎるのは

……剣として彷徨っていた先日、出会った悪魔の軽い声だった。

いいか？ と。その黒い少女の躰を使う悪魔は、軽い口調で

至って真面目に、青白く仄光る剣にそれを告げた。

「神様って奴とは、間違っても殺し合うなよ？」

それは何故なら…………『神』には誰も勝てないからであり。

「神の命を奪った奴は、その命に侵されて神に書換えられるか、死んだ神体に命を追いやられる。神に命を奪われた奴も、体も命も神のものになる…………オレが今、ここに囚われてるように——黒い少女——旧き『悪神』を宿すという黒い鳥に、その悪魔はいつかに命を奪われ、そのまま取り込まれたと言い、

「オレは幸い、オレを殺した神とは同じくらい強かったから、消えずに済んだけど。神に体を奪われた奴、もしくは神に命を取り込まれた奴は…………遅かれ早かれ、喰われて消え去るぜ——

そうして命の遣り取りが行われる度に、『神』は相手を丸ごと奪い隠すのだと…………魅入られた程度で済んでいる剣に、悪魔は親身にそれを伝えたのだった。

私はね——と。人形は誰かと同じ明るい声と笑顔で、殺伐とした事を遠慮なく口にする。

「水華の躰と命がほしいの…………私の身体は欠陥品だから」

「…………はい？」

「ホント是水華のお母さんでも良かったんだけど。それより、水華とずっと一緒の方が、ラピスもきつと幸せだもの」

「——？」

立ち上がれないままの少年とは対照的に、あくまで強気さを失わない目で、少女はまっすぐ人形を見返す。

しかしそんな少女をも嘲笑うように。自身の絶対的な有利を知っているその『神』は——

「ラピスはね…………もうとつくの昔に、死んでるんだよね？」

水華のお母さんと出会ったせいだね」

その人形に宿る少女の終末は、今に始まった事ではないと。確かにそれを引き延ばしてきた『神』は、誇らしげに微笑む。

「ユーオンは…………キラ君は知ってたでしょ？」

「……………」

「ラピスは…………シルファは、シルファのお母さんに殺されて。それでも水華のお母さん——悪魔と契約する事で、悪魔の命を分けてもらって…………生きてるふりをしてきたんだって」

……少年を長く侵し続けてきた、昏く赤い夢は。

—あなたのせいよ……—

ある悪魔の女性と関わった幼い少女が、実の父を失った後……  
狂気に支配された実の母の手で、未来を閉ざされた光景であり。

「水華のお母さんは元々、私を退治するように言われて、私が封じられていた場所……シルファの故郷に来ただけけど」

当時は強い炎の獣の内にいた『神』は、遙かな昔に封じられた身の上だったが。その封印がやがて限界を迎えると知っていた、元々封印を施した者は……強い『水』の力を持つ悪魔の女性に、再度の封印を依頼していた。

「でも水華のお母さんは私入りの獣を退治する時、シルファやそのお父さんを巻き込んでしまった。だから私を、封印でなく殺すことになって……水華のお母さんに命を奪われて、そこに遷った私は、お母さんの躰をもらおうと思ったんだけどね」

炎の獣を殺した悪魔の女性の命に侵入した『神』は。そのまま具合良く、悪魔の女性の命を消化する——『神』である自らの情報に書き換えようとしていたのだが。

たった一つの誤算が、『神』と悪魔の女性の両方を襲う。

「水華のお母さん、本当変なヒトだよな？　ほとんど初対面の人間の女の子が、自分と関わったことで、その子のお母さんに殺されたからって……まさか、残り少ない自分の命をその子にあげてまで、助けるとは思わなかったよ？」

「……………」

長い時を生きた悪魔——吸血鬼であるその女性は。

既にヒトの血を摂る事を止めて久しく。四天王であった事の消耗からも、悪魔としては残り少ない寿命を元々自覚していた。

それでも悪魔としての特性を生かし、人間である幼い少女の死んだ体を、己の命を分けて女性は生かす事を選び。

「それで水華のお母さんと、シルファが繋がったから。私は、居心地の悪い場所は捨てて……ずっとシルファと一緒にいたの」

悪魔の女性の書き換えが、思ったより難航していた『神』は、分けられる女性の命と共に人間の少女へ移り……命の繋がりが直接でないため書き換え出来ない少女に迫り出されないよう、『神』としての力——『意味』を駆使する事となった。

「炎の獣なんて、てんでナンセンスな所に封じられていたけど。

私は白夜……『忘却』を司る白い川の神」

「……『忘却』？」

にこにことあつさり、己の正体を告げる人形を、少女と少年は揃って凝視する。

「夜にヒトの夢を視て、忘れたい事は真っ白にしてあげる……全て水に流してあげるのが私。だから水華と私は……キラ君と私も、とても相性がいいもの同士なんだよ」

『水』を確かに主な力のひとつ、名に冠して受け継いだ少女と——水脈を司る化け物の血を持つ少年に、それは白く微笑んだ。

「ラピスはしばらく、自分が本当は死んでるって事、ちゃんと覚えていたんだけど……」

「……あなた、まさか」

「大変だったよ？ 水華のお母さんが仇だつて覚えてるままで

……お母さんの命をもらつてる事だけ、忘れてもらうのは」  
茜色の髪の少女はそこで、心から不快な相手を見るような目で、人形を睨みつける。

「誰も……自分がここにいちやいけいないなんて、ずっと思つて生きていられないよね？」

「……………」

——ユーオンは私より、軽症だと思つよ——

その少女が誰より自身を、誰かの命を食らう記憶も無いまま……呪われた者と何処かで感じていた事を、少年は知っていた。

——誰かに無理をさせるなら、私はいなくならないと——  
その願いを持ちながら、悪魔の助けを拒否出来ず。生の執着と死の現実の間で迷い続けた少女は、『忘却』に抗い切れず。

——それが辛い事でも……ずっと逃げる事が私はしんどい——  
だからこそ、赤い鎧の人形が全てを終わらせてくれた時……  
少女は心から微笑んだのだと、少年は知っていた。

「この——……外道」

そうした瑠璃色の髪の少女の心も夢も、全く知るはずのない茜色の髪の少女も、

——大切な事を忘れてること……覚えてたはずなのに……——  
常に物事の核心を探すこと。それを信条とした誰かを、誰より知っていたからこそ、その信条ごと長い時間をかけて喰らつた『忘却』を、ただ強く睨みつける。

「どうして？ 望んだのは私じゃなくて、ラピスだよ？」

くすくすと『忘却』は、『忘却』からの現実をそこで伝える。

「ラピスはもう、私を拒否出来なかつたんだよ？ だつて……

ユーオンも水華も、ラピスが一緒にいられそうなヒトはみんな、もうすぐいなくなるんだから」

「……………」

「……」

何事も直視せんとした少女の弱点は、まさにそこだと。都合の悪い事を無視できない少女を、『忘却』は憐れむように笑う。

「——知ってるよ？ 二人がもう……長くない状態だつてこと」

長い時を超え、少ない力を命としてやり繰りする旧い剣と。一度死を迎えた羽の残滓を、支えとする人形に笑いかける。

「だから、ユーオンが水華のお母さんを殺して、その命を全部ラピスのものにしてくれるか。水華がラピスに、躰をくれるか……そうしてくれたら、ラピスだけでも助かるんだけど？」



既に眠りについた悪魔の女性には、心臓を貫かれて壊れ切った瑠璃色の髪の少女の身体を、再び助けられる命は残っておらず。

それでも、少女の魂に火を燈している命も女性のものであり。

少女がそれを女性に返す可能性を『忘却』は長く危惧しており……最近は特に、女性の弱りが顕著だったため、宝珠の事変に關係なく少年に介入を始めた『忘却』だった。

—あいつを殺さないと——……ラピスが、いなくなる—

銀色の髪の少年はここまで——

瑠璃色の髪の少女をより長く生かすためには、それが必要と知りながら手を下す事が出来ず。

—ごめん、ラピス……俺には、無理だったみたいだ—

迷い続けた少女がもしも生を望むなら、命を返せないように女性の体を消す事を、自らの役目と見なしていた少年は。

少女の迷いも続いたままの状態で、破綻を迎える事になった。

それでもこの空に戻って来た少年は、それは譲る事が出来ず。

「……オレには出来ない。オレは……あのヒトの事は殺せない」  
かつて、銀色の髪の少年を守るために命を落とした者と、ほぼ同じ存在と金色の髪の少年は知らなくとも——少年のそうした私情で殺す事も出来なかった。

苦顔そのものの少年とは対照的に、少女は淡々とした様子で、

「……あたしの躰をあいつにあげるって、どーいう事よ？」

自らに突き付けられた黒い刃を下目に見ながら、不思議そうに呟いていた。

「うん。このまま私に殺されてくれるか、もしくはね……一番いいのは、水華が私を殺してくれること」

すぐに茜色の髪の少女を斬らなかつた人形は、理由についてもあつさりと明かす。

「水華の躰をあまり傷付けると、私も後で復元に苦労するし。でも水華からは、この人形に止めをさしてくれるだけでいいの……それで私の命はラピスごと、水華に奪われる事になるから」

「……………」

少女は首を傾げつつ、ある疑問をそこで口にする。

「それってさ。ラピスを成仏させてやる事は出来ないわけ？」

「それはラピスの自由かな？ ラピスと私は共存してきたし、ラピスには私が必要な理由があるから……この後もラピスは、行き場がなくなるまでは私と一緒にいるんじゃない？」

「……………」

そこで黙り込んだ茜色の髪の少女に。

その少女が決してそんな提案を受け入れるわけがないと——もう一つの赤く昏い夢を、ずっと観てきた少年は……しかし。何故か不意に、唐突な悪寒に襲われていた。

——あいつだけは——絶対に殺す——

それが根本。そのためだけに誰かはここまで来た。

自らの羽を後の世に残し、誰かを操り人形としてまでも……

裏切り者に復讐する事だけを、羽の主は目的としたはずであり。

——……ふうん……わたしにそれをさせるの——……ミラ？——

人形である少女は、その羽の意志に抗う事は出来ない。

羽は一度死しているため、時の止まった心が変わる事はない。

だから何より優先されるのは……羽の主の復讐心のはずで。

全く動じた様子のない茜色の髪の少女に、人形はふつと——

紛れもない瑠璃色の髪の少女の声と気配で。

涙まで流す機能のついた人形の頬を、泣き笑いの雫が伝った。

「私と一緒に死んでって言ったら……二人は、うんって言うてくれる……？」

「……………」

「——ラピス……？」

それは紛れもなく……瑠璃色の髪の少女自身の思いだと——現状把握に長けた少年も、敏感な茜色の髪の少女も同時に悟る。

「何でかな……何でみんな、優しい人達ばかりなのかな………」

くすくすくすと、ふらふら下を向きながら。人形は自分自身を空いた手で抱きかかえる。

「みんなが優しいから……死にたくなるじゃない、私……」

あなたのせいだと——自らの母にその胸を貫かれ、幼い命を

失っていた幸薄い少女は。

しかしその後、悪魔に継いでまで得た生の中では。優しい

養父母、優しい友達……幸薄い少女の常識では考えられない、

温かな世界に投げ出され。

それが優しく温かい程に、現実の冷たさに苛まれていく。

「私、水華のお母さんの命を食べて生きてるんだよ。そんなの知らないって、あの時は本当に、そう思ってたのに……」

少年はその彼女の——差迫り過ぎた痛みを直視できずに俯く。

「結局、こんな年になるまでならなら生きてきちゃったよ……」

そんなの知らないって……今だって思ってるのに……」

今この意識を保っているのも、結局はその悪魔のおかげだと、誰より彼女はよくわかっていた。

彼女の慟哭を、茜色の髪の少女はまっすぐ受け止める。

「何バカ言ってるの。言ったでしょ。あたしはアレ、親だとは思わないし。あんたの中の命は、アレが勝手に差し出したならあんたが自由に使えばいい」

「——ミズカ……」

あくまで冷静な少女を、戸惑いの目で見る少年を横に、彼女も現実の嘆きを続ける。

「……使ってるよ。もうとつくに、どんどん使ってきちゃった……どんな事言っても私、結局、いらんないなんて大嘘なんだ」  
「それで何が悪いの？ 生き物なんだからそれが当然でしょ。  
否定してるのはあんただけよ」

「……………」

彼女はゆらりと、一度だけ初めて、少女をまっすぐに見た。

「ずるいよ水華……何でそんなに今、優しくするの……？」  
「……………」

「否定しなきゃ駄目なんだって……本当は知ってるくせに……。  
私が負けてしまっっちゃ駄目だって、わかってるくせに……」

自らの内の『忘却』と、長く闘い続けた彼女の——確かな強い怒りがそこにあった。

「水華は強いから……私が何言っても、傷ついたりしないから」  
気を使い、優しい言葉など返さない相手だからこそ、それを言えた彼女は。それこそが甘えさせてもらったことだと、唯一寄りかかれた相手に、ここで誤魔化される事を拒否した。

「私は——今度は水華を殺さないで、ここにいられなくなった」  
「……………」

「それでも水華は……私が負けていいなんて言うの？」  
真剣に、おそらくそれが最も本来の彼女らしい厳しい声色で。  
全身全霊をかけて、それを問うた彼女に対して、

「あんたはあんたの好きにすれば？ あたしはあたしの好きにするだけよ」

あくまであっさり答える少女は、最早……今の状態の彼女と、問答を続ける気はないようだった。

あはは——……と。

彼女はその後に……負けたくないよと、俯いて呟き。

「やだ……でも、独りつきりで死んじゃうのはやだ……！」  
再び肩を抱き、今度は笑わず、怯えだけの表情を見せ。

……それは本当に、彼女が初めて見せた最も深い弱音だった。

「私、どうしたって誰の所にもいけないよ……！ お母さんは私が嫌いだった……お父さんは私のせいで死んじゃった……！  
ここにいても、私がホントは死んでるってわかったら、今までみたいにくーちゃん達も笑って一緒にいてくれない……！」

そのためだけに、温かな周囲に本当の意味で心を開くことが出来なかった彼女は、

「それならずと、誰も気付かないでいてもらうしかない……  
もう誰にも会えないし、何処にもいく所がないよ、水華……！」  
「……………ラピ」

静かな紅い瞳で見つめる少女を見ることも出来ずに、泣き叫ぶ人形が膝を折った。

「イヤだ、そんなのはやだ！ 忘れていいから！！ 私なんか消していいから！ 私は……こんなこと思う私は嫌なの……！」

ここにいなかったはずの誰かの望みは、ただ——  
最初からそこにはいない、在るべき状態に戻る事で。

「誰にも知られずに、消える事が出来れば、それで………私は良かったの………」

そのため『忘却』の神を必要とし、抗えなくなった彼女だった。

「……………」

彼女には少なくとも一人、彼女の存在を脅かす者がいて——  
その迷いをもっとも断ちたいのなら………彼女がそれを望むのなら。

その時少年は、彼女を殺さなければいけないと知っていた。  
——ラピスの敵は………多分ラピスなんだ——

それは結局——どちらを選ぼうと辛い道だと、少年はただ、  
目を伏せる事しか出来ず。

このまま銀色の髪の毛の吸血鬼から受けた命を最後まで食わせ、  
最悪ロボロボの人形の軀体でも彼女を生かすか。

もしくは少年が『神』に侵されたとしても、人形を破壊し、  
神との縁を断ち切れない彼女を解放出来るかどうか。

彼女も少年も苦痛に生きるか、共に滅ぶかの選択に——  
未だ迷い続ける彼女を感じ、少年は動けず俯き続ける。

——出来る事があるなら………オレはラピスの力になりたい——  
それこそが、彼女を最も追い詰めた心だった。

——一緒に死んでって言ったなら………うんって言うてくれる？——  
少なくとも一人は、それを領いてくれてしまうと——独りで  
消え切れず、人形を止める事が出来ない彼女の迷いの因だった。

あのね——と。

不意に………誰の声かわからない程の、穏やかな声色で。

茜色の髪の毛の少女は、両膝を折って座り込んでいる人形に……  
何故か突然、平和に笑いかけていた。

「あのね、ラピ。あたし——あなたの事、嫌いじゃなかったよ」  
「……………」

人形はそんな顔をする相手の意図がわからず、ただ見上げる。  
「あなたは何か、いつも切羽詰ってて、でもそれでヒトに迷惑  
かけないようになんて妙に必死で。バカだなあ——って、見てて  
楽しかったけど………それももう、年貢の納め時かしらね？」

「……………水華？」

常に不敵で我が侷で、そして理性的だった茜色の髪の毛の少女は。

「あたしと違って………あなたは本当、真面目に悩んでたよね」  
おそらくそこで初めて——呪われた自らの本音を口にした。

「あたしは自分自身の手で、それを自覚しないようにしたって  
言うのに………あなたは勝手に自分の記憶を消されて守られて。  
誰よりそれを………自分で嫌がってたバカだから」

誰かの生を犠牲に、自らの死を忘れてまでそこにいた誰かは、  
「ま……こーして、思い出しちゃったからには仕方ないや」

その記憶を封じた自身よりも強かった相手に、ただ笑いかけ。

もういいや——と。

赤い光を放つ目を持った少女は、達観したように笑った。

「あんたよりあたしの方が弱いなんて、癪だし」

今や軀体に負担をかけるばかりの、光の羽を少女は広げ。

少女の周囲には、鋭い刃のような炎を纏う風が吹き荒れる。

「……ミズカ……？」

少年の目にはそれは——炎の色の髪を持った誰かにしか観えず。

たった一つの目的のためだけに、ここまでやって来た誰かは、

「まさか——スリージよりぶち殺したい相手が出来るなんてね」

座り込んでいるままの人形に……その小さな白い手を向けると。

「……水華!？」

咄嗟に銀色の髪で立ち上がった少年が、間に合うはずもない、  
あまりの思い切りの良さで。

少女はその人形——……『神』の宿る、決して手を出しては  
いけない何かを、炎と風の刃で完膚なきまでに分断し。

「あ——……」

ごろんと転がった人形の首は、不思議そうにしながら……ただ、  
安らかな深く青い目を少女に向ける。

「……ありがと……みず、か……」

その声が少女に届いたかもわからない内に。次の瞬間には、  
他のパーツと同じように、激しく首は燃え上がった。

「夢は終わりよ。……お互いにね」

羽からの反動に崩れ落ちた少女は、人形が燃え尽きていくのを、  
見守る事すら出来ない程すぐに。

間違いなく少女へ遷り来た『神』を示すように、急速にその  
透明な羽を白く染められていく。

「あ……まじでコレ、いただけないわ……」

「水華……!」

苦しげに胸を掴む少女は、声の不敵さだけは失わないまま、

「悪い、ユーン……後は頼んだ。ちよつとあたしの代りに、  
スリージぶち殺しといて」

駆け寄った少年を見る事すら出来ずに。

胸を掴む自身の手にある目算と共に最後の魔力を込めると。

「要するに——行き場がなくなれば、あんたの負けよ」

既に自らを侵しつつあった『忘却』に、ただ抗うために。

命の遣り取りに乗じる事で、存在を保ち続ける『神』の——  
唯一の弱点を、あっさり少女は自らの氷の刃で貫いていた。

「……………え？」

銀色の髪の少年は——それがあまりに、信じられない唐突さであり。

「水……華……？」

この場で迷いしかなかった少年には、少女を止める直観の力が働いてくれる事はなく。

一瞬の現界で、すぐにも消え失せていった儂い氷刃で。

自らの胸を貫いた少女の姿に——……ただ茫然と、再び膝を折って座り込む。

「……………ええ？ そんなぁ……………」

出血は多くも、僅かな間で傷口は氷りつき、横向きに倒れ込み。

息を絶ってしまった少女の内から、

「待つて——……消える、私が消える、消えるよお……………」

自らの命を自らが奪う……命の行き先を己として消し合う事が、『神』の行き場を奪い、その『意味』を初期化する方法だと。

「イヤ……助けてラピス、いかないで……………」

それが唯一——命の遣り取りに縛られる神だけを消す道だと、放心したままの少年も否応なく現状を悟り。

白い『神』との短い遣り取りの中で、それに気が付いていた敏い少女の……自らの軀体を引き換えとした勝利だった。

「……………ウソだろ？ 水華……………」

どーせあたしも、十五歳までだしね、と。

呆れながら笑うような誰かの声が、少年は聞こえた気がした。  
「そん……………な……………」

完全に燃え尽き、灰だけが残った人形だったものと。

流れた血で長い髪を紅く染め、全く呼吸をしていない少女と、独り取り残された無力でしかない少年が——

その衝撃と事実を、受け止める暇すら与えてくれずに。

「……………あらら。こんな形で脱落するの？ ……情けないミラ」

『忘却』の影響が消えたために。場に再び姿を現した——

土色の髪の女と、その護衛たる銀色の髪の吸血姫だった。

使えないヒト——と。

開口一番に女は、悪意を隠さず茜色の髪少女を見下ろした。

「貴女には、黄の宝珠を解放してもらおう役目があったのに」  
動けないままの少年の前で、女は少女の横にしゃがみ込むと、

「せめて躰くらいは……何かに使えるかしらね？」

そうして少女の状態を、確認しようとした土色の髪の女を。

しかしそれを——確かに一つの願いを持って、ここまで長い時を過ごしてきた、無力ながらも一途な女を。

「……………は？」

突然背後から、女の胸を貫いた何かに。

女は戸惑ったような顔で、茜色の髪の毛の少女の横に倒れ込んだ。

「……………え？」

絶句する少年が座り込んでいる前で、そうして二人もの誰かが、胸から血を流して倒れ込む事態に。

「……………？」

何一つ躊躇いもなく、冷酷にその手を下した誰かに。

少年はもう驚愕する力すらなく……ただ黙って、その紫暗の髪で深い緑の目の、吸血鬼を見上げていた。

「……………バカね。私がいつまでも、大人しく言う事を聞いてると思ったのかしら？」

つい先程までは、銀色の髪で赤い目だったはずの吸血姫は。

今は年恰好がまず大人の女性となっており……耳も尖らず、無表情ながらもはっきりと、これまで喋れなかったはずの言葉を口にしていた。

「シルファ・セイザーが消えた以上、その子に渡していた命が、私に戻ってくるのは当然でしょう。そんな程度の事も、平和なあなたは予測できなかった？ スリージ・ソイル」

「……………う、あ……………？」

何とか最後の力で横を向いた、土色の髪の毛の女は。

以前に胸を貫かれた時とは違い、今度こそ確実に命を奪う、その氷の刃に……ただ戸惑うように目を丸くし。何が起きたかわからないまま、長い旅をそこで終わらせていたのだった。

「おー。さっすがレイ姉ちゃん、容赦ないねー」

そして楽しい声、続いて場に響く。

「ラピちゃん死んでほしくなかったけど、こうなったらもう、レイ姉ちゃんに起きてもらうのがベストだし。残念だな……せつかくずつと、オレも見逃してたのにね？」

本来は、死を回避しようと悪魔と契約する人間の葬送が仕事の、その死神は——

お役御免とばかり、あっさり寝返る青闇の髪の毛の死神の登場に、紫暗の髪の毛の女性はつまらなげに息をついた。

「御託を並べる暇があれば、さっさとその子達を保護しなさい。少なくともその人形はまだ、再起動可能はずよ」

「あれ。そこまでわかってたんだ、レイ姉ちゃんてば」

「ミラティシア・ゲールとして再起は出来ないでしょうけどね。身体を直せば元通り、人形水火ちゃんくらいは目覚めるでしょ」これまでずっと、吸血姫を通して状況を見守り、そして的確に把握しているらしい女性は。なかなか動こうとしない青年に、それ以上構う気はないと背を向けると。

「……………」

ふっとそこで、座り込んでいる少年を見つめた女性は。

少年が全く知らない、淡く暗い紫の髪と、紅い光を放つ深い緑の目を、しばらく不思議そうに軽く細め。

「……………ありがとう」

「——え？」

いつの間にか、金色の髪に戻っていた少年の前で屈み込むと、視線を合わせながら女性は突然礼を口にした。

「シルファ・セイザー……………貴方達にはラピス・シルファリーを、あの妙な『神』とやらから解放してくれて」

「……………」

「私には出来なかった事だから。私が巻き込んだあの子の事は……………ずっと気になっていたのよ」

少年はそこで——青年が抱きかかえていた茜色の髪の人形を見上げ、首を強く横に振る。

「オレには何も出来なかった。ラピスを助けたのは、ミズカと……………あんただ」

「……………」

女性と目を合わせられず、俯いたまま座り込んでいる少年を。

女性は何を思ったのか——そこで突然、

「……………」

次の瞬間、よいしょと少年は、女性に持ち上げられていた。

「火の島に送ってあげる。貴方達の保護者がここにいるでしょ」

「え——!？」

「私達にはまだ少しここでやるべき事がある。多分もう早々、会う事はないでしょうけど……………貴方の妹とあの人形を、今後もよろしくね」

「……………」

鋭過ぎる気配の探知能力を持った、その女性の言葉が。

何を意味するのか思い出した少年は——光を失っていた剣を強く握り締め。

「これで貴方達の——長い宿題は終わりよ」

温かさは欠片もないのに、何故か懐かしい……………見た目によらず、腕力のある吸血鬼の女性の腕の中で。

そのまま『火の島』に送られるまで、ひたすらポカンとして、抱きかかえられるしかなかった少年だった。

「あんたが……………四天王？」

最後にそれだけ尋ねた金色の髪の少年に。女性は虚ろに笑い、自分はただの鬼となった女だと答え、去ったのだった。

\*



……………

青白い剣の夢が、ただ少年の過去を映す夢に戻っていた後。少年にある夢を送ってきたのが、いったい誰なのか——夢の最後まで、少年にわかる事はなかった。

——…やつと俺も……心置きなく、悪魔になれそうだ——

以前に誰か、少なくとも二人が少年に似ていると言った——白銀の髪の誰かは、かつて自らを封じていた祭壇の前に立ち。

——何をしても、これだけは……俺がやらなきゃな……—

困ったように微笑みながら、硬く意志を定めたその誰かは。誰かがかつて消えてしまった日……誰かの妹をかばい、命を落とした時よりも大人びた姿で、その祭壇まで帰ってきていた。

そして、祭壇の真上に浮かんだ、まるで小さな太陽のように強い光を放つ球体に、誰かは手を差し伸べ——

光に包まれた誰かが、その本来の顔で満足そうに笑った事に……銀色の髪の少年は安堵し、夢を閉じる。

青闇の髪の吸血鬼が、程なく行方不明になったという事を。金色の髪の少年の自宅を訪ねてきた、銀色の髪で赤い目へと

戻った吸血姫は、両手を祈るように握り締めながら語った。「せつかくソール君から解放されたと思ったら、アラス君てば、一人でどこか行っちゃったんです。水火ちゃんだけ何とか、ちゃんと火の島には送ってくれたみたいですけどお……」

「……………」

心配ですうと、軽い口調で憂いげな顔の吸血姫は、これまで喋る事も表情を変える事も出来なかったのが……何故か今では、すっかりその軀を我が物顔に使っており、

「あ、ちなみに私ミカランは、当面レイスウさんの日常代理をする事が決まったのです！ レイスウさんは基本命を節約して引きこもって寝る——という事で、私は遠慮なくこのカラダで、ザイ先生に突撃しろとの事です！」

「……正気の沙汰じゃないな、ホントに」  
帰ったばかりの玄関先で吸血姫を出迎えながら、強く呆れ顔を  
する少年に、吸血姫は照れ臭そうに笑う。

「ちよつと前まで、皆さんの事も苛めてごめんなさい。私も生き残るために必死だったんです——」

「……それは多分、水火に言ってもらった方がいい」  
吸血姫によって自らの存続に関わる魔法杖を折られ、その後  
躯体が不安定になった者を思い浮かべ、少年は無然と呟いた。

それで……と少年は、気になっていた事を口にする。  
『黄輝の宝珠』は結局……封印から解放されたのか？

ぎくりと肩をすくめる吸血姫に、淡々と少年は先を続ける。

「あの神父がそれをやり遂げたんだろ？ ……水華をいつか、黄の守護者にさせてやるために」

「……ほうう。そこまではれていたのですか、あな恐ろしや」

「でも水華が消えたから、あの吸血鬼がそれを持ち逃げしたと。ホントに……完全に消え損だよな、水華も神父も」

大きく溜息をついた少年の背後から、しかしひよこつと――

茜色の髪を鎖骨までたらし、女の子らしい大人しげな上着を羽織る恰好の、紅い目の少女が現れた。

「あれれえ。それなら私に宝珠、くれれば良かったのにねー。ミラの物真似くらいなら私も、いつでも出来るけどなあ？」

にこにここと、まるで何処かの危うげに明るかった少女を真似たように笑う紅い目の少女に、少年は苦い顔を向ける。

「やめてくれ。それでなくてもその口調、オレは嫌なのに」

「ええー。仕方ないでしょ？ 消えたとはいえ、白夜の抜殻は私に受け継がれちゃったんだし……ユーオンがたまに語尾が変になると多分一緒だよ？」

くすくすと、すぐに何かの影響を受ける人形の少女は、現在はそれがブームとばかり……白い誰かの真似をするのだった。

「はわー。水火ちゃんもお元氣そうで何よりですうー」

「ありがと、お母さん。お母さんもお元氣そうで何よりだよ」  
何だこの空虚な会話と、あまりの誠意なさに少年は絶句する。

茜色の髪の少女の、『地』での大きな負傷の後で。

ディアルスから呼び出した妖精の魔女の力で、何とか少女の躯体の傷は癒されたのだが。

「もう羽は無いんですねえ？ 惜しいですー、飛べないですねえ」

「無い事は無いけど、もう光は戻らないかな。ミラも眠りたいだろうし……後は私が、自分で動くしかないのかなあー」

あくまで虚ろな笑顔のままの紅い目の少女は、これまでそれごとにかく面倒で、羽の主に自我の手綱を渡していたといい、

「白夜に負けて、ミラが消えなかっただけでも僥倖かなあ」

自身の躯体を横から動かしていた相手でありながら、それこそ良しとしたように。紅い目の少女は目覚めた時から笑っていた。

「まあ当分は……私もしなきゃいけない事があるしね？」

ちらりと屋内を見やる紅い目の少女の視線の先――

もう一人の、その家の子供が廊下を通り過ぎていき。

「ああー、もう動けるんですかあ？ 旧ピアスちゃん！」

その姿に気付いた吸血姫が、驚いたようにぶんぶんと手を振り。

子供は無表情のまま振り返り、玄関先へと顔を出した。

「……………」

「こんにちは、お久しぶりですうー、旧ピアスちゃん」

瑠璃色の長い髪を一つに、黒いリボンで束ねる子供は、灰色の猫のぬいぐるみを抱え、深い青の目を無機質に吸血姫に向け。

その横でぼんぼんと茜色の髪の毛の少女が、ぬいぐるみを抱える相手の頭を樂しげに撫で叩いた。

「もう喋れるくらいになったよねえ？ エルフイ」

「……」

「その躰とはとっても相性良かったんだから、遠慮しないで、思う存分使っていいたんだよ？」

にこにこと、空虚な微笑みを向ける相手に、あくまでその――

瑠璃色の髪で青い目の幼子は、反応に困るような視線を向ける。

「……まだあんまり無理するな、エル」

その瑠璃色の髪の毛の幼子に対し、少年は困ったような顔で笑い。

人間の躰という最大の依り代を得ていた古い命が、現在そこでそうして在る理由を――

黒い柄から透明な玉を失った、腰元の剣を見やりながら。

銀色の髪の毛の少年から託された願いを、改めて思い出していた。

その剣は、水脈を司る化け物の力を受けるために造られ……化け物をヒトの形とする眼か、命の力を核とする宝剣であり。

「――確かに、間違いなく……あのコはここにいな」

ある古い命が宿った赤い鎧を、完膚なきまでに破壊していた

その黒い柄の剣には、剣の持ち主がそれを目論んでいた通りに、赤い鎧から剣へ、そこに宿した命を奪い遷されていた。

「この剣は元々、ヒトの命を蓄える剣なんだ。だからこれなら……エルの命を受け止めて、この玉に還せたはずなんだ」

銀色の髪の毛の少年は、少年がここまで待ち続けた理由――

暗い海の底に眠りながら、守り切った一つの宝の事を、その『力』を見る眼を持った男に伝える。

「これは確か……竜の眼だつて、誰かは言ってた気がするけど」

黒い蛇のような柄の中心に填まる透明な玉は、それも少年と

同じ化け物の眼であり。本来はその場所には無く、少年が剣と

なる前に身に着けていた事で、剣の一部となった玉だった。

「俺はこれをエルからもらったんだけど。エルはずっとこれを身に着けてたから……これはもう、エルの眼でもあるんだ」

そしてその眼はその血の流れる、自然の脅威である化け物に、

ヒトの形……ヒトとしての命を与える事が本来の機能であり、

「確かに、この竜の眼を使えば……ここにあるラピスの体を、回復させる事が出来る」

既に命を失っていた人間の養女の体を……どんな回復魔法でも戻せないはずの寿命無き身を、その眼の力ならヒトに戻す事が出来るかと男は息を飲んだ。

遠い昔その眼の力で蘇生した、銀色の髪の毛の少年と同じように。

それというのも――

「ラピスの中には、既に半分……『神』混じりのラピスを手にかけたあのコの命が、取り込まれつつある」

『神』と共存していた人間を殺した事で、『神』を己が躯体に迎えた人形に元いた命は、剣へ遷った事で『神』には侵されず、命の繋がりだけを得て。『神』が宿っていた人間の体に、その繋がりで命を引き寄せられる事になっていた。

「鎧から剣、剣からラピスに……あのコの命がラピスの中なら。魂さえ戻れば……ラピスの体を使って、あのコは今後、普通の人間として生きていく事が出来るだろう」

「……うん。命も魂も、ある場所はわかっているから……」

それがたとえ——遙か遠い昔に死した運命に逆らう、通常は考えられない、呪われた生の在り方であったとしても。

「生まれ変わりじゃなくて……本当のエルが、還ってくる」

そのためだけに、長い時を越えてきた銀色の髪の少年は。魂の在処として見定めていた灰色の猫のぬいぐるみ——その黒の大きな両目を作る、頭の内に包まれたある秘宝……竜の眼よりも稀少な、竜珠と呼ばれる命と力の珠玉の存在に。

その二つが揃うなら、それが出来るはずとわかってきた己の記憶を……その時確実に、ほぼ全てを取り戻していた。

「……ラピスは多分……それを望むと思う」

その瑠璃色の髪の少女の遺体を利用する事を——

銀色の髪の少年は俯きながらも、はっきりと宣言する。

「多分……そうしてくれって、ラピスなら言うと思うから」

——私がいた事に、一つでいいから……意味があればいいのに——

剣を失い、眠り続けていた少年の傍ら、本当の妹たる人形に遠慮しながらも少年に付き添う……そんな瑠璃色の髪の少女を気遣う様子を見せた、魂無き人形だった妹に。

瑠璃色の髪の少女が、拙い真の弱音を、その時は口に出出来ていた事を……少年は知っていた。

「……そうだな」

その幸薄い養女を失った事を、強く痛んでいる男も——

「ラピスから俺達への……最大の贈り物なのかもしれない」  
どの道いつか消えていたはずの人間の少女が、辛うじてそこで、身体だけでも存在を繋いでいける事を。

『忘却』という神が消えた後、本来掴んでいた相手の性質を、やっと思いつ出していった男は、

「ラピスはいつだって……俺達の前から、本当は消えたがっていたんだから」

それを留めていたのは、他ならぬ自分達であると。

それでも彼らを慕い続けてくれた養女が、ようやく安らぎを得た事を思うように。男はその養女の中に……養女自身でなく、少年の妹を呼び戻す決意をそこで固めていた。

そして何故か——髪が伸び、幼子となり目を覚ました少女は。

「……あのね、兄さん」

吸血姫が帰った後に、唐突に口を開いたその妹は。

彼らが今座る縁側で、魂の在処たる灰色の猫のぬいぐるみを、大事そうに抱えながら……隣に座った少年を無表情に見つめる。

「ソールは結局……どうなったの？」

「——ああ。とりあえずは、パルシイ……ディアルスの王子に戻れないか、これからこっそり調べられるらしい」

……そつかと。自らの魂を自我として使いながら、命が違った誰かを思い目を伏せる妹に、少年は穏やかに笑いかける。

「エルはどれだけ、あいつの時の事を覚えてるんだ？」

「……………」

特に他意はなく尋ねる金色の髪の少年に、瑠璃色の髪の妹は、やはり他意無く真実を答える。

「全部覚えてるし、全部わたしの意思でもあるよ……だって、わたしも本当に、あのヒト達の力になりたかった」

「……………」

「パルはずっと一人ぼっちで、淋しくて、わたしと一緒に……だからわたし達はみんなソールになったから。ルシウもシアも、優しくなったから……助けになりたかった……」

その純粋な思いが、誰かに利用されるものであっても。

どれだけ長い時を経て、心を失わなかった妹の直向きさに、少年はただ穏やかに微笑む。

妹もそんな少年を見上げ、本来なら望むべくもなかった——

かつては少女に刃を向けた兄との、時を越えた有り得ない再会

……その兄がただ、笑ってくれている奇跡に、

「わたしは……ずっと、兄さんに会いたかったよ」

金色の髪の兄も、銀色の髪の兄も、全く違和感なく受け入れた青い目の少女は。

ほとんど姿を現さない銀色の髪の兄を少し惜しみながら……ただ素直に甘えるように、その胸にもたれかかっていた。

そうしてこの世へ戻ってきた、かつての赤い天使に、心から

少年は安堵しながら。  
ここまで、長い時を待ち続けた役目を終えた少年は……ただ

その身の引き際について、ふと思いを馳せる。

今はまた剣に取り付けた妖精の羽が、元の形を取り戻すなら。

それがこの身を返すタイミングだという変らない思いや。

——知ってるよ？ もう長くない状態だってこと——

命であり力である黒の珠玉と、ヒトの体を保てる眼の両方を

揃え、『神』たる素因すら得ていた妹とは違い。

剣に渡された自身の眼の力が、残り少ない状態の少年は……それがこの少年の終わりの時だと、当たり前前にわかっていたが。

「……それはこれから、何とかしようよ、兄さん」

少年と同じ、もしくはそれ以上に現状把握に優れている妹は、その諦観をあつさりと否定する。

「わたしがこうして、ここにいるんだよ。もう違うヒトだけど、父さんだっけていてくれるんだから……きつと何とかなるよ」

「……とりあえず先に、アフィを助けなきゃだけどな」

苦笑う少年は、既にその覚悟——……灰色の目の男と共に、『魔界』で消えてしまったという男の連れ合いを連れ戻すため、協力する事を心に決めていた。

それは母だと、見知らぬ相手を既に受け入れている妹は、

「うん。わたしには、水火がいてくれるから……母さんの事、お願いするね、兄さん」

少年達が留守にする間は、瑠璃色の髪の毛の妹を守ってくれど、虚ろに微笑む茜色の髪の毛の少女の事も心から慕うように。

まだ笑顔を作れる程には馴染んでいない躰でも、確かに妹は——暗い青の目に揺るぎなき希望の火を燈し、新たに得た生を心から喜ぶ顔で、少年を見上げたのだった。

それがどれだけ、凄惨で呪われた在り方だったとしても。

最早彼らは——決して死者ではないと、その目で示すように。

何かの予感に誘われて、金色の髪の毛の少年はその夜——一人きりで瓦の屋根の上上がり。

有り得ない誰かの姿を、そこに幻視していた。

「——なにしょげてんのよ？ ユーオン」

「……………」

明るく満月の下には、いつかと同じ、不敵な顔で佇む——透明な翼を広げる、茜色の髪の毛の少女の姿があり。

「……………水、華？」

その姿に何故か、銀色の髪で赤い目の少年の姿が被り。有り得なかった誰かの夢が、そこで再び少年を襲う。

——助けて……水華——…………——

それは有り得なかった世界というより——

有り得てほしかった世界の幻なのだと、少年は知っていた。

その世界は、瑠璃色の髪の毛の少女と少女の両親の命が失われていない、理不尽に命を失った誰もがきつと願ってしまう夢で。

いつか消えると知っていた者がいなくなる事すら、こんなに痛いのだと……今も少年を嘔吐させる生への執着だった。

そんな幻を否定するように、茜色の髪の毛の少女は穏やかに笑う。

「言ったでしょ？ ミラの物真似くらい、いつでも出来るって」

「……………」

「物真似って気付いてない時の方が、楽しかったけどね。まだクアンにも会いに行きたいし、たまには水華に戻るつもり」

『神』を殺す事と引き換えに光を失い、本当の意味ではもう戻らない、強気な誰かの残滓を纏い……紅一色となった目を、少女はただ月明かりに晒す。

紅い目の少女と、赤い目の少年。同じ起源を持った彼らに、家族のように心許せた瑠璃色の髪の少女の、拙い幸せは——

どちらの世界でも失われる、同じ結末を迎えたのだと。結局何処にも、平穏な幸せの世界などなかったと示すように。

「オレは……何も、出来なかった」

「——ん？」

笑顔で屋根に座り、月を見上げる少女の横に立ち尽くす少年は、いつかと同じ諦観を口にする。

「……弱いつて。ラク、なんだな……………」

今ここで少年が辛うじて、呪われた生を繋いで。大切な者を取り戻す形で物事を運べた理由は——

「オレが何もしなかったから……水華が全部引き受けたんだ」  
その昏く赤い夢が観えていても、手を出すことが出来なかった弱小さだと悟るしかなく。

一連の騒動は少年にとっては——様々な事が終結を迎えた、あつという間の出来事だった。

「アンタがそう思いたいなら、思っただけでいいよ。ユーオン」

ふふふんと、その少女らしい余裕さを演出する微笑みと共に、茜色の髪の少女は少年を見上げる。

「でもあたしはアンタの事、嫌いじゃなかったよ」  
「……………」

「アンタだったら背中を預けられるかな。これからは一緒に、可愛いエルフイを守っていかなくちゃだしね」

そんな素直さがまず有り得ない茜色の髪の少女は、おそらく今後……その髪も紅と戻っていくのだろうと、少年は悟る。

「何で……あんたがエルを守るんだ？」

わかりきった問いを、そこで少年はあえて尋ねた。

「だってラピの望みでしょ。ミラだって結局、自分の目的より最後にはラピを優先したわけだし」

復讐のためにだけ来た誰かの、それは一つの救いだっただと。昏く赤い夢に心奪われた者、全ての終着駅がその少女だった。

「……そうだな。ここまでして、生かしたんだから……」

今まさに少年を襲う、絶え間ない吐き気と引き換えに——  
「何をしても、もう誰にも——……………エルは、殺させない」

これ以後に何度となく少年を襲う、何よりも赤い剣の夢……避けられない運命の到来が、その片鱗を表し始め。

「そう来なきやね？ あたしももう——遠慮はしないから」  
赤と紅を浴びた呪われし同胞達の歩みが、この夜から始まる。

……おやおや——と。

己をかつて取り込んだ『神』の、消長を感じた空ろな何かは。ようやく自身を離れた者の気配も感じ、ただ苦く笑った。

「それでいいのかな……？ シーちゃん」

その神と共に、瑠璃色の髪の少女の内に同居した時があった何かは。少女の命を奪った少女の母と、少女に出来た繋がりでも母の内へ移動する事で、神から解放された何かだった。

「シルフィは確かに……シーちゃんを待ったために私といたけど」自ら命を絶った母の躰をそこで貰い受け、目覚めた何かは。生き物ではないが、神でもない抜け殻としてそこに在った。

「それはほんとに……愛と認めちゃってもいいのかな？」

行き場がないと泣いた少女は——それでも最後には、少女を待ち続けていた母に出迎えられたのだろうと。

何処までが狂気で、何処からが親心なのかもわからない者に、最後だけは……少女の行き場は用意されていた。

遠い昔に時の止まった少女に、それ以外に救いは無いと——生無きものの哀しみを、何かはただ憐れみながら。

「……どうしようね？ くーちゃん達には、忘れてもらうの？」

少女の姿でも少女でない者がいる現実も考え、『忘却』程の事は出来ない何かも、少女の唯一の願いを思う。

「シーちゃんがもういない事だけ、記憶出来ないようにする？」それを誰か達がこの先、知る事そのものが出来ないようにと。女はただ、消えゆく少女の望み通り、忘我のカギを回す——

## C r y    p e r    B / R A .

—red ablution—

C 2 ・ 終 盤      了